彼女はボクのアイドル

masa-KY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女はボクのアイドル

【Ｎコード】
Ｎ３９２８Ｘ

【作者名】
ｍａｓａ－ＫＹ

【あらすじ】
ごく普通の男子高校生と、スーパーアイドルの少女との、甘酸っぱくて、ちょっとほろ苦いおはなし。

0．登場人物（前書き）

制作：１９９９年９月
改訂：２０１１年１０月

0．登場人物

【　登場人物　】

・唐草潤太（カラクサジュンタ）　１７歳　絵画に没頭する高校３年生

ごく一般的な家庭で育った、ごく一般的な高校生。
趣味は絵を描くことで、風景画を描くことが大好きである。その実力は、ちょっとした風景画コンテストで佳作を取るほどの腕前だ。
偶然、超売れっ子アイドルの夢百合香稟と街で出会ってから、彼女との禁断の交友録が始まってしまう。
決して積極的ではないが、心の奥にあるやさしさは、人一倍優れたものを持っている。

・夢百合香稟（ユメユリカリン）（芸名）　１７歳　超売れっ子なスーパーアイドル
信楽由里（シガラキユリ）（本名）
夢野香（ユメノユリ）（別名）

高校生の時、芸能プロダクションにスカウトされて、アイドルとなった愛らしい女の子。
芸能界の縛られた世界に嫌気が差し、移動中の車から脱走して、偶然にも唐草潤太と巡り合い、彼との密かな付き合いが始まった。
テレビの世界での芸名と、本名、そして唐草潤太と一緒にいる時に使う別名と、３つの名前を使い分けている。
唐草潤太との触れ合いによって、少しずつ心の中にある真実に目覚めていくことになる。

・新羅今日子（シラギキョウコ）　２８歳　芸能事務所の鬼マネージャー

夢百合香稟が所属する芸能事務所「新羅プロダクション」の敏腕マネージャーであり、「新羅プロダクション」社長の一人娘でもある。
過去に夢百合香稟同様、アイドルだった経歴を持っている。
香稟に対しては、愛情を持って厳しく当たるが、心の奥では、彼女を身内のように気遣うやさしい心の持ち主だ。

・連章琢巳（レンショウタクミ）　２６歳　女の子にモテモテの若き人気タレント

芸能事務所「レンショウ・カンパニー」に所属する人気タレントであり、事務所の社長の実の息子でもある。
非常に女癖が悪く、芸能界でもうわさ話の絶えない男で、輝かしいアイドルの夢百合香稟に目を付けて、彼女を自分のものにしようと企む。

・九埼（クサキ）まりみ　２３歳　夢百合香稟の所属する事務所の先輩

「新羅プロダクション」に所属するうだつの上がらない女優。
夢百合香稟より先に芸能界入りしたものの、なかなか芽が出ないことで、彼女に激しい嫉妬心を抱く。

・唐草拳太（カラクサケンタ）　１４歳　唐草潤太の弟

兄と違って好奇心旺盛な中学生。
芸能に関しては精通しているため、人気爆発の夢百合香稟のファンを自負している。

・色沼龍一（シキヌマリュウイチ）・浜柄晋（ハマガラシン）　１７歳　唐草潤太のクラスメイト

唐草潤太とは友人であり、古い付き合いの二人。

いろいろな面でお節介を焼きまくるが、心底唐草潤太を気に掛けるいい仲間達である。

1．男と女の出会う街角

「いやぁ、やっぱりかわいいよなぁ、香稟ちゃんは！」
「ん、カリン！？カリンって果物のことか？」
「何言ってんのさ！ほら、テレビに映ってる女の子だよ！」
ここには、テレビの話題で会話する、ごく普通の少年二人がいる。
その内の一人は、素知らぬ顔でテレビに目を向ける。
もう一方は、そのテレビを見つめる少年に向かって、呆れた顔を見せつけている。
「へぇ・・・。この子がカリンちゃんなのか？」
「そうだよ！夢百合香稟っていって、今世紀最後のスーパーアイドルだよ！」
「ふ～ん。」
興味なさそうな表情で、テレビから視線を逸らした少年。
彼の名は、唐草潤太という。現在、高校3年生の１７歳である。
彼のすぐ側にいるもう一人の少年は、彼の弟である唐草拳太、現在１４歳、中学生である。
兄弟二人は、自宅の居間にて、それぞれの時間を過ごしていた。
兄の潤太は、何やら写真の載った分厚い本を床に広げて、横になって眺めている。一方の弟の拳太は、テレビの人気歌番組を食い入るように眺めている。
ここでは、それぞれのごく普通の楽しい一時が繰り広げられていたようだ。
テレビのブラウン管を通して流れる、人気スーパーアイドルの曲、声、そのすべてが、遙か彼方からしか聞けないと思うのが普通であろう。
ところが、そんな固定概念を覆すほどのとんでもない出来事が訪れることを、今の二人は知る由もなかったのである。

＊　◇　＊

ここは某テレビ局。

ここでは、高視聴率をほこる人気歌番組の生放送が行われていた。

放映時間が終わると、一人の人気アイドルが、周りのスタッフに声を掛けられながら、早足で控え室へと向かう。

彼女は控え室へ戻るなり、その場に待機していた彼女専属のメイク係の側へとやって来た。

「お疲れさまでした～。」

その専属メイク係は、目の前の椅子に腰掛けた、その人気アイドルの髪の毛をとかし始める。

「今日の曲は、新曲なんですってね。いい曲でしたよ。」

正面の鏡に映る人気アイドルに向かって、専属メイク係は笑顔でささやいた。

「ありがとうございます・・・。」

少し元気のないお礼を口にした人気アイドルは、控え室に備え付けてあるテレビを横目で眺めていた。

そのテレビはある特集をしている。その特集とは、今時の女子高生相手の街頭インタビューであった。

「最近のお楽しみスポットを教えて下さい？」

「え～っとねぇ、やっぱ、渋谷かなぁ。あとね、原宿の表参道もいいよねぇ。」

「そうそう。やっぱそんな感じぃ～ってとこかな。」

真っ黒に日焼けした女子高生は、満面の笑みでインタビューに答えている。テレビのブラウン管越しに流れるその姿を、人気アイドルは無言のまま見つめていた。

「いいですね。あの高校生達・・・。」

「え、何か言いました？」

「・・・ううん。何でもないです。」

何気ない一言をボソッとささやいたのは、今世紀最後の人気スーパーアイドル、夢百合香稟であった。いったい彼女は、何を伝えよ

うとしていたのだろうか・・・？

◇

「お疲れさま、香稟。今日はこれでお仕事終わりよ。一応、明日のスケジュールだけ伝えておくわね。」

クールに澄ました表情の女性が、テレビ局から走り出した社用車に乗る夢百合香稟に話しかけた。

そのクールな女性とは、香稟の専属マネージャーの新羅今日子である。

「明日は、朝8時から週刊誌の表紙の撮影、その後、朝日出版と写真集の打ち合わせでしょ。それが終わったら、今度はサンテレビでの収録があるわ。あ、そうそう、その間にね、あけぼのドリンクスのＣＭ撮影の打ち合わせがあるんだったわ。」

出るわ出るわと、香稟の多忙なスケジュールが明かされた。

香稟は浮かない顔のまま、隣の新羅の話を聞いている。

「どうかしたの？今日はヤケに元気ないじゃない？」

「・・・・・・。」

ついうつむいてしまった香稟。彼女は蚊の泣くような声で、隣にいるマネージャーに語りかける。

「明日も・・・。あたし、明日もお休みないんですね。きっと、明後日もそうなんですね・・・。」

「え！？何それ、どういう意味よ？」

言葉の意味が理解できない新羅は、少し怒り口調で彼女に問い返した。

「あたしは、ちゃんと学校に行っていれば高校3年生です。普通だったら、友達と街へ出掛けて、いろいろなところで楽しく遊んでる時期ですよね。それなのにあたしは・・・。来る日も来る日も仕事ばかりで、まともにお休みも取れない・・・。」

「香稟、あなた・・・。」

新羅は呆気にとられて、彼女の想いなど理解できない様子だ。

「何言ってるのよ。あなたはこの芸能界で最高のスーパーアイドルなのよ。他の高校生と一緒の生活なんてする女の子じゃないのよ。それに、ヒマがないほど忙しいのは、人気がある証拠じゃない。この芸能界にはね、あなたと違っていつまでも芽の出ないアイドルだっていっぱいいるんだから。ふざけたこと言っちゃダメじゃない！」

その厳しい言葉に、香稟は涙を浮かべて訴える。

「それじゃあ、あたしは周りにいる同じ高校生とは違う人種なんですか！？その子達と同じように、楽しく遊んだり、どこか出掛けたりしちゃいけないんですか！？そんなのおかしいわ。あたしだって、みんなと同じように生まれてきたのに・・・！」

困惑めいた表情をする新羅。彼女は、泣き叫ぶ香稟をなだめようとする。

「いったいどうしたって言うの？いきなり今日になって、そんなこと言うなんて・・・。今まで、芸能生活が楽しいって、あなた自身あんなに喜んでたじゃない。」

新羅から視線を逸らす香稟。彼女は、涙目を虚空に浮かべている。

「最近・・・。ううん、もっと前から何となく感じてました。あたしにとって、アイドルと呼ばれることの意味って何なんだろうって・・・。所詮は、人を喜ばせて楽しませてるだけ。肝心のあたしの楽しみはどうなるんだろうって・・・。」

新羅は納得できず、憤りを抑えきれなくなっていた。

「それは、あなたの屁理屈に過ぎないわ。芸能界に籍を置く者は、みんなそうやって生きてるのよ。決してあなただけじゃないわ。」

「わかってます・・・。あたしだって、人前で好きなだけ歌が歌えたらどんなに素敵だろうって、そう思っていたからこそ、この芸能界へ入ったんですから。」

若き少女は、芸能人という自分の立場を悔いている。しかしその気持ちは、どう言葉を並べても、結局は言い訳にしか聞こえない空しい言葉でもあった。

「とにかく、香稟。今後、そういう話はしないでくれる？あなたに

は、わたしのなし得なかった夢がかかってるのよ。お願いだから、もうそんな思いを抱かないでちょうだい。」
香稟は、マネージャーの説教じみたセリフに、口を閉ざしたままうなずいた。彼女はこれ以上、不平不満を口にできる状況ではなかった。
そして、二人を乗せた社用車は、夜のネオン街を走り抜けていった。

＊　◇　＊

とある日曜日のこと。
ここは、東京都杉並区にある「唐草」と書かれた表札を掲げる家である。
「あれ、母さんは？」
「さっき出掛けたよ。何でも近所のスーパー大安売りなんだってさ。」
「ふ～ん。」
大きなスケッチブックを腕に挟ませて、ブルーのリュックサックを背負った唐草潤太は、居間で寝転がっている弟の拳太に声を掛けた。
その格好からして、潤太はどこかに出掛けるようである。
「それじゃあ、ボク出掛けるから。母さんに伝えておいてくれよ。」
「出掛けるって・・・。兄貴ぃ～。またアレかよぉ。」
「うるさいな。おまえには関係ないだろぉ！」
潤太は、弟の拳太に呆れられつつ、自宅を飛び出していった。

◇

唐草潤太は、最寄りの駅から電車へと乗り込み、ゴミゴミした都内を離れていく。
彼の目指す場所は、東京都内から少し離れた、自然に囲まれたすがすがしい場所だった。

電車を降りてから徒歩３０分ほど、その目的地が彼の目に飛び込んだ。
「はぁ、やっと着いたぁ。」
そこは、緩やかな坂を登ったところにある、小さな公園であった。
彼は到着するなり、辺りをキョロキョロ見渡し始めた。
「あ、ここだここだ。」
彼は何かを見つけたように、その場所にあるベンチへと腰掛けて、おもむろにスケッチブックを広げた。彼はいったい何を始める気なのだろうか？
「よーし、今日はこの天気のおかげで、ボクのイメージ通りのいい絵が描けそうだな。」
そうである。彼はこの場所へ、趣味である風景画を描きに来たのである。
唐草潤太は高校２年生の時、ある絵画展へ風景画を出展し、なんと佳作をもらった経験があるほどの腕前なのだ。
学校内では、勉学や運動ではさえない彼だが、これまた美術とあらば、ずば抜けた才能を発揮する少年である。ちなみに美術の成績は、ほぼ高判定をキープしているのだ。
そんな彼の紹介をしている内も、彼はものすごい勢いで風景を描写し続ける。
彼の持つスケッチブックには、公園に雄大にたたずむ木々と、その脇におとなしく佇む花壇が描かれていた。
彼は絵を描き始めると、周りに泣き叫ぶ子供がいようが、イチャつくカップルがいようが、人に向かって吠えまくる犬がいようが、あまつさえ、首を振って群れる鳩の集団がいようとも、決して彼の手は止まることはなかった。それはまさに、絵画の世界に入り込んでいたと言っても過言ではないだろう。
ところが、そんな彼の手を止める忌々しい集団が現れてしまった。
「あ。マジかよぉ・・・。」
それは、彼のモチーフである花壇の中で遊び始めた幼い子供達だ

った。
彼は、モチーフの中に邪魔者が存在すると、その絵を描くことを止めてしまうのだ。それがどうも、彼自身のこだわりのようである。
「まいったなぁ・・・。これじゃあ、花壇の絵が完成しないよぉ。とはいうものの、あんな子供相手に、出ていけなんて言えないしなぁ・・・。」
彼はひたすら苦悩する。
結局、彼はここまでの仕上がりで、今日のスケッチを終えることとなってしまった。
「ふぅ・・・。しょうがないな今日は。あ、そうだそうだ、帰るついでに絵の具でも買って帰ろうっと。」

＊　◇　＊

その頃都内では、シャドウのかかったウインドウに覆われた自動車が、混み合う車道をくぐり抜けている。
その自動車には、これからテレビの収録に向かうアイドル、夢百合香稟と、そのマネージャーである新羅今日子が乗車していた。
激しく混み合う渋滞の中で、その社用車はノロノロ運転を続けていた。
「もう！今日はやけに混んでるわね。ねぇ、早乙女クン！もう少しいい道ないの？このままじゃ、収録時間に遅れちゃうわよ。」
「いやぁ、この街道はほとんど抜け道がなくって、ははは・・・。」
「笑い事じゃないわ、何とかしなさいよ。香稟が収録に遅れたら、プロデューサーさんに悪い印象与え兼ねないわ。」
「新羅さん、無茶言わないで下さいよぉ～。それに、この街道に抜け道があったら、こんなに混むわけないじゃないですかぁ。」
新羅と社用車の運転手は、怒りと苛立ちの混じり合う言葉を投げ合っていた。しかし、そんなじゃれ合いをしていても、このピンチを切り抜けられるわけでもない。
社用車は走っては止まり、また走っては止まりを繰り返し、いっ

こうにテレビ局まで辿り着かない。
新羅は頭を抱えて、後部座席のシートにうなだれてしまった。
「はぁ～。ＣＭの打ち合わせが思ったより延びちゃったからなぁ・・・。どうしようかしら、もう。」
苦悶している新羅を後目に、隣にいる香稟は、シャドウがかかった車窓から辺りの景色を見つめていた。
そんな彼女の視界に入ったもの・・・。今風の衣装に身を包んだ少女達。街路樹の脇でたむろっている少年達。仲良さそうに、腕組みしながら寄り添い合うカップル達。
そのすべては、今の彼女にとって、あまりにも新鮮でうらやましく思える光景だった。
彼女の心の中には、自由という希望だけが渦巻いていた。
「よし、決めた！」
彼女は心の中でつぶやいた。そのつぶやきは、大胆かつ衝撃的な行動を示唆していたのだ。
彼女を乗せた社用車が、目の前の信号機の赤ランプに照らされた。
「ああ、また信号ストップじゃないのぉ！もうこれじゃあ、間に合わないわよぉ！」
「しょうがないですよ。こればっかりは無視できませんしねぇ。」
その瞬間だった！
香稟はいきなりドアのロックを外して、勢いよくドアをこじ開けた。
「え！？」
何が起きたのかと驚く新羅。しかし、時すでに遅し。
香稟はドアから抜け出して、自由の世界へ飛び出してしまったのだ。
「ちょ、ちょっと、香稟、あなた何してるの！？」
呆然とした顔で叫ぶ新羅に、香稟は振り向き様に手を合わせた。
「新羅さん、ゴメンなさい！今日だけ、今日一日だけ、あたしに自由時間を下さい！お願い、あたしのワガママを許して！」

「待ちなさい、香稟ー！」
思いっきり手を伸ばした新羅だったが、その手は空しく空気を掴む。
社用車から逃げ出した香稟は、街路樹を仕切る柵を飛び越えて、人混みの歩道へと姿を消していった。
「探すのよ、早乙女～！何としても香稟を見つけなさ～い！」
「は、はいです～！」
鬼の形相で大声を上げた新羅に指示されるがまま、その運転手は青信号と同時にフルアクセルで発進した。とはいうものの・・・。
結局、社用車は数メートル進んで停止する運命であった。
「この渋滞じゃあ、車だとどうしようもなかったわね・・・。こうなったら、わたしが探すしかないじゃないのよ！」
新羅は社用車から勢いよく飛び出し、失踪したアイドルの捜索へと走り出していった。

◇

都内新宿である。
自由の世界へとやって来た香稟は、人目を気にしながら、歩道沿いの雑貨屋へと駆け込んだ。
さすがは売れっ子アイドルだけに、気付かれたらどうなるか知れたものじゃないと思ったのか、彼女は変装するための帽子とサングラスを、少ないポケットマネーで購入した。
彼女は素早く変装して、普段歩き慣れない歩道へと現れた。彼女はまさに、下界に舞い降りた天使そのものであった。
行き交う人々に流されるように、彼女は見知らぬ街を散策し始めた。
「信じられないな。3年前までは、こんな道を普通に歩いていたはずなのに。何だか体が宙を浮いてるみたい・・・。不思議～。」
彼女は、すっかり忘れかけていた学生時代を思い起こしながら歩いていた。

何百人といった人間で溢れる新宿駅付近。辺りを見渡しながら歩く彼女は、新宿駅の側にある大きなテレビモニターに目を向ける。
「あ！あたしが映ってる。」
そのテレビモニターには、香稟が映っているＣＭがたまたま放映されていた。
何十回も見ているシーンにも関わらず、彼女はモニター越しの自分自身を、まるで他人を見るように眺めていた。
ちょうど彼女の側には、若い男の子二人組が、その流れるＣＭを眺めていた。
「おお、やっぱり夢百合香稟ってかわいいじゃん！？」
「えぇ？そうかなぁ。オレは末広竜子のほうがいいけどなぁ。」
「スエヒロより絶対いいぜ、香稟はさぁ！おまえの目腐ってんじゃねぇの！？」
「何ぃ～！？おまえの方がおっかしいぜ。絶対スエヒロだっ！」
そんな言い合いをする二人の正面を、香稟はクスクス笑いながら横切る。
その二人はまさか、話のネタとなった張本人が、自分達の真ん前を横切ったことなど、とても想像できなかったであろう。
彼女はその後、一人のごく普通の少女として、ぶらぶら街中を突き進んでいく。
深々とかぶる赤色の帽子、厚手レンズのサングラス、彼女の変装は、予想以上に完璧に見えた、が、しかし・・・。やはり彼女は、伊達にスーパーアイドルと呼ばれてはいなかった。
彼女とすれ違う若者達が、うっすらと彼女の正体に気付き始めていたのだ。
怪しまれないように、うつむき加減で歩き続ける香稟。
しかし、若者達とすれ違うたびに、彼女の名前がかすかに聞こえてくる。
まずい、このままじゃ気付かれる！そう察知した彼女の足取りは、心なしか小走り気味であった。

その足は、一歩、また一歩と速くなっていく。
「！」
そんな最中であった。
香稟は、背後からとてつもない悪寒を感じ取った。
思わず立ち止まった彼女は、心拍数をあげながら、静かに顔を後ろへ向けていく・・・。
「！！」
なんと彼女の背後には、数十人、いや百人はいるかも知れないほどの若者たちで埋め尽くされていたのだ。
無論、それは彼女がスーパーアイドルの夢百合香稟ではないか？と疑う者達の集団だったのだろう。
彼女はその惨状に圧倒されて、ただその場に立ちつくしている。
「あ、やっぱり香稟ちゃんだぁ！！」
その集団の内の一人の声は、このあとの地獄絵図を知らせていた。
その一声に触発された若者達が、ドッと彼女に、まるで津波のように押し寄せてきたのだ。
「逃げなきゃ！」
サインを求める者、握手を要求する者、おまけに体に触れようとする者までいる。
「来ないでぇ！！」
香稟は両手を振り回しながら、猛ダッシュで走り出した。もちろん、その集団は彼女を追いかける。
彼女は必死になって逃げまどう。それを追い続ける若者達。それはもう、映画の世界の「ゾンビ」を彷彿とさせていた。
「はぁ、はぁ・・・。」
息を切らせて走り続ける香稟。彼女は運がよかった。
大きな交差点の横断歩道を渡り切ったあと、信号機の色がタイミングよく赤となり、横断歩道の前で立ち往生した若者達の群れから、彼女は何とか逃げ切れたのだった。
彼女はこの隙に、素早く細い路地へと駆け込む。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・。こ、ここまで来れば・・・。」
薄暗い路地へと入り込んだ彼女は、壁に手を当てながら激しい息を吐き続けた。
「まいったなぁ。あたしって、そんなに人気があったんだ・・・。」
彼女はますます、スーパーアイドルという自分の肩書きに嫌気が差していたようだ。
その場で5分ほど、落ち着きを取り戻した彼女は、ゆっくりと細い路地を抜けていく。
辺りを警戒しながら、彼女は恐る恐る人混みの中へと紛れていった。
「ここには、さっきの人たちはいないみたいね・・・。ホッ。」
彼女は肩をなで下ろす。その姿は、まるで警察官に追われる犯罪者のようにも見える。
彼女はさっきよりもゆとりのある足取りで、真っ直ぐな歩道を歩き続けた。
すると・・・！
「あ、今日子さんだ！」
香稟の向かう先には、血眼になって彼女の行方を追う、鬼マネージャーの新羅の姿があった。
まだこの下界を満喫し切れていない彼女は、新羅の追撃をかわそうと、焦る思いで隠れる場所を目で追った。
しかし、相手がまずかった。新羅は、さすがにデビュー当時から彼女のマネージャーをしているだけに、変装している彼女に気付いたようだ。
「ま、まずい！」
心の中でそう叫ぶ香稟は、隠れる場所を横目で探しながら、ゆっくり後ずさりし始めた。
新羅は、確信を持ったとばかりに、駆け足で彼女に近づいていく。
追い込まれた香稟は、建物と建物の隙間にある路地を見つけるなり、ダッシュでその暗がりへと駆け込んだ。

『タタタタッ・・・』
この時、香稟にとって思いがけない出会いが待っていた。
『ドッタ〜〜ン！！』
「キャッ！？」
「うわぁ！？」
彼女は突然の強い衝撃に、跳ね返されるように吹き飛んだ。
地面に尻餅をついた彼女の、そのかすかな視界に入ったもの。それは、自分と同じように地面に倒れ込んだ、紛れもない人の形をした少年であった。
「いってぇぇ・・・。」
彼女とぶつかったその少年は、ゆっくりとその場に起き上がる。
「だ、大丈夫ですか？」
やさしく手を差し伸べる少年に、彼女はお礼を言いながら細い手を差し出した。
「あ！急がなきゃ！」
「え、な、何！？」
突然の悲鳴じみた彼女の声に、たじろぐ少年。
彼女は、追っ手の新羅から逃れるため、この場を離れようとしたが、どうやらお尻を強打していたらしく、思うように足を踏み出すことができなかった。
「う、いた〜い・・・。」
「だ、大丈夫！？」
心配そうな視線を送るその少年。彼女は、その少年に向かって最後の博打を打つ。
「ねぇ、お願い！あたしをかくまって！！」
「えっ！？」
「あたし、追われてるの！どうかお願い！！」
少年は呆気にとられた顔で、じっと彼女を見つめている。
その頼み込む彼女の姿に、ただならぬ気配を感じた少年は、彼女に協力することにした。

「わ、わかったよ。えーとね・・・。あ、ここに隠れて！」

◇

「はぁ、はぁ！」

眉をつり上げ、鼻息を荒くして、牙をむき出したような形相の鬼マネージャー新羅は、香稟の逃げ込んだ路地へと突入してきた。

彼女は、その路地に立ちつくす少年を見つけると、襲いかかるように飛びかかってきた。

「ちょっとあなた！この道を高校生ぐらいの女の子が通り過ぎて行かなかった！？ねぇ、どうなの！？正直に答えなさい！」

「あわわ・・・。い、いい、行きましたよぉ・・・。む、向こうですぅ・・・。」

その少年は、彼女の放つ威圧感に体を震わせながら、路地の奥を指し示した。

「そう、ありがとう！」

新羅は細い路地も何のその、華麗な走行フォームで駆け抜けていった。

少年は気が抜けたように、その場にひざまずくように腰を下ろした。

「こ、怖かったぁ・・・。」

『ガポ～～ン！！』

突如、少年の側にあった業務用のゴミ箱のふたが開いた。

なんとその中から、鬼マネージャーから難を逃れた香稟が、ムッとした表情で顔を出した。

「ちょっと、あなた！かくまってもらって言うのもなんだけど、ゴミ箱に投げ入れるなんてひどいんじゃない！？あたしだって、れっきとしたレディなんだからね！」

「そ、そんなこと言われてもさ・・・。こんな路地で、かくまう場所なんてないでしょ？」

「それは、そうだけどぉ！」

まんざらハズレていない言い分だが、どうも釈然としない表情の香稟。
彼女を救ったこの少年、もうお気付きだと思うが、彼はさっきまで風景画に没頭していたあの唐草潤太である。
彼の手を借りて、香稟はようやく大きなゴミ箱から脱出した。
「ふぅ・・・。とりあえず助かったわ、どうもありがとう。」
潤太は、勢いに任せて助けた彼女のことを、疑惑の眼差しで見つめている。
「あ、あのさ、君ってもしかして・・・。脱獄犯？」
「あのねぇ！こんなかわいい脱獄犯がどこにいるのよ！？そんなわけないでしょう！」
彼女の言う通り、かわいい脱獄犯には、できることならお目にかかりたくはないだろう。
「そ、それじゃあ、どうして逃げ回ってるの？何か悪さしたんじゃないの？」
「ん～。悪さといえば悪さかな。しいて言うなら、ちょっとしたイタズラかしらね。」
「ふ～ん。」
香稟はこの時、ある不思議なことに気付いた。それは、彼がスーパーアイドルを目の前にしても、驚かないばかりか平然としているからだ。
「ねぇ？」
「ん、何？」
「あなた、あたしのこと・・・。もちろん知ってるよね？」
「い、いや、初めて会うと思うけど・・・。」
「うそ！？ホントに知らない？」
香稟は思わずおののく。
それは無理もない。潤太ぐらいの年齢で、夢百合香稟を知らない者はいないと、彼女自身そう思っていたからだ。少しばかり、自意識過剰というべきところだが・・・。

「う、うん。ボクと、どこかで会ったことある？」
「あ、いや、知らないなら、それでいいんだけど・・・。」
「？」
不思議そうな顔の潤太。彼は、香稟の思わせぶりな表現に、ただただ首を傾げている。
「それじゃあ、ボクもう行くから。」
潤太は、目の前の不審な少女に別れを告げて、彼女のもとから離れようとする。
そんな彼の背中を、香稟は大声で呼び止める。
「ちょっと待って！ねぇ、もう一つお願いしてもいいかな？」
「え！？ま、まだあるの？」
眉をしかめて振り向く潤太。
「あ、何よその顔！？そんなに迷惑そうな顔しなくてもいいじゃないの！」
「だ、だって、君、何だか怪しいんだもの。」
失礼ねーと言わんばかりに、口を尖らせている香稟。
「ア・ヤ・シ・クない！あたしは、ごくフツ～の女の子だもん！」
「わかったよぉ。で、そのお願いっていうのは？」
香稟は人差し指を掲げて、満面の笑顔で答える。
「あのね、あたしに渋谷、原宿界隈を案内してくれない？」
「へ！？」
いきなり何を言い出すんだ！？といった表情の潤太。
「あたしね、あまり遊んだことないのよ、渋谷とか原宿。だから、これから、あたしを案内してほしいの。」
「あ、案内って言われても・・・。ボクだって、そんなによく知ってるわけじゃないし。」
「そこは気にしないで。ただ一緒に付き合ってくれればそれでいいから。」
「へ？」
彼女はこの時、目の前にいるこの少年を、うまく利用しようと企

んでいた。
　それは、彼と一緒に行動することで、巷の若者達が、香稟の正体に気付きにくくなると読んだのだ。それに、一人で行動するよりは、明らかに安全であることも事実だったからだ。
「これから、一緒に付き合ってよ。ね？」
　たじろぐ潤太は、頬を赤く染めている。
「あ、あの、それって・・・。もしかして、逆ナンパ？」
「ちが～う！そんなんじゃないって！あなた本気でぶつわよ、もう！」
「わわっ、ゴメンゴメン！」
　黄金の右腕を振りかざす香稟に、彼は頭を抱えて謝っていた。
　半ば強制的ではあるが、潤太はやむなく、彼女の二つ目のお願いを聞くことになってしまった。

◇

　様々な人々で埋め尽くされた渋谷。そこには、今を楽しく生きる若者達で溢れている。
　そんなにぎやかな街へとやって来た、スーパーアイドルの香稟とその付き人役の潤太。二人は、そんな街中を散策していた。
「へぇ～。いろいろなお店があるんだね。」
「うん。ホントだ。」
「あ、あそこ入ってみよう！」
「え！あそこって・・・！？」
　ここでは、もうすっかり香稟のペースである。彼女のリーダーシップに、一生懸命に付き合う潤太であった。
　二人は、おしゃれな雑貨屋や、オープンカフェなどで有意義な時間を過ごしていた。
　アイスクリームショップで買った、３段重ねのアイスクリームをおいしそうに口にしている香稟。そのすぐ脇で、微笑んでいる彼女のことを見つめる潤太。

その姿は、この一時を楽しむ恋人同士に見えなくもなかった。

◇

二人は渋谷、原宿を回って、代々木公園へと足を運んだ。
日曜日の公園には、老若男女いろいろな人々が集まって、様々なライフスタイルを楽しんでいた。
二人は休憩しようと、空いているベンチへと腰掛けた。
「あ～。今日は気持ちいい天気だね。」
香稟は両手を大きく掲げて、目一杯全身を伸ばした。
「そうだね。」
潤太も彼女を真似るように、大きく伸びる。
「そういえばさ、ちょっと気になったんだけど・・・。」
「ん、何？」
香稟は、隣にいる潤太が抱えるスケッチブックを指さした。
「これ、スケッチブックだよね。何でこんなの持ってるの？」
「何で持ってるって、絵を描くからに決まってるでしょ。まさか、うちわ代わりにでもすると思ったの？」
「そんなわけないでしょ！そんな大きいうちわじゃ、まともに仰げないじゃない！」
何とも下らない会話である。
「でも、意外！あなたが絵を描くなんて、ハッキリいって似合わないなぁ。」
「ムッ！悪かったね。どうせボクは、絵を描くより恥かく方が似合うっていいたいんだろ？」
「あはははは。あなた、その表現うまいわね。おもしろい。」
「全然、フォローしないんだね。」
お腹を抱えて笑う香稟は、彼の持つスケッチブックに興味が湧いたようだ。
「ねぇ、ちょっと中見せてよ。あなたがどんな絵描くのか知りたいな。」

「ヤダ！ボクのことバカにしたくせに。絶対見せてやんないよ～だ！」
「もうバカにしないから、お願いよぉー。あ、もしかして！あなた女の裸体とか描いてるんじゃないでしょうね！？」
「ち、ち、違うよっ！ボクは、そんな絵なんか・・・！」
「じゃあ、何でそこまでして隠すのぉ！？あーやし～！」
まるで小学生同士のような、子供じみた会話をしている二人。
香稟に甘えるようにしつこく頼まれて、年頃の潤太はさすがに断り切れず、抱えていたスケッチブックを彼女に手渡した。
「わぁ、サンキュー。さ～て、どんな絵描いてんのかな！？」
「言っておくけど、そんなに笑わないでくれよ。こう見えても、人に見せるの恥ずかしいんだからさ。」
香稟は、スケッチブックのボタンを外して、その一ページ目を広げる。
「・・・！」
彼女の笑顔が一瞬で消えた。
無言のままスケッチブックを見つめる彼女に、潤太は気が気じゃない様子だ。
「な、何で黙ってんのさ？あー、さては笑いこらえてるなー？」
横でわめく潤太に目もくれず、彼女はつぶやくように口を開く。
「上手だね・・・。」
「・・・へ！？」
「すごくきれいに描けてるね。ハッキリいって、これはすごいよ！」
「そ、そうかな。」
思いも寄らぬお褒めの言葉に、似合わない照れ隠しをする潤太。
香稟は、スケッチブックをさらにめくり、その優秀な絵画をくまなく見入っている。めくるたびに、彼女はすごいすごいと感心していた。
「すごいな・・・。あなた絵描きさんになれるんじゃないの？」
「そんなことないよ。絵描きで生きていくには、こんな中途半端な

絵じゃやっていけないよ。ボクの絵なんて、まだまだ子供だましだもん。」
潤太は苦笑いを浮かべて、画家という職業の難しさを語った。
「そうなんだぁ・・・。ねぇねぇ！ほんのちょっとでいいから、この風景描いてみて。」
「え、い、今から？」
香稟は、スケッチブックを丁寧に閉じて潤太に返した。
彼はスケッチブックを開くと、モチーフとなる代々木公園の景色を眺める。
風景とスケッチブックを交互に見て、すらすらと作画を始める潤太。その横で、彼の真顔をじっと見つめる香稟。
ここ代々木公園に、二人だけの、ゆったりとした静かな時が流れていった。
「こ、こんな感じだけど。」
「あ、見せて、見せて！」
わずかな時間で描き上げたとはいえ、潤太の描いた絵は、香稟の視界にある風景をとても上品に、繊細に表現していた。
「すっごく雰囲気出てるね。あなた、ホントに絵描きさんになりなよぉ。」
「ありがとう。がんばってみるよ。」
香稟は、潤太の絵を鑑賞しながら、ふと思いついた疑問を投げかける。
「でも、どうして風景しか描かないの？例えば人物画とか、そういったのは？」
潤太はスケッチブックを見つめたまま、その真意を打ち明ける。
「ボクさ、絵を描き始めたの、小学校の頃なんだけどさ。そのきっかけになったのが、家族旅行で北海道へ行った時なんだ。そこで、きれいな風景画を描いてる絵描きさんに出会ったんだ。」
思い出を懐かしむように語る潤太。それを真面目な顔で聞いている香稟。

「その絵描きさんと話してたら、何だか無性に絵を描いてみたくなってしまって、旅行中にスケッチブックを親に買ってもらってさ、実際に描いてみたんだよ。自分では下手だなぁって、そう思ったけど、その絵を絵描きさんに見てもらったら、君は才能があるよって誉められてね。」

潤太はうれしそうに、照れ笑いを浮かべていた。

「ちょっと有頂天になっちゃったけど、それから本格的に絵を描き始めたというわけ。だからボクは、今でも風景画以外に興味がないんだよ。」

「へぇ〜。そんな昔から描いてたの。どうりで年期の入った絵に見えたわけね。」

楽しい時間はあっという間に過ぎていくもの。いろんな思い出を残した二人に、別れる時刻が訪れた。

◇

代々木公園を後にした二人は、黄昏に包まれながら新宿駅まで戻ってきた。

「今日は、本当にありがとう。すごく感謝してるよ。」

「ボクも楽しかったよ。めったにこの辺で遊んだりしないから、今日はすごくおもしろかった。」

香稟は、深々と下ろした頭を上げると、少し寂しそうな表情で、目の前の潤太に別れを告げた。

このまま消えてしまいそうな彼女に向かって、潤太は無意識の内に叫んでいた。

「ねぇ、ちょっと待って！」

「！？」

彼女はクルッと振り向く。

「あ、あのさ、ボク達、お互い自己紹介してないよね？最後にさ、名前教えてくれないかな？」

香稟は笑顔を浮かべて、彼の元にゆっくりと戻ってきた。

潤太は紳士ぶって、彼女より先に名前を打ち明ける。
「ボクは、唐草潤太。高校3年生です。」
「へぇ、偶然だね。あたしと同じ歳なんて。あたしは・・・。」
彼女は名乗ろうとした途端、一瞬言葉に詰まった。
「あ、あたしは、信楽・・・。信楽由里よ。」
その時、彼女は誰もが知っている「夢百合香稟」の名前を伏せていた。彼女は、潤太に対して自分の本名を名乗ったのだ。
それはなぜだったのか？周囲の人々に気付かれまいと思ったのか、それとも、目の前の少年にだけは、アイドルとしてではなく、普通の女の子として見続けてほしかったのだろうか。
「もし、また会う機会があったら、一緒に遊ぼうか。」
「う、うん。そうだね。また一緒に遊ぼう。」
そう言い残すと、彼女は人混みの中へと消えていった。
それは、スーパーアイドル夢百合香稟にとって、お忍びの冒険の終わりを告げるものだった。
そんなこととはつゆ知らず、潤太は彼女を目で追い続けた。
潤太は、とんだ偶然で知り合い、散々振り回されながらも、一緒に遊んだ彼女のことが気になってしまった。
もう一度、こうやって会うことが出来るのかな・・・？
潤太は、不思議な体験にちょっとだけ笑みをこぼし、夕闇迫る家路へと向かっていった。

2．ほどけなかった運命の糸

「新羅プロダクション」。それは、スーパーアイドル夢百合香稟の所属する事務所である。

従業員数は現在十数名。他の事務所に比べれば、決して多くはない人数だ。数ある芸能事務所の中でも、小レベルな事務所と言える。

ちょうど今、新羅プロダクションの社長室では、大きな雷鳴が鳴り響いていた。

「このバッカもんがぁ！！おまえは何考えとるんだぁ！？」

その怒鳴り声を上げるのは、新羅プロダクション社長の新羅恒男である。

薄めな髪の毛に、裕福さを絵に描いたような小太りの体型。この社長の第一印象は、ざっとこんな感じであろう。

彼は真っ赤な顔して、フロア中に響かんばかりの怒号をまき散らしている。

その矛先にいるのは、一時の自由を求めて下界へと舞い降りた、事務所の稼ぎ頭の夢百合香稟だった。彼女はこのたびの脱走劇のことで、激しく叱られていたのだ。

「おい今日子、おまえもおまえだ！何のためにマネージャーをやらせてると思っとるんだ！？」

うつむく香稟と一緒に怒られているのは、彼女のマネージャーの新羅今日子である。

「申し訳ありません。今後はこのようなことがないよう、細心の注意を払うつもりです・・・。」

「いいか、よく聞け！今日の不祥事で穴を開けたバラエティー番組はな、ヒット番組をいくつも手がけるプロデューサーが仕切っていた番組だったんだ。その意味わかってるのか？おい、今日子、どうなんだ！？」

「も、もちろんわかってます！こんな失礼なことをした以上、二度

と出演依頼の申し出がないかも知れないと、そうおっしゃりたいんでしょ？」
「ああ、そうだ！おまえの不注意のせいだぞ。どう責任を取る気だ？」
「・・・・・・。」
社長の口ぶりは、いくら大きな失態だったとはいえ、あまりにも彼女にキツク当たり過ぎているように感じる。
それはなぜか？彼女こと新羅今日子は、怒鳴りまくるこの社長の実の娘だったからだ。
香稟は、自分の身勝手のために叱られる今日子を見て、いてもたってもいられなくなった。
「待って下さい、社長！今日子さんは悪くないです。悪いのはみんなあたしです。あたしが・・・。あたしがすべての責任を負いますから！」
『ドン！！』
血管がぶち切れるような形相で、社長は握り拳を机に叩き付けた。
「生意気言ってんじゃない！！おまえのような子供に、どう責任を取れるっていうんだ、バカ者が！おまえは黙って反省していろぉ！」
その大きな声に、身動きできなくなってしまった香稟。彼女の口は、必然的に密閉されていた。
「もういい！今度こういうことがあったら承知しないぞ！わかったか二人とも！？」
地獄のような説教が終わり、女性二人は社長室から出ていく。
お互い顔を見合わすこともできず、フロア奥の休憩室へと歩いていた。
重たい空気が漂う中、最初に口を開いたのは香稟であった。
「今日子さん、ゴメンなさい。あたしの行動が、こんな大問題になるなんて知らなくて・・・。自分勝手な行動して、本当にゴメンなさい！」
「聞いて香稟。今日のことは、あたしと社長の二人でなんとかする

わ。あなたは何の心配もいらない。だから、もう二度とあんな真似はしないと誓って！いいわね？」
「・・・はい。」
新羅は、振り向き様に香稟を叱った。しかしそれは、思いやりのある愛情を持った言葉のようでもあった。少なくとも、香稟だけはそう感じていたようだ。
新羅はたった一人で、早足に休憩室の方へと歩いていった。
そんなやり取りの直後、立ち止まったまま反省している香稟に、背後から声を掛ける女性がいた。
「聞いたわよ、香稟ちゃん。」
「！」
香稟の背後には、彼女の先輩である女優の九埼まりみがいた。
九埼はニヤニヤしながら、香稟の元へと歩み寄ってきた。
「あんた、逃げ出したんだってね。何でも、ゲイノーセイカツに疲れたっていう理由らしいけど・・・？いいわねぇ、売れっ子さんは。あたしもそういう気分味わってみたいわよねぇ。」
「・・・・・・。」
後輩の香稟に、しつこく嫌味をぶつけてくる九埼。香稟は黙ったまま、先輩の嫉妬愚痴をひたすら聞くしかなかった。
「でもさ、あんた、ああやって社長に怒鳴られてもさ、さほど気にしてないんでしょ？だって、どんなミスをしようが、逃げ出そうが、社長があんたを見捨てるわけないもんね。あーあ、スーパーアイドルって、ホント、うらやましいですこと。フン！」
九埼は、凍りつく視線を香稟に浴びせながら、その場から離れていった。
その時の香稟は、ただ悔しい涙を浮かべて、その場に立ちつくすだけであった。

＊　◇　＊

次の日の朝のこと。

アイドルとのまさかのデートを、知らないままに体験していた唐草潤太は、いつも通りに学校へとやって来ていた。
彼が教室へと入ると、周りのクラスメイト達は何やらざわついていた。
そんなことなど目もくれず、彼は自分の机へと腰掛けた。
すると彼の元へ、ざわついていた群れの中から、二人組の男子生徒がやって来た。その内の一人は、一冊の雑誌を手に持っている。
「よう潤太、おはよー。」
「あ、おはよう。」
現れたのは、潤太とは中学校からの仲間である、色沼龍一と浜柄晋である。
「おいおい、おまえ昨日どこ行ってたのよ？オレ達、家訪ねたんだぜ。」
「あ、そうだったの？ゴメン、ゴメン。昨日は、ちょっと多摩の方にね。」
色沼と浜柄の二人は、乾いた笑みをこぼした。
「おいおい、もしかして、おまえまた絵を描きに行ってたのか？」
「う、うん。」
「相変わらず暗いなぁ。おい、コレを見てみろよ。」
色沼は、握り締めていた雑誌を潤太の机の上へ乗せた。
「これは？」
「見てわからんのか？この写真の子、知らないわけないよな。」
「ああ・・・。誰？」
頭をかきながら、恥ずかしそうな表情の潤太。
「しっかし、おまえの芸能音痴ぶりは筋金入りだなぁ。」
浜柄は、その雑誌に写る少女に中指を突き立てる。
「この子はな、スーパーアイドルの名を欲しいままにしている若干17歳、愛らしい乙女と異名をとる夢百合香稟だよ！」
「ユメユリカリン？あれ、どこかで聞いたことある名前だな。」
「まぁ、テレビ付けてりゃ、必ず一日一回はお目に掛かれる人物だ

しな。何たって、レギュラー番組４本、テレビＣＭ６本、おまけについ最近リリースしたシングルなんか１００万枚の大ヒットだもんな。」
「ふ～ん。それはすごいな。」
こういった話にまったくウトイ潤太でも、今の話で彼女の人気ぶりが何となくわかったようである。
「おまえさ、ホントにそう思ってんの？感情に表れてないじゃん。」
「え、そうかな？あはははは。」
思わず苦笑する潤太。彼にとって、アイドルが売れようが売れまいが、どうでもいい話だったのだ。
「で、そのアイドルがどうかしたの？」
色沼と浜柄の二人は、目に余る感動的なニュースを潤太に伝える。
「どうしたもこうしたもねぇよ！来週の水曜日になんと、彼女がここへ来るんだよ！どうだ、ビックリ仰天だろ！？」
「何でも、ドラマの撮影らしいんだよ。彼女今度、学園もののヒロインを演じるらしいんだ。」
どうでもいいことには、本当に愛想のない潤太。
「ふ～ん。」
「ふ～～んっておまえさ。そんな調子でいいのか？スーパーアイドルがこの学校へ来るんだぞ。どういうことか理解してる！？」
「わかってるよ。そのドラマの撮影で、この学校へ来るんだろ？別におかしいことじゃないよ。だって、そうやってドラマは作られるんじゃないか。それぐらいは、テレビを見ないボクでも理解してるさ。」
「・・・コイツ。信じられないほどマヌケなヤツ。」
潤太はふと、机の上に置かれた雑誌に目を向ける。
そこには、ミーハーコンビの注目の的であるアイドル、夢百合香稟が写っている。
「この女の子って。」
彼は心の中でささやく。

「昨日の・・・。信楽由里ちゃんに似てるな。」

＊　◇　＊

あの脱走事件から数日経ち、スーパーアイドル夢百合香稟は、芸能人の一人として真面目に仕事をこなしていた。

数ある雑誌の写真撮影、テレビＣＭ撮影、テレビ番組の収録と、彼女は休む間もなく働き続けていた。

そんなある日、大忙しの彼女は、彼女自身の主演するドラマ「明日こそ愛あれ」の記者会見を終えて、事務所へ戻る途中の首都高速道路の上にいた。

社用車には彼女はもちろん、彼女のマネージャー新羅今日子も乗車している。

「お疲れさま。今日は最後に、ラジオの収録があるからもうひと踏ん張りよ。」

「はい。」

香稟はあの事件以降、逃げ出したいとか、自由になりたいといったわがままを言わなくなっていた。少なくとも、マネージャーの新羅の前では・・・。

あの事件の夜、新羅は収録番組に穴を開けたことを、同番組のプロデューサーに繰り返し謝罪することで、この一連の責任を許してもらっていたのだ。

つまり香稟は、功労者である彼女に頭が上がらないのである。

「でもよかったわね、香稟。あなたが演じたかった役、見事に取れたんだから。」

「はい。今日子さんのおかげです。今日子さんが、あたしのために必死になってテレビ局へアプローチを掛けてくれたから。」

「それだけじゃないわ。あなたの生まれ持ってのスター性がものを言ったのよ。いい、香稟。この役は絶対に成功させなきゃダメよ！」

「大丈夫です。あたし、ようやくドラマでヒロインを演じることができるんだもん。念願の女子高校生役に・・・。」

香稟の表情は、とても充実感を感じさせる。
新羅は、そんな彼女を見て心なしか安心していた。
香凛がまた、普通の女子高生に戻りたい！といったことも言わないだろうと、彼女なりにそう感じていたのかも知れない。
新羅は、香稟の肩にそっと手を置いてやさしく声を掛ける。
「よし、今日は特別にお祝いしてあげよう。」
「え！？」
新羅は身を乗り出して、運転手に話しかける。
「早乙女クン、ちょっと寄り道するわよ。葛西インターチェンジで降りてくれる？」
「で、でも、早く戻らないと社長がうるさいですよぉ？」
「いいわよ、ちょっとぐらい。たまには香稟にものんびりさせてあげなくちゃ！」
微笑みながらウインクする新羅に、香稟もうれしさから微笑みを返した。
「今日子さん・・・。」
社用車は、首都高速を葛西インターチェンジで降りて、海岸線へと向かっていく。
しばらくすると、香稟の視界には、青く透き通った大海原が現れた。
「わぁ、海だぁ！」
「いい眺めでしょう？わたしも昔はよく、この海岸線を通ってストレスを発散したものよ。」
ある浜辺につながる道へと突き進む社用車。
さっきから見えていた海はますます近くなり、見る者にさらなる雄大さを実感させてくれる。
社用車が浜辺付近で止まると、香稟は勢いよく外へ飛び出した。
「わぁ！すっごくきれーい！」
砂浜を走る彼女を目で追いながら、新羅も砂浜へと降り立つ。
「フフ、すっかりはしゃいじゃって・・・。」

「今日子さーん、30分だけですよぉ！それ以上遅れると、オレが怒られちゃいますからね。」
「うるさいな！わかってるわよ、もう。」
押し寄せる波の音が、疲れ切ったアイドルの心を癒していく。
辺り一面の潮の香りが、彼女の気持ちを落ち着かせる。
香稟は、遠くを見つめるような瞳で、東京湾のさざ波を観賞していた。
「いいな、海。こうやって近くで見る海って、ホントにきれい。」
浜辺に佇む彼女の側へやって来た新羅。
「来てよかったでしょ？この大きな海はね、悲しい時も辛い時も、いつも勇気をくれるのよ。」
「そうですね。何だか、すっごく気持ちいいです。」
「ここに来ると、いつもこういったきれいな景色をわたしたちに見せてくれるわ。」
香稟はその時、新羅の「きれいな景色」という言葉に、胸の奥にしまっていたある記憶を思い出した。
「きれいな景色・・・。フフ、彼がこの海を見たらきっと、きれいな絵を描くんだろうな。」
「ん、何か言った、香稟？」
「あ、ううん。別に何でもないです。」
彼女はその記憶を、また胸の奥へとしまい込んだ。
あれから数日経った今日、彼女の記憶の中には、絵を描くことをこよなく愛する、あの唐草潤太の姿が映っていた。
「そろそろ行きませんか？」
「うん、そうね。」
嫌なモヤモヤを吹き飛ばした二人は、勇気と希望を与えてくれる大海原を後にした。

＊　◇　＊

ここは、唐草潤太の自宅である。

彼はこの日、家に帰るなり宿題もせず、描き上げていた絵の色づけをしていた。これも、彼の日常茶飯事なライフスタイルなのである。

「潤太、ごはんの準備手伝ってちょうだーい！」

色づけに没頭している潤太に、一階にいる彼の母親が大声で呼びかけた。

彼は一段落付いたところで、二階の自分の部屋から出ていく。

階段を降りて台所へ行くと、彼の母親が今日の夕食の支度を始めていた。

「もう、いつも遅いわね、あんたは。母さんが呼んだら、すぐに来なきゃダメじゃないのよ。母さんはね、あんたをそんな不良に育てた覚えはないわよ。」

「大げさに言うなよ。不良だったら、母親の料理の手伝いなんかしないでしょ？」

彼にとって、夕食の手伝いも日課の一つとなっていた。

彼は手を洗ってから、母親の指示を仰ぎながら、料理の手伝いを始める。

「母さん、今日は何作るんだい？」

「あんた、大根の皮むいててわかんないの？まさか、大根使ってビーフシチューでも作るとでも思ったの！？」

「そんなわけないでしょ！」

ちょっと、軽いボケをかます彼の母親であった。

彼のしつこい問いかけにより、今日の夕食はふろふき大根だとわかった。

「ねぇ母さん、たまにでいいからさ、リッチな夕食が食べたいよ、ボク。」

「リッチ！？サンドリッチかい？夕食にパンだと、母さんうれしくないわね。」

「それをいうならサンドイッチ。リッチっていうのは、高級って意味だよ。例えばさ、ウニイクラ丼とか、松坂牛しゃぶしゃぶ膳とか

さぁ。あと北京ダックもいいよね。」
高校生の分際で、やけにリッチな料理を知っている男である。
「あんたね、そういうことは父さんに言いなさい。それに何よ、そのペキンダックって？ディズニーみたいじゃないの。」
「それはドナルドダックでしょーが！」
ここにいる親子は、いつもこういった会話の中で料理を続けるのであった。
そんな和やかな親子の会話を遮るように、怒り狂うような叫び声で割り込んできたのは、帰宅したばかりの潤太の弟である唐草拳太だった。
「お～い、兄貴ぃ～！いたら返事してくれよぉ～！」
拳太は怒鳴りながら、廊下をドタドタと駆け抜けていた。
「おい、拳太。ボクならここにいるぞ。」
潤太の声を聞きつけて、拳太は台所へと駆けつけた。
「はぁ、はぁ・・・！」
拳太は中腰の姿勢で息を切らせている。
「おいおい、落ち着けよ。どうかしたのか！？」
「どうしたもこうしたもねぇよぉ！来週兄貴の学校に、あの香稟ちゃんが撮影に来るんだって！？」
平然とした顔で答える潤太。
「そうみたいだな。でも、おまえよく知ってるな。」
「さっき兄貴の学校の人がさ、そんな話してんの偶然聞いちゃったんだよ！」
拳太はまるでケンカを売るような仕草で、兄に向かって怒鳴りちらす。
「ちくしょー！いいよなぁ、兄貴んとこの学校はよぉ！何で、オレの中学に来ないで、あんな汚くて、あんな貧乏くさくて、おまけにろくな生徒がいない学校なんかに香稟ちゃんがぁ～！」
「悔しがるのは構わないけどさ、おまえ、かなりキツイ悪口言ってるぞ。」

拳太は、潤太の胸ぐらを掴んで、悔しがる顔を思いっきり近づけた。
「何言ってんだよ、この幸福やろぉ！オレにもその幸運を分けてくれぇ！」
「そんなこと言われてもなぁ・・・。こればっかりは、ボクにはどうしようもないよ。」
「ぐぞぉ～！憶えてろよぉ、この薄情者ぉ・・・！！」
拳太はそう吐き捨てると、涙目で二階へと駆け上っていった。
「ボクのどこが薄情者なんだよ、まったく・・・。」
呆れた表情の潤太に、流し台にいる母親が叫び声を上げる。
「潤太、早く大根の皮むいちゃいなさい！」

＊　◇　＊

時は瞬く間に流れた。
今日は、潤太の通う学校に、あのスーパーアイドル夢百合香稟が、ドラマ撮影のために来訪する日であった。
学校には朝早々と、テレビ局のスタッフがわんさかと姿を見せ始めた。
テレビ局の大きなトラックが次々とやって来て、それを待っていたスタッフの面々が、大きな撮影機器などをグラウンドへと運び出している。
そんな慌ただしい中、めったにお目に掛かれない有名人を一目見ようと、一般人がぞろぞろと学校内のグラウンドへと集まっていた。
とはいえ、撮影自体はまだ先のことなので、この時間には主役の夢百合香稟どころか、脇役の役者すらこの場にはいないのである。

◇

それからしばらく経ち、学生達が通常通りに登校してきた。
登校してきた学生達は皆、その物々しさに唖然とするばかりであった。

その中の一人である唐草潤太は、生徒達で賑わうグラウンドを横目に登校していた。
「あれ！？」
彼はふと、歩いている足を止めた。
「あいつ・・・！」
彼は小走りで、混み合うグラウンドの中へと割って入っていく。
「おい！おまえ何してんだ！？」
「あっ！」
潤太の腕に捕まれた人物は、どんなことをしても夢百合香稟に会おうと踏ん張っていた、彼の弟の拳太であった。
「おまえ、学校へ行く時間じゃないか！こんなとこにいる場合か！？」
「いる場合だい！オレは絶対に香稟ちゃんに会うんだもーん！」
「ガキみたいなこと言ってんじゃない！ほら、早く学校へ行くんだ！ズル休みは許さないぞ！」
だだをこねる拳太を、潤太は無理やりグラウンドから引っぱり出した。
「ちきしょ～！バカ兄貴めぇ～、いつかギャフンと言わせてやるからなぁ～！」
悔し涙を流す拳太は、潤太をにらみつけながら走り去っていった。
「アイツときたら、ホントにいつまでも子供なんだから。」
潤太は生意気なことを口にしながら、慌ただしい校舎内へと入っていった。

◇

いくらドラマの撮影があるといっても、今日が普通の平日であることには変わりない。そのため、学校では平常通りに授業が執り行われていた。
お昼時間になると、生徒達はこぞって早々と昼食を済ませて、撮影現場となるグラウンドへと足を運んでいた。

潤太のクラスでも、それは他人事ではなかった。教室内には、お昼休み15分後だというのに、すでに数名しか残っていない。もちろんのその中には、芸能界にまったく興味のない潤太もいた。
「おーい、潤太。何してんだよ。早くグラウンドに行くぞ！」
「噂だと、そろそろ夢百合香稟が到着するらしいんだ。急げよ、おい！」
自分の机にポツンと座る潤太に、大声で話しかけたのは、彼の親友である色沼と浜柄の二人であった。
二人とも、スーパーアイドルをぜひとも拝んでおこうと、いてもたってもいられない様子だ。
「ボクはいいよ。おまえ達だけで行きなよ。」
この騒ぎを前にしても、潤太はいつも通りに過ごそうとする。
「バカ野郎！おまえ、こんなチャンス二度とないんだぞ。いいから黙って付いてこい！」
「わぁ！？いいってボクはぁ！」
潤太は、色沼に無理やり廊下へと連れ出された挙句、結局、グラウンドへと向かう羽目になるのだった。

◇

グラウンドには、スーパーアイドルのお出ましを心待ちにする生徒達で溢れていた。こともあろうか生徒達だけでなく、教職員までもが集まっている。
いよいよテレビ局のスタッフが、撮影用のテレビカメラのチェックを始めた。
監督らしき人物がディレクターズチェアに座って、メガホン越しに大声を上げている。
『ウォォォ・・・！』
突如、野次馬連中がどよめき始めた。
そうである。このドラマの主人公である夢百合香稟が、控え室として貸し出されていた柔剣道場から姿を現したのだ。

「お、出てきたみたいだな。くっそー、ここじゃよく見えねぇーよ！」
色沼と浜柄の二人は、覗き見しようとその場でジャンプしている。
一方の潤太は、どうでもいいよといった表情で、その状況を人混みの隙間から眺めていた。
さっそうと可憐に現れた夢百合香稟は、撮影用の学生服に身を包んでいた。
このドラマ「明日こそ愛あれ」は、簡単に言えば青春ラブコメドラマである。
主人公である女子学生が、ある事情で都会の学校へ転校してくるところから物語が始まり、そこで出会ったある男子生徒と、スポーツを通じて親愛になっていくといったラブストーリーである。
「これ以上は入らないでくださーい！」
やんやややんやと大騒ぎの見学者達を、テレビ局のスタッフが必死になって制止している。
ざわつきがおさまった頃を見計らい、“シーン3”と記載されたカチンコが、テレビカメラの前に掲げられた。
「それじゃあ、本番。よ～い・・・。アクション！」
監督の第一声で、いよいよ香稟の登場するシーンの撮影がスタートした。
主人公である女子学生が、最後となる学校の校舎を、寂しい想いで見つめているといったシーンを撮影しているようだ。
わずかに3分少々のシーンではあったが、ドラマの中では重要なシーンだったらしく、非常に重みを感じさせるものがあった。
カットのかけ声と共に、香稟は再び控え室の方へと戻っていく。
彼女の姿を見送った見学者達も、校舎の方へと戻っていった。
「いやぁ、香稟ちゃん、いい演技してたなぁ。」
「あれなら、彼女はもう女優としてもやっていけるな。」
色沼と浜柄の二人は、満足そうな顔で話し込んでいた。
「あ、もう昼休み終わっちゃうよ・・・。ついてないや。」

撮影現場に来て、満足している者の気持ちが理解できない様子の潤太。
彼は天を仰ぎながら、午後の授業に向けて教室へと戻っていった。

◇

ドラマの撮影は着々と進んでいた。
校舎内のシーンや、体育館内のシーン、そして教室内のシーンと、香稟は憧れだった主人公を演じ続けていた。
テレビ局のスタッフと役者の面々は、この日最後の撮影場所となる玄関へとやって来た。
そのシーンは、下校しようと主人公の女子高生が下駄箱へやって来ると、後ろから相手役の男子生徒に声を掛けられて、それに対して恥じらいながら返事をするといったシチュエーションである。
藍色の制服姿の香稟は、下駄箱でスタンバイする。
声を掛ける男子生徒役の役者も、下駄箱奥の廊下で待機している。
準備完了の合図に、アシスタントディレクターが大きな声を上げた。
テレビカメラが静かに回りだした。
「・・・・・・。」
無言のままで、自分用の下駄箱を目で追う女子高生。
彼女は、予め用意されていた下駄箱へと、少しずつ視線を合わせていく。
そして、彼女は恐ろしいほどの偶然を体験する。
「・・・・!!」
監督はその時、彼女の視線の方向が台本通りではないことに気付いたが、さほど気にすることでもないと判断し、そのまま撮影を続行した。
撮影は次の展開となり、待機していた男子生徒がカメラの前へと現れて、硬直する彼女に声を掛ける。
「やあ！今帰るところ？」

「・・・・・・。」
彼女は、声を掛けられたことに気付かない。しかしこれは、台本通りではなかった。
「・・・・・・・。」
待つこと数秒、セリフが発せられないこの状況に、監督はついにしびれを切らした。
「はい、カーットォ！！」
「あ！」
監督の大声に、我に還った女子学生。
「おいおい、どうしたのよ、香稟ちゃん！？ここで君のセリフだったはずだよ！」
「ゴ、ゴメンなさい！つ、ついボーっとしちゃって・・・。」
彼女は深々と頭を下げた。
その姿勢のまま、彼女はもう一度横目で、ある下駄箱を見つめた。
“唐草潤太”の名前がついた下駄箱を・・・。

＊　◇　＊

夕方過ぎ、ようやく撮影は終わりを告げた。
テレビ局のスタッフや役者達が、教職員とお礼を兼ねたあいさつを交わす。
主人公役の香稟も、学校の教頭先生らしき人物にあいさつをした。
「いやぁ、今日はご苦労さまでした。わたしの息子が、あなたの大ファンでしてね。いやははは。もしよかったら、サインなんかを頂けないでしょうかね？」
香稟は快く了解した。しかし、ある条件付きで・・・。
「あの、その代わり、ひとつ教えて頂きたいことがあるんですけど。」

◇

テレビ局のスタッフは、次々と学校から出発していく。

役者達も、移動用のロケバスへと乗り込む。しかし香稟だけは、社用車での移動だった。それを見る限り、彼女は他の役者達と違ってＶＩＰ待遇とも言えるだろう。
彼女は、マネージャーの新羅今日子と共に、社用車へと乗り込んだ。
「香稟、今日はお疲れさま。初日とはいえ、よくがんばったわね。」
「ありがとう、今日子さん。でも、三回もＮＧ出しちゃったし、ちょっと反省しなきゃ。」
「フフ、いい心掛けよ、それ。その意気で、明日からの撮影もがんばってね。」
「はい。」
運転手がエンジンを掛ける。
ゆっくりとアクセルが踏み込まれて、社用車は静かに発進した。
「ねぇ、今日子さん。ひとつだけ、あたしのワガママ聞いてくれませんか？」
「えっ！？」
今日子は一瞬ドキッとした。また、逃げ出したいとか考えてるのでは！？と思ったのであろう。
「な、何？ワガママって・・・！？」
「実はですね。あたしが前に逃げ出した時に、お世話になった人がいるんです。」
「そ、それで、どうしろと？」

＊　◇　＊

「ただいまぁ～。」
潤太は一日の勉学を終えて、自宅へと辿り着いた。
「・・・・・・。」
家の中から返事がしない。しかし、居間の方に明かりが見える。
それは誰かがいる証拠だ。
潤太が恐る恐る居間のふすまを開けると、寝転がってマンガ本を

読んでいる弟の拳太がいた。
「何だよ、いるんだったら返事ぐらいしろよ。泥棒かと思うだろ？」
「ヘン！話し掛けんなよ、バカ兄貴！」
拳太は口を尖らせて、潤太に対してあまりにも素っ気ない。
拳太はまだ、夢百合香稟に会うことを邪魔した兄貴に、ひどく嫉妬心を抱いていたようである。
「おまえなぁ、まだ朝のことで怒ってるのか？いい加減大人になれよ。」
「うるさい！オレはまだ子供だもんね！」
「開き直ってどーする！？」
潤太は、ツンケンする弟を見ながら、いささか呆れた表情を浮かべていた。
「あああ～！いいよなぁ兄貴はよぉ！香稟ちゃんをそのいかがわしい目で見たんだろぉ？」
「いかがわしい目じゃないけど、ちょっぴり見たよ。無理やり連れていかれてな。」
拳太は読んでいたマンガ本を投げ出して、寝転がってジタバタと暴れ出した。
「くっそ～！どうして味気ない兄貴なんかが見れてさぁ、味わいあるオレが見れないんだよぉ！この世の中、何かおかしいぞぉ！！」
「もう過ぎたことだろ？見れた見れないなんて、たいしたことじゃないよ。アイドルだって、ボク達と同じ人間なんだもん。見れたからって、全然うらやましく思えないさ。」
「そこが兄貴のマヌケなところなんだよ。相手は普通の女の子じゃないんだっ！今世紀最後のスーパーアイドルなんだぞ！私生活も、着る物も、食う物も、寝る場所も、すべてが別格なんだってばぁ！！」
「そんなものなのかな、アイドルって・・・？」
潤太は、弟の力説にうなずくことができず、素朴な疑問を浮かべていた。

「あれ、そういえば。」
母親がいないこの状況に気付いた潤太は、ふてくされる拳太に確認する。
「なぁ、母さんは出掛けてんのか？もうすぐ夕食の時間じゃないか。」
「今日は父さんとデートだってさ。だからオレ達はオレ達で食えって。テーブルの上にメモが乗ってるよ。」
テーブルの上にあるメモ紙に目を通した潤太。
「・・・今日は二人の結婚記念日だったんだな。おまえ知ってた？」
「ぜーんぜん！」
この息子たちにしてみたら、両親の結婚記念日など、ごく普通の一日に過ぎないのだろう。
潤太はメモに書いてある通りに、冷蔵庫の中を調べてみる。
「あれ！な、何にもないじゃないか！」
「ええ！？そんなわけないじゃんか！」
拳太はすぐさま立ち上がり、潤太の側へと駆け寄った。
「何だぁ！？しょ、食材そのまんましか入ってないじゃん！」
「もしかして母さん、これを使って、ボク達に作れと・・・？」
「ジョ～ダンじゃないぜ、おい！オレに料理なんか作れるわけないよ！兄貴が作ってよ！」
潤太は慌てふためき、自分自身に人差し指を突き立てる。
「えぇ！？ボ、ボクが作るのかぁ？」
「だって、兄貴はよく母さんの手伝いしてるじゃないか！」
「手伝いったって、大根とか人参の皮むきぐらいで、まともに料理やったことなんて、ボクだってないんだぞ。」
唐草兄弟はひたすら口論を続けたが、最終的には、年長者の兄である潤太が見よう見まねで料理することになった。
「言っておくけど、拳太。出来が悪くても文句言えないからな。」
「わかってるよ、そんなこと。それより、何でもいいから早く作ってよ。」

潤太は似合わないエプロン姿で、まな板に並べた豚肉に包丁を入れ始めた。
『キンコーン・・・』
「おい、お客さんが来たぞ。拳太、出てくれよ。」
「へ～い。」
拳太は、渋々と玄関の方へと歩いていった。
接客を拳太に任せた潤太は、そのまま料理を続ける。
「う～ん。豚肉切ったのはいいけど、これどういう料理にするかなぁ・・・。」
何を作るか決めずに料理を始めた潤太。
そんな彼が、いろいろな料理を頭に浮かべていたその時だった。
「わぁ、わぁぁぁぁぁ、わぁぁぁぁぁ、わぁぁぁぁぁぁぁ！！」
突然、拳太の意味不明な絶叫が家中にこだました。
「な、何だぁ！？」
潤太は包丁を投げ出して、勢いよく居間から玄関へと駆け出していった。
玄関には、倒れ込んで身震いしている拳太がいた。
「お、おい拳太！ど、どうしたんだ、おまえ！？」
拳太の右手の人差し指は、玄関先に立っている女性に向けられていた。
その来訪した女性に、そっと目を向ける潤太。
「えっ！！」
「お久しぶり、潤太クン！」
「き、君は、信楽由里・・・サン！？」
「あの時のお礼に来たの。」
拳太は、その理解不能な二人の会話に、すごい形相で割り込んでくる。
「な、何わけわかんないこと言ってんだよ、兄貴ぃ！こ、この人はなぁ、あ、あの、ゆ、ゆゆ、夢百合香稟ちゃんだよぉ！！」
「へっ！？」

とある日曜日に偶然に知り合った二人は、またこうして偶然に再会した。
潤太は、いきなり来訪した彼女を呆然と見つめていた。
目の前にいる女性は、いったい何者なんだ！？彼の頭の中で、その疑問だけがグルグル回り続けるのであった。

3．そこにある真実はひとつ

唐草潤太の自宅の居間は、何とも言えない沈黙に包まれていた。ごく一般家庭に現れた人物。それは、決して有り得ない現実だった。

不思議な出会いで知り合った女の子、信楽由里。

弟の拳太が叫んだ名前、スーパーアイドルの夢百合香稟。

潤太の頭の中は、混乱という激しい渦に飲み込まれていた。

潤太は、突然訪れたその女の子を居間に通し、その真意について尋ねてみることにした。

「き、君は、あの時の、女の子だよね？」

「ええ。」

「ど、どうしてボクの家がわかったの？」

「あなたの学校の先生から教えてもらったの。」

「え！？ど、どうしてボクの学校を知ってるの？」

「今日、あなたの学校に行ったからよ。ドラマの撮影のためにね。」

「き、君はいったい・・・！？」

頭が整理できない潤太に、拳太が苛立つように水を差す。

「兄貴、さっきから言ってるじゃないか！この人は、あの夢百合香稟ちゃんだってば。顔を見ればわかるじゃないか。」

「う、うるさいな。おまえは黙ってろよ。」

香稟は、戸惑う潤太にすべてを打ち明ける。

「弟さんの言う通りよ。あたしの名前は夢百合香稟。今日、あなたの学校でドラマの撮影があってね。でも、びっくりしたわ。下駄箱の名札にあなたの名前があったんですもの。」

「ちょ、ちょっと待ってよ！あの時、君が名乗った信楽由里って、いったい誰なのさ！？」

「それもあたしよ。信楽由里は、あたしの本名。夢百合香稟は芸名なの。」

「ほ、本名！？」
ここまで来ても、まだ頭の整理ができていない潤太。
「そ、それなら、どうしてそのことハッキリ言わなかったの！？ホントのことどうして隠したりしたんだい？」
「そ、それは・・・。」
香稟は悲しそうにうつむいてしまった。
「・・・だって、もしホントのことを言ったら、あなたはきっと、あたしのことをアイドルとして見てしまうと思ったから。」
「そ、それはどういう意味！？」
香稟はゆっくりと顔を上げた。
「あの時あたし、テレビ局へ向かう車から逃げ出した後だったの。今時の高校生みたいに、自由気ままに遊んでみたかった。その想いが、あたしをそんな大胆な行動に走らせたわ。でも、逃げ出したのはいいけど、わざわざ変装したのに、あっさりばれちゃって。大勢の若い人達に追いかけられて、それはもう大変な目に遭ったわ。」
潤太は、黙って彼女の話を聞き入っている。
「あたしを探してたマネージャーから逃げるため、あたしは薄暗い路地へと逃げ込んだ・・・。そこで、潤太クン、あなたに出会ったのよ。」
「あ、あの時、かくまってくれって言ったのは、そういう理由だったというの？」
「うん・・・。」
彼女は話を続ける。
「でも、あなたは・・・。このあたしに気付かなかった。この人だったら、あたしを一人の普通の女の子として接してくれる。そう思ったの。」
拳太は後頭部に手をあてて、悔しそうな顔で口を開く。
「何で兄貴ばっか、そういういい思いしてんだよぉ！オレもそんな出会いしてみてぇなぁ・・・。」
香稟はかわいい笑みを浮かべて話す。

「無理なお願い聞いてくれて、すごく感謝してるの。だから今日は、そのお礼を言いたくて。」
拳太は目を細めて、潤太の照れ顔を見つめた。
「ねぇ兄貴、香稟ちゃんに何お願いされたんだよ？」
「彼女と一緒に遊んだだけさ。渋谷とか原宿とかで。」
「な！な、何だとぉ！？」
拳太はおののくように、座ったまま後ずさりしてしまった。
悔しがる彼は、握り拳に力を込めながら叫ぶ。
「くぅ～！ホントに兄貴ばっかりぃ～！くやしいぃ・・・！！」
握り拳を床に叩き付けている弟を後目に、兄は冷めた視線を彼女に送っている。
「申し訳ないけど、ボクはやっぱり信じられないよ。街中で偶然知り合った女の子が、実はスーパーアイドルだったなんて・・・。確かに顔はそっくりだけど、ほら、この世界には、三人は自分にそっくりな人間がいるっていうしね。」
その時の彼の表情は、現実味のないこの事態を認めたくないといった感じだった。
「それじゃあ聞くけど、どうしてあたしがここへ来ることが出来たのか、それを考えてみて？あたしが夢百合香稟じゃなかったら、あたしはどうやって、ここの住所を知ることができたというの？」
「そ、それは・・・。もしかしたら、学校にいるボクを見かけて、先生に尋ねたのかも知れないし。」
潤太はやはり、彼女のことが信用できない様子だ。
そんな彼に焦れたのか、香稟は口調を徐々に強めていた。
「その方が不自然過ぎるわ。確かに、見かけたとすれば、尋ねたりできるだろうけど、そんな一般人に、先生が易々とあなたの住所を教えてくれると思う？」
「で、でも不可能じゃないと思うし・・・。」
「もう！どうして信じてくれないのよ！？」
香稟は我を忘れてヒートアップしている。

そんな彼女の興奮を冷まそうと、拳太が偉そうな顔で割って入った。
「まぁまぁ、香稟ちゃん、落ち着いてよ。兄貴はさ、どうも頭が固くてダメなんだよね。そこで、オレにいいアイデアがあるんだ。」
「ア、アイデアって・・・？」
問いかける二人に、拳太はそのアイデアを説明する。
「オレが、香稟ちゃんにクイズを出すんだよ。そのクイズってのは、香稟ちゃん本人しかわからない問題ってヤツだ。もし、問題を間違えちゃったら、彼女は本物じゃないってことになる。いいアイデアだろ？」
潤太は、偉そうにふんぞり返る拳太に問い返す。
「待てよ。本人しかわからない問題を、おまえがどうやって出題するんだ？」
拳太は自慢げな笑みを浮かべる。
「フッフッフ！こう見えてもオレは、香稟ちゃんの超スペシャル大ビッグファンなんだぜ。香稟ちゃんのこと何でも知ってるこのオレだからこそ、このアイデアが使えるのさ。」
「おまえ、強調するのはいいけど、超とスペシャルは同じ意味だぞ。何か怪しいなぁ。」
「まぁまぁ、兄貴。オレを信じろって。」
このままでは何の進展もないと判断した潤太は、拳太のアイデアに賛成することにした。無論、香稟の方も、やむを得ず納得した。
「よーし。それじゃあ、香稟ちゃん。オレの問題に答えてね。」
「う、うん。」
いくら自分にまつわる問題とは言え、妙な緊張感に包まれた香稟。彼女の鼓動は、大きく打ち鳴らされていた。
「じゃあ、第一問。香稟ちゃんの生年月日は？」
「１９８３年、９月１４日よ。」
「ピンポ～ン、正解でーす！」
わからないはずのない、自分自身の生年月日を回答しただけなの

に、なぜかホッとしている香稟であった。
「おいおい、そんな問題じゃ意味ないぞ。」
潤太は冷めた口調で、拳太の作成した問題にケチを付けた。
拳太はにやにやと笑いながら、次の問題へと進む。
「ほんの小手調べだよ。それじゃあ次の第二問いくよ。香稟ちゃんの出身地はどこでしょう？」
「神奈川県の藤沢市。」
本人だから当たり前だが、迷うことなく淡々と答える香稟。
「え・・・！？」
拳太はギョッと目を大きくした。その怪しげな顔に驚く香稟。
「う、嘘じゃないわ！間違いないはずよ！」
「へへへ～。せいかーい！ビックリした？」
「もう！冗談は止めてよ！」
彼女は怒りながらも、ホッと胸をなで下ろす。そんなに自分の答えに自信がないのだろうか？
潤太は一人冷静に、拳太に冷ややかな視線を送っていた。
「おい拳太。ふざけてないで真面目にやれよ。」
「わかってるって。そんなマジな顔すんなよぉ。さーて、いよいよ第三問といきますか！」
次なる問題を前に、なぜか香稟は身構えた。
「・・・い、いいわよ。」
「んじゃあ、香稟ちゃんのスリーサイズを答えて下さーい！」
「えぇ！？ちょ、ちょっと、待ってよ！そ、そんなこと・・・！」
香稟は真っ赤な顔して叫んだ。それもそのはずで、香稟はプロフィール上、スリーサイズなど公表していなかったからである。
「そ、それは・・・。」
恥らいながら口ごもる香稟。
彼女はおもむろに、にやけた顔した拳太から視線を逸らせてしまった。
「おい、そんな問題はやめろよ！彼女に失礼だろう！」

潤太は眉を吊り上げて、卑しい笑顔の拳太に文句を付けた。
香稟は、そんな潤太の制止を聞く間もなく、思いっきり目を閉じたまま、鉄扉のような重たい口を開く。
「８３、５４、８６・・・・。」
「うそ！？」
拳太は思わず驚いた。
潤太も、素直に答えた彼女を前にたじろいでしまった。
「へぇ、スタイルいいんだね、香稟ちゃん。わーい、いいこと聞いちゃった！」
「え・・・！？も、もしかして、それって。」
「ハハハ、実はひっかけだったんでーす！いやぁ、まさか本気で言ってくれると思わなかったなぁ！」
「ひ、ひどいわぁ！」
香稟はこの意地悪に涙目で叫んだ。顔をさらに真っ赤にして、恥ずかしさを手で覆い隠した。
「ハハハ、ほんのジョークだったんだ。ゴメンね、香稟ちゃん。」
次の瞬間、拳太の襟元に衝撃が走った。
「いたたた！」
ものすごい力で、拳太は首根っこをつままれた。
彼の襟元にある力強い手、それは、怒り狂う表情をした潤太の右手であった。
「おまえ、いい加減にしろよ！これ以上、彼女に失礼なことしてみろ？このままじゃ済まさないからな！！」
拳太もこの時ばかりは、兄の威厳に焦りを見せた。
「わ、悪かったよぉ！も、もうしないからさぁ・・・！」
『ゴツッ・・・！』
「いったぁぁ！」
潤太は、空いていた左手を高々と挙げて、拳太の頭上に硬い岩石を落とした。
「いいか拳太！まだふざけるつもりなら、ここから追い出すぞ！」

「も、もう何にも言わないからさぁ、追い出すのだけは勘弁してくれぇ・・・！」
いつもおとなしい潤太でも、一度スイッチが入ってしまうと、この上ないほど怒り狂うようだ。どうやら、弟の拳太はそのことを知っていたらしい。
拳太は地面の中のミミズのように、小さく縮こまって反省していた。
「ゴメン。弟の失言はボクから謝るよ。本当に申し訳ない。」
香稟の目の前で、潤太は床に頭を付けて謝罪した。
「い、いいよ、そこまでしなくても・・・。そんなに謝られると、どう返していいのか、わからなくなっちゃう。」
香稟は両手を左右に振って、頭を下げる潤太にそう告げた。
よほど恥ずかしかったのだろう、彼女の頬は未だに真っ赤だった。
「もうやめようよ。君が信楽由里だろうが、夢百合香稟だろうが、そんなことどうでもいいことだよ。今日はお礼に来てくれてありがとう。」
「・・・・・・。」
香稟は黙り込んでしまった。
この居間に、再び険悪な沈黙が訪れた。
潤太と香稟は、口を閉ざしたままうつむいている。
拳太も、余計なことを言うまいと、口のチャックを閉めたままだ。
そんな重苦しい雰囲気の中、沈黙を打ち破ったのは、あまりにも意外な音だった。
『グウゥゥゥ・・・』
その音は、悲しいほど居間中に鳴り響いた。
「わっ！？」
潤太は反射的に自分のお腹を押さえていた。
「・・・もしかして、お腹空いてる？」
香稟はためらいがちに、顔を赤らめた潤太に問いかけた。
「はは。じ、実はさ、ボク達まだ夕食食べてなかったんだ。君が訪

ねてきた時ちょうど、おかずをこしらえていたところだったから・・・。」
彼女はふと、台所の方へと顔を向けた。
「潤太クンが料理するの？」
潤太はブンブンと手を振って否定する。
「ま、まさか！ボクにそんな特技はないよ。今日はたまたま母さんがいなくてね、しょうがなくボクが作ることになっちゃったんだ。」
「ふーん、そうなの・・・。」
香稟はいきなり立ち上がり、台所に向かって歩き出した。
「え！？ど、どうしたの？」
彼女は笑顔で振り向く。
「あたしが料理を作ってあげる。この前のお礼を兼ねてね。」
「えぇ！？」
潤太は思わず上擦った声を上げた。黙っていた拳太まで、ビックリ仰天な奇声を上げた。
「そ、そんな！そこまでしてもらうなんてできないよ！」
「あ、気にしないで。こう見えてもね、あたし結構料理得意なんだ。まずい料理は作らないから安心して。」
拳太は感動のあまり、目をうるうるさせている。
「うれしいぃ・・・！あの香稟ちゃんの手料理が頂けるなんてぇ！！はぁ、オレは何て幸せ者なんだろぉ！」
拳太は思いっきり顔を緩ませて、側にいた潤太にすがりついてきた。
「お兄たま～！やっぱりあなたはボクの素敵なお兄たまです～！」
「わ、やめろバカ！抱きつくんじゃないってーの！」
和気あいあいと戯れる兄弟を見つめて、香稟の口元はうれしそうにほころんでいた。

◇

『コポコポ・・・』

お鍋に入ったお湯が、ゆらゆらと湯気を立ち上らせる。
『トントン、トントントン』
包丁がまな板を叩く音が、おいしい料理を呼んでいる。
唐草兄弟の母親のエプロンを身にまとい、アイドルの香稟は一生懸命にクッキングを続けている。
唐草兄弟の兄である潤太は、散らかったテーブルや、辺り一面をきれいに掃除している。
弟である拳太は、意欲的に彼女の料理を手伝っている。
潤太は、普段まともに手伝わない拳太の姿を見て、呆れ顔で溜め息一つこぼしていた。
しばらくすると、台所から居間の方へと、おいしそうなにおいが漂い始めた。それは、彼女の自慢の料理の完成を知らせていた。
「お待ちどうさま〜。出来たよ。」
「わぁ、うまそー！」
拳太は、手渡された料理を見てうれしそうに叫んだ。
そのおいしそうな料理は、居間にあるテーブルへと飾られていく。
座って待機していた潤太も、その華やかな料理に見入っている。
「さぁ、拳太クンも座って。」
「はーい！」
唐草兄弟は、豪勢なディナーを前にして、箸を抱えた両手で合掌した。
二人とも相当お腹が空いていたらしく、まるで馬車馬のように、彼女の手料理を食いあさる。
「お味の方はどうかな？」
その問いかけに、二人は声を揃えて答える。
「うまい！！」
「よかったぁ！作った甲斐があったわ。」
わずか３０分足らず、二人は一気に夕食を平らげてしまっていた。

◇

外はすっかり暗くなり、静かな夜がやって来た。
唐草家の玄関には、精一杯のお礼を済ませた香稟が、唐草兄弟に別れを告げていた。
「今日はありがとう。あんなおいしい料理ご馳走してくれて。おかげで助かったよ。」
「ううん。喜んでくれただけで、あたしもうれしかった。フフ、いいお礼ができたわ。」
潤太は、彼女の帰りを玄関先まで見送る。
「じゃあ、あたし、帰るね・・・。」
「う、うん。さよなら・・・。」
言葉では表現しないが、お互い、どうもこの別れを惜しんでいるようだ。二人はチラッと顔を見合わせて、軽い会釈を交わした。
潤太の側から離れていく香稟。
彼は、香稟の小さな背中を見つめている。
そして、彼女の姿が闇の中に溶け込むその瞬間だった。
「潤太クン！」
彼女はいきなり立ち止まり、潤太の方へと振り向いた。
「な、何！？」
「毎週日曜日、夜１０時から、ＪＰＳ放送のラジオで、夢百合香稟がパーソナリティーをしてる番組があるの。今週の日曜日、絶対にそれを聴いて。お願いよ！」
「わ、わかった、絶対に聴くよ！」
「日曜日の夜１０時だからね。忘れないでね・・・！」
彼女はそう言い残すと、足早にその場から走り去っていった。
それだけ念を押されたことに、潤太は意味も理解できないまま、ただ消えゆく彼女を見送っていた。

＊　◇　＊

次の日、潤太の学校では、前日のドラマ撮影の話題で持ちきりだった。

潤太は相変わらず、その話を他人事のように受け止めている。
クラス内で賑わうそんな会話にも参加することなく、彼はただいつも通りの自然体を保っていた。
ここぞとばかりに孤立する潤太に見兼ねてか、彼の友達である色沼と浜柄が、彼の元へと近寄ってきた。
「おーい、潤太。相変わらずだなぁ、おまえは。」
「おまえも少しぐらいさ、話題性のある会話に付いていこうとしなよ。」
二人の励ましの言葉は、彼の耳の中を通り抜けても、心の奥までは届かなかったようだ。
「別にいいよ、そんなの。おまえ達の方こそ、いつまでもそんな下らないことに情熱燃やしてないで、現実を見つめ直した方がいいと思うよ。」
「コイツ、生意気言ってくれるじゃん。はっはっは！」
潤太はこの機会を利用して、この二人に“夢百合香稟”について、それなりに聞いてみることにした。
「なぁ、ちょっと聞いてもいいかな？」
「ん、何だよ？」
「あのさ、夢百合香稟のことに詳しいか？」
「お、どうしちゃったんだ？さては、おまえも昨日をきっかけに、彼女に惚れこんじまったのかな！？」
「あ、いや、そうじゃないんだけどさ。わーきゃー騒いでるぐらいだから、おまえ達がどこまで知ってんのかなぁって思ってさ。」
色沼と浜柄の二人は自信満々に、これ見よがしに“夢百合香稟”を語り始める。
「本名は信楽由里。神奈川県藤沢市出身だ。藤沢の高校に通ってる時に、たまたま東京でスカウトされたんだ。今は、芸能活動に専念するために高校は辞めちゃったけどな。」
「ふ～ん。」
「所属事務所は新羅プロダクション。あとね、身長は１６２センチ

だったかな。生年月日は、昭和５８年９月１４日のＡ型だよ。スリーサイズはね、残念ながら彼女、公にしてないんだなぁ、これが。ははは。」
「ふ～ん。」
潤太は心の中でつぶやく。
「彼女の言った通りだ・・・。で、でもそんなわけないよな。スーパーアイドルが、ボクの家にやって来て、おまけに手料理まで振る舞うなんて。やっぱりあの子は、ボクを引っかけようとしてるんだ。きっとそうに決まってる。」
「おい、どうかしたのか？」
ハッと我に還った潤太。
「あ、いや、何でもないよ。それはそうと、彼女さ、日曜日の夜にラジオのパーソナリティーをやってるんだって？」
潤太の意外な詳しさに、驚きを隠せない色沼と浜柄の二人。
「なーんだよ、おまえ詳しいじゃんか。まさか、彼女のこと調べてんじゃねぇのか！？」
「そうじゃないって！弟から聞いたんだよ。でさ、どんな番組か知ってるか？」
そのラジオ番組について、二人は親切に説明する。
「えーとね、最初は歌がメインなんだけど、最後の方でね、最近の話題っていうコーナーをやってるんだ。そのコーナーが結構いいよ。たまに彼女のプライベートな話も聴けるしね。」
「そうか、どうもありがとう。」
潤太はその時、自宅に来た彼女が信じられず、自分なりの答えを見つけることはできなかった。
彼はその答えを見つけられないまま、時間だけが瞬く間に過ぎ去っていく・・・。

＊　◇　＊
あっという間に日曜日の夜である。

この日の潤太は、二階にある自分の部屋で、描き上げた風景画の細かい部分を色づけしていた。
その絵は、以前香稟と一緒に行った代々木公園の風景である。
彼はあの時の情景を思い浮かべながら、一筆一筆慎重にカラフルな色を入れていた。
「ふぅ。やっぱり現地じゃないとうまくいかないもんだなぁ・・・。」
彼はこの絵にうまく色づけできず、少し不服そうである。
「よし、この辺はもう少し濃い色にしてみるかっ！」
気合いを入れて、両手を高々と振り上げた潤太。
机に向かう彼の視界に、壁掛け時計の長針が飛び込んだ、まさにその時だった。
「あっ、そういえば！」
彼は逸らした視線を、もう一度壁掛け時計へ向けた。
「し、しまった！もう１０時３０分じゃないかっ！」
そうである。今夜は、夢百合香稟がパーソナリティを務める、例のラジオ番組が放送される日だったのだ。
「わわっ、約束しておきながら、聴かなかったらマズイよ！」
彼は持っていた絵筆を投げ出して、慌てて自室のベッドへと飛び込んだ。
枕元にあるラジカセを手にして、彼は机へと運ぶため急旋回した、まさにその瞬間！
『ガツン！』
慌てていたことが、彼にあまりにも悲しい不幸を招いた。
「わぁ！？」
ラジカセは、勢いよくベッドの柱に叩きつけられて、その反動で彼の手から投げ出されて、そのまま床へと落下してしまったのだ。
「おいおい、だ、大丈夫かぁ！？」
彼はすぐさまラジカセを持ち上げて、無意味にも、壊れていないかどうか呼びかけた。

「ぎゃあぁ！！」
ラジオを見るなり、彼はムンクの叫びのような仕草で、轟く奇声を上げた。なんと、ラジカセのアンテナが、落下したショックで折れ曲がってしまっていたのだ。
彼は慌ててラジカセを机に置くと、電源を入れてラジオモードに切り替えた。
かすかなノイズ音と共に、意味不明な声がスピーカーから聞こえてくる。
彼は、ＪＰＳ放送局の周波数に合わせてみたが、ノイズ音ばかりで香稟の声らしきものは聞こえない。
「ちくしょ～！壊れちゃったな、こりゃ。」
彼は腕組みして、立ちつくしながら考え込む。どうすればいい！？彼は必死に打開策を練った。
「あ、そういえば拳太がいるじゃないか！」
彼は怒濤のごとく自室を飛び出し、隣の部屋である弟の拳太の部屋を訪ねた。
「おい拳太、入れてくれ！」
「何だよ！？」
「いいからここを開けろぉ！」
拳太は眠そうな顔して、自室のドアを開けた。
「何か用かい？オレもう寝るとこなんだけど・・・。」
「あ、ああ、あのさ・・・！」
「ハッキリしゃべりなよ。何そんなに慌ててんの？」
潤太は息を切らせて、強めの口調で訴えかける。
「おまえのラジカセ、今すぐ貸してくれないか！？ボクのヤツ、ついさっき壊しちゃってさ、どうにもならないんだよ！」
拳太は顔を掻きながら、苦笑いで答える。
「あ、そう。実はさ、オレのも壊れてんだよね。このまえ本棚の上から落ちちゃってから、どうも調子が悪くてさ。アハハハハ。」
潤太は、拳太の胸ぐらを掴んで怒鳴り散らす。

「笑い事じゃねぇ！キサマ、こういう時に限って、どうして壊すんだよ、このやろう！」
「な、何他人事みたいに言ってんだよ！自分だって、ついさっき壊したんだろうがぁ！」
潤太はもうダメだと諦め、その場にひざまづいてしまった。
「・・・どうしよう、約束したのに。」
彼はうなだれながらも、このまま諦めきれないのか、ラジオを聴く方法を必死になって模索する。
ラジオが聴ける場所・・・。ラジオが聴ける場所・・・？ラジオが聴ける場所・・・！
「そうだっ！あそこがあったんだぁ！！」
潤太は勢いよく立ち上がると、一目散に階段を駆け降りていった。
「な、何なんだよ兄貴のヤツ・・・？」
不可解な行動の潤太に、思わず首をひねる拳太であった。
『ドタドタドタ！』
廊下をさっそうと駆け抜ける潤太。
彼は玄関の靴箱の上から、銀縁のカギを持ち出し外へと飛び出した。
彼の向かう先は、彼の父親の乗用車が止めてある庭先の車庫だった。
持ち出したカギでドアを開けて、運転席へと乗り込んだ彼は、乗用車のエンジンをかけた。
「えっと、これか。」
彼は焦る思いで、ラジオの電源スイッチを押して、バンドボタンで周波数を合わせてみた。
かすかに女の子の声がスピーカーから流れてくる。
「・・・そういう・・・。で、よろしく・・・。それでは一旦ＣＭです。」
途切れ途切れに聞こえたその声は、聞き覚えのある、夢百合香稟の美声そのものであった。

「よかった・・・。」
ホッと胸をなで下ろす潤太。時刻はすでに、車内のデジタル時計で１０時５３分を表示していた。
ラジオのＣＭが終わり、軽快な音楽と共に、香稟の声が聞こえてきた。
「はーい。それでは、最後のコーナー、題して、香稟の最近の話題、の時間でーす。」
「まいったな、もう終わりじゃないか・・・。」
彼は座席にもたれかかって、両手を後頭部にあてる。
彼のうつろな視線は、乗用車のフロントガラス越しに映る、おぼろげな満月に向いていた。
途方に暮れる彼を後目に、香稟の語らう声だけが、車内に弾むようにこだましている。
「えっとですね。今夜は、ついこの前知り合った、あたしのお友達についてお話しようと思います。」
「・・・・・・。」
潤太は目を閉じて聴いている。
「そのお友達はね、とってもきれいな風景画を描く人なんです。」
「・・・！」
潤太は目を見開いて、ガバっと起きあがる。
彼の耳は、一瞬にして像の耳のように大きくなった。
「何でも絵を描き始めたきっかけは、北海道に旅行へ行った時に、ある絵描きさんに自作の絵を見てもらったら、いい評価をもらったことだそうです。そこで、本格的に絵を描き始めたとのことです。いいですよねぇ、こういうエピソードって。あたしにもそういう才能があればいいけど。アハハ、あるわけないかな！？」
潤太は呆然としたまま、ラジオから流れる彼女の声を聴いていた。
その様は、彼女を疑ってやまなかった自分自身が、間違っていたことに気付いた驚きを表していた。
「ボ、ボクのことだ！や、やっぱり彼女は・・・！」

彼は真実を知った。ラジオから流れてきたその真実を。
彼は心の中でつぶやく。
「あの時、絶対に聴いてって言ったのは、この話を聴かせるためだったんだ・・・。」
夢百合香稟が打ち明けてくれた言葉。それは、唐草潤太にとって、あまりにも痛ましい言葉でもあった。
どうして信じられなかったんだ！どうして信じようとしなかったんだ！彼はひたすら、自分の犯した過ちを悔いていた。
「ゴメン、香稟ちゃん・・・。」
彼はハンドルに頭を打ち付けて、遠くにいる彼女に謝罪し続けた。
街中で出会った信楽由里にではなく、スーパーアイドルの夢百合香稟に・・・。

＊　◇　＊

数日が過ぎたある日のこと。
夢百合香稟とマネージャーの新羅今日子は、ＣＭ撮影のロケを終えて、事務所へと戻ってきた。
控え室へ向かう二人に、事務所の事務員がうれしそうに声を掛けた。その事務員は、大きな段ボール箱を抱えている。
「これって、もしかして？」
香稟が苦笑すると、事務員はその通りといった表情で答えを返す。
「はい。月一回恒例のファンレターですよ。今回もいっぱい来てますよ。」
香稟はその大きな段ボールを抱えて、事務所の控え室までやって来た。
「本当にいっぱいあるわね。ちょうど次の仕事まで時間があるから、その間に軽く目を通したら？」
「そうですね。読まないわけにもいかないですし・・・。」
新羅が打ち合わせのために控え室を出ていくと、一人残った香稟は、控え室のテーブルへと落ち着いた。

「さてと。」
彼女は箱の中身を覗き込んだ。
真っ白い手紙や、ピンク色したかわいい手紙、小さなものや大きなものと、様々なファンレターが溢れんばかりに詰め込まれていた。
「あれ？」
彼女の目に止まった一通の手紙。
「これ、やけに厚いわ。何が入ってるんだろ？」
その厚めの手紙を手にした彼女は、手紙の裏面を見つめて愕然とした。
「これ、潤太クンからだ・・・！」
その手紙の裏面には、“唐草潤太”という文字が記載されている。
彼女は慌てて、その手紙を開けて中身を取り出した。
手紙の中には、数回に折りたたまれた厚手の紙切れと、一枚のメモ紙が入っている。
「何だろ、これ。」
彼女は、厚手の紙切れを丁寧に広げていく。
「！」
そこに現れたものは、グレーに染まった街並みに彩りを添える鮮やかな緑、見る者に感動を与えてくれる美しい風景画であった。
「これ、代々木公園だわ。しかも、あの時の。」
潤太の描いた代々木公園は、彼女に懐かしい楽しさを思い出させていた。
「ありがとう、潤太クン。」
彼女は、もう一つ同封されていたメモ紙を広げた。
そのメモ紙には、次のようなことが書かれていた。
「お仕事ご苦労さまです。あなたのラジオ番組拝聴させてもらいました。それを聴いて、ボクが間違いだったと気付き、ひどいことを言ってしまったことを、今でも深く後悔しています。スーパーアイドルが、ボクなんかと一緒に遊んだりするわけがないと、ボクはそんな先入観だけで判断していました。そのことについて、深くお詫

びします。最後に、もし許してもらえるなら、あなたがラジオで言っていた通り、ボクと友達でいてほしいです。無理やりなお願いかも知れないけど。いい返事を待っています。では、これからの活躍を祈っています。さようなら。」

その文面は、今の潤太の心境をそのまま映し出していた。

彼女はそっと、そのメモ紙をポケットの中へとしまい込み、テーブルに広げられた風景画を手にする。

「・・・先入観か。でもね、潤太クン。あたしも、あなたと同じように学び、遊び、楽しい思い出を作れる、一人の普通の女の子なんだよ。」

彼女は、微笑ましく潤太作の風景画を見つめ続ける。その時の彼女は、この絵画の世界にある代々木公園へと引き寄せられていたようだ。

あの偶然の出会いと、一緒に歩いたこの公園、彼女は側にいた少年と共に、楽しかった思い出に酔いしれていた。

4．彼女のはかない想い

とある日の夜、ここは唐草潤太の自宅である。
この夜は一家勢揃いで、和やかな夕食の時間が繰り広げられていた。
居間にあるテレビからは、ある青春学園ドラマが流れている。
そのドラマは、あの潤太の学校で撮影が行われた、あのラブコメドラマであった。
テレビのブラウン管から映し出された映像には、あの可憐にも愛らしいアイドル、夢百合香稟の姿が映っていた。
潤太と弟の拳太は、そのドラマを食い入るように視聴していた。
その執着心と言ったら、テーブルに並べられた夕食が、すっかり冷め切ってしまうほどであった。
「こら、あなた達！テレビばかり見てないで、ごはん早く食べてちょうだい！」
さすがに二人の母親は、その様に苛立たしさを感じていたようだ。
「わかってるよぉ。でも今、ちょうどいいところなんだよ。」
今の拳太にしたら、母親の文句などお構いなしといったところか。
「いいところって、ただの女の子が映ってるだけじゃない。」
「それがいいところだって言ってんの。あの香稟ちゃんが映ってんだよ。見逃すわけにはいかないよ！」
母親は不思議そうな顔をしている。
拳太の横に座る潤太は、そんな拳太と母親のやり取りにクスクスと微笑んでいた。
「あ、わかったわ。」
母親は何かに気付いたように、ポンと手を叩いて拳太に問いかける。
「この女の子が、これから誰かに殺されちゃうんでしょ？」
「ブッ！」

母親の突発的に出た一言に、兄弟二人は口に入れた食べ物を吹き出してしまった。
「そんなわけないだろぉ？これはそういうドラマじゃないんだよ！」
「あら、そうなの？」
「まったく。母さんがいつも見てるサスペンスものじゃないんだよ、これは。黙って見ててよ、もう。」
拳太はすっかり呆れ顔である。
「あら、つまんないわね。母さん、てっきり誰が殺されるんだろうって、ワクワクしながら見てたのに。残念ねぇ。」
「そ、そんなのにワクワクしないでよ、母さん！」
潤太は思わず、ガッカリする母親にそう突っ込まずにはいられなかった。
「せっかく犯人まで予想してたのに・・・。」
殺人が起こっていないドラマを見ながら、犯人というものを予想する母親も、ちょっと変わった人なのかも知れない。
潤太は、拳太同様にテレビに映る女子高生を眺めていた。
しいて言うなら、女子高生役を務める夢百合香稟の姿を見つめていたようだ。
その彼が、信楽由里イコール夢百合香稟と知ったあの夜、彼女宛に手紙を書いたあの夜以来、彼女からの返事は今日までなかった。
新宿の街中で偶然出会った彼女。お礼とばかりに、手料理をご馳走してくれた彼女。
潤太はいろいろな想いを胸に、彼女の生き生きとした演技を見つめ続けていた。

＊　◇　＊

ある晴れた日曜日。
潤太はその日、早々と目覚めて、やりかけの絵を完成させようと、出掛ける準備を整えていた。
「さてと・・・。それじゃあ、出掛けるか。」

彼はいつものスケッチブックを抱えて、すがすがしく自室を出ていく。
「潤太！電話よぉ。」
一階から響きわたる、彼の母親の大きな呼び声。
彼は駆け足で階段を降りていく。
電話の側で待っていた母親が、駆けつけた彼に受話器を差し出す。
「あんたも角に置けないわねぇ。クスクス。このこのぉ。」
にやけ顔の母親は、彼のお腹目掛けて肘鉄を喰らわした。
「な、何だよ！？」
何が何だかわかならい潤太は、手渡された受話器を耳にあてがう。
「もしもし・・・？」
受話器の先から聞こえた声は、彼にとっては懐かしく、待ちわびていたものだった。
「香稟です。お久しぶり、元気だった？」
その弾んだ声は、いつもテレビを通して聞いている、アイドルの美声そのものだった。
「か、香稟ちゃん！？ど、どど、どうしたの？」
いきなりの電話に、彼の動揺ぶりは半端ではない。
「あのね、あたし今日、久しぶりのオフなの。潤太クン、今日ってヒマかしら？」
彼はつい、誰にも見えやしないのに、スケッチブックを後ろへ隠す仕草をしながら、上擦った声で返答する。
「だ、だだ、大丈夫だよ。今日はまったく、全然、予定入ってないんだ。」
彼はあっという間に、本日の予定を抹消していた。
「もしよかったら。あたしに絵を教えてくれないかな？」
“え”って、絵画のこと？」
「もう、当たり前でしょ！他にどういう“え”があるっていうのぉ？」
「そういわれてみれば、そうだね。ははは。」

二人は、すっかりお友達のような会話で盛り上がる。まぁこの二人はもう、まったくの他人同士とは言えないのも事実ではあるが・・・。

「そうと決まったら、これから待ち合わせしましょ。新宿駅西口の待合い室でいいかな？あなたもスケッチブックを持ってきて。」

「わ、わかった。これからすぐ行くよ。じゃあ！」

彼は喜びを噛みしめながら、ゆっくりと受話器を置いた。

彼の心臓の鼓動は、張り裂けんばかりに高鳴っている。

そんな彼の後ろには、相手の正体が気になっていた母親がたたずんでいた。

「ねぇ潤太、相手の女の子はだーれぇ？」

にやにやしながら問いかける母親。

「い、い、いや、その。と、友達だよ。そう、学校の友達なんだ。」

「あら？あんた同じ学校に、女の子の友達なんていたかしら？」

「い、いるよ！一人や二人ぐらい・・・。」

彼はうまくごまかそうと躍起になっている。本当のところ、母親の言う通り、彼は同じ学校に、女の子の友達などいなかったのだ。

「と、とにかく、ボク出掛けるからさ。行ってきまーす！」

彼は、母親の冷やかしを背中に受けながら、待ち合わせ場所の新宿駅へと向かうのだった。

◇

日曜日の新宿は、さすがに様々な人々でごった返していた。

満員電車の中から、潤太は押し出されるように、新宿駅のプラットホームへと降り立った。

彼は早足に、待ち合わせ場所の西口待合室へと向かう。

行き交う人々とすれ違いながら、彼は待合室へと駆けつけた。

「まだ来てないのかな？」

彼はグルグルと辺りを見渡したが、彼女らしき人物を捕らえることはできない。

ここまで急いで来たせいか、彼の額には汗がにじんでいた。
彼が、ポケットから取り出したハンカチで汗を拭っていると、背中の真ん中を誰かにツンとつつかれた。
彼がおもむろに振り返ると、そこには、茶色い帽子をかぶり、黒いフレームの眼鏡を掛けた、シックな色合いの衣装をまとった女の子が立っていた。
「おす、遅かったじゃない。」
「え、も、もしかして香稟ちゃん？」
「ピンポーン、正解！どう、なかなかの変装でしょ？」
彼女は、周りの人達に気付かれないような小声で話している。
「お、驚いたよ。髪型も違う気がするけど？」
「へへへ。実はね、演技用のかつらをかぶってきたのでーす。」
「ど、どうりで。」
彼女は、大きめな手提げ袋からスケッチブックを取り出す。
「ほら見て。この機に買ったんだよ。」
「あ！結構高いヤツ買ったんだね。ボクのよりグレードがいいヤツだよ、それ。」
「へぇ～。さすがに、そういうところにも詳しいんだね。」
「ま、まぁね・・・。」
感心している香稟を前に、頭をかきながら照れている潤太。
「それじゃあ、行こうか！」
「う、うん。」
彼女は、潤太の腕を掴んで引っ張るように走り出す。
まるで、出会ったあの時のように、潤太をリードする香稟。彼女の目指す方向は、山手線乗り場であった。
「ま、待って。香稟ちゃん、ど、どこに行く気なの！？」
「横浜だよ！」
「よっ、横浜！？横浜って、“ヨコハマたそがれ”のあの横浜？」
「うん！たそがれようが、たそがれまいが、今日行くところは横浜なの！」

香稟はニコニコ顔で、潤太の背中を押しながら、品川方面へ向かう山手線の電車へと乗り込んだ。
二人は隣り合って、空いている座席へと腰掛ける。
「で、でもどうして横浜に？どこか行きたいところでも？」
「八景島！」
「え、ハッケイジマっていったら・・・。八景島シーパラダイス？」
「そう！あたしね、まだ行ったことなかったんだぁ。それに、八景島は景色もすっごくきれいって言うから、そこで絵を描くのもいいかなぁって思ったの。」
胸躍らせる二人を乗せて、電車は一路品川駅へと走行していった。

◇

二人は、品川駅から京浜急行線へと乗り換えて、金沢八景駅へと辿り着く。そこからシーサイドラインを5分少々進んだ先に、八景島シーパラダイスは存在した。
「わぁ、いいところだわ。うんうん！やっぱり海が近いっていいわね。」
「ホントに島の上なんだね、ここって。ボク今まで、八景島ってただの地名だと思ってたよ。」
入場券を購入した二人は、ワイワイと賑わう園内へと入っていく。
「それじゃあ、まずはねぇー。アクアミュージアムへレッツゴォ！」
「あれ、絵を描きに来たんじゃないの！？」
「その前に、まずは視察を兼ねて思いっきり遊ばなきゃ！せっかくここまで来たんだもん。」
「そ、そりゃそうだけど・・・。」
どうも潤太は、こういったアミューズメント施設に馴染めない様子だった。
そんな彼などお構いなしに、ウキウキ気分の香稟は、及び腰な彼を引き連れて、アクアミュージアムへと駆け出していった。

◇

二人の訪れたアクアミュージアムは、いわば大規模な水族館といったところだ。

大きな水槽を優雅に泳ぐ海の生き物達、人気者のラッコやイルカといった動物達が、二人の来訪をあどけない顔で出迎えていた。

「見て見て！スタジアムでショーがあるみたいよ。行ってみましょう？」

「そうだね。」

二人がアクアスタジアムを訪れると、ものすごい人の数が辺りを埋め尽くしていた。

混み合うスタジアムをかき分けながら、二人はショーの見える位置まで足を運ぶ。

「あ、ここにしましょう。」

二人は、空いていた二人掛けのベンチへと腰掛けた。

スタジアム中央から、ショーに参加するであろう飼育係の人が姿を見せ始めた。

ショーの主役となるイルカやアシカ達が、大きな水槽の中で気持ちよさそうに遊泳している。

マイクを握った飼育係の一声で、海の生き物達の華麗なるショーの幕が上がった。

スタジアム内は、割れんばかりの大きな声援に包まれる。

まず始めに、ビーチボールと戯れるアシカが姿を見せて、お茶らけた芸を披露している。

「おお、うまいもんだね、あのオットセイ。」

「やだ潤太クン！あれアシカよ。」

「え？そ、そうなの！？ボク、アシカとオットセイの区別、わかんないんだよね・・・。はははは。」

「似てなくもないもんね。フフフ。」

二人は和やかな雰囲気の中、アシカの楽しいショーを見学していた。

それに続くのは、このショーの華であるイルカのショーである。
「あ、いよいよイルカさんだよ。」
「へぇ、どんなことするんだろう！？」
ワクワクしながら、今か今かと水槽を見つめる二人。
飼育係の指示の元、イルカ達は水しぶきを上げながら天高く舞い上がったり、台座に体を乗せては甲高い声を発して、観客席の歓声を我がものにしていた。
ファンサービス旺盛なイルカ達は、観客の期待に応えるように、すばらしいパフォーマンスを披露していた。
その様に、観客席からとてつもない拍手が巻き起こる。無論、香稟と潤太もその仲間であった。
「キャー、すっごーい！」
「うわぁ、イルカって器用なんだね！」
楽しいショーも終わり、二人はかわいい海の動物達に見送られながら、水族館内へと戻っていく。
「あ、こっちにペンギンがいるみたい！潤太クン、ほら行くよ！」
「わ、ちょ、ちょっと、香稟ちゃん・・・！」
香稟もこの時ばかりは、忙しい仕事も忘れてひらすら楽しんでいた。
潤太もそれを気遣ってか、彼女の言うがままに行動を共にしていた。
大きな敷地の中に、砦のような建造物が立ち並ぶ場所、そこはコウテイペンギンの住処である。
二人は、よちよち歩くコウテイペンギンを眺めている。
「かわいいね、ペンギン。」
「あ、エサ与えてるよ、ほら、あそこ。」
「え、どこどこ？あ、ホントだぁ。」
コウテイペンギンの憩いのプールに、無数の魚が投げ込まれると、コウテイペンギンの群れは一斉にそのプールへと飛び込んでいく。
「すごい勢いだね。あのペンギンがあんなに早く走るなんて。」

「ははは。やっぱりお腹が空くと、人間もペンギンも変わんないね。ボクと一緒だ。」
「え！？潤太クン、ごはん食べる時、あんなにがめついの？」
「君も見ただろ？ほら、君が夕食ご馳走してくれた時。」
「あ、思い出したぁ！そういえばそうだったね。あははは。」
「そ、そんなに笑わないでよ。ひどいなぁ・・・。」
二人はそんな雑談をしながらも、アクアミュージアムを思いっきり堪能していた。お互いが、今日という日を大切な思い出にするかのように。

◇

アクアミュージアムを後にした二人は、園内のレストランで軽く昼食を済ませて、次なる散策へと赴いていた。
「ねぇねぇ、次はあそこに行こう！」
「え？あ、あれ何・・・！？」
「行ってみればわかるよ。ほら、行くよ！」
二人が訪れた先は、プレジャーランドという遊園地であった。そして香凛が指さしたもの、それは、このプレジャーランドの名物である「ブルーフォール」というアトラクションだった。
ブルーフォールは、１０７メートルという高さから急降下する乗り物で、なんと最高速度は１２５キロ、重力も４Ｇかかるほど、スリル満点のアトラクションである。
「ちょ、ちょちょ、ちょっと待って！ま、まま、まさか、あれに乗ろうなんて言うんじゃ・・・？」
「もちろん！」
「わぁ、そんなに腕を引っ張らないでぇ！！」
実をいうと、潤太はジェットコースターのような、こういったスリルのある乗り物が大の苦手なのである。
「大丈夫よ。あたしが一緒に乗るんだから。ね、これもいい勉強だと思ってさ。」

「勉強ったって・・・。こんな怖い思いする勉強なんて聞いたことないよぉ・・・。」
香稟は相変わらずマイペースで、怖がる彼の手を引っ張っていく。
とうとう覚悟を決めた潤太は、彼女と一緒に、ブルーフォールという驚異の地へと足を踏み入れる。
係員の注意を聞いた後、二人を乗せたゴンドラはゆっくりと上昇を始めた。
「こ、ここ、これ、あの上まで行くんでしょ・・・？」
潤太は全身を硬直させて、上空の落下ポイントに向かって視線を送る。
「大丈夫だよぉ。たった９０秒で終わるんだからさ！」
「９０秒！？そ、そそ、そんなに落下時間かかるのぉ！？」
潤太は祈るようなポーズで、体をガタガタ震わせている。
「どうかボクをお守り下さい・・・。どうかボクをお守り下さい・・・。どうかボクを・・・。」
ゴンドラが落下ポイントまで辿り着くと、スピーカーから何やら放送が流れてきた。
「・・・。６・・・。５・・・。４・・・。３・・・。」
落下前のカウントダウンが、潤太に激しい恐怖心を植え付ける。
『ゴクッ・・・』
潤太は目を閉じて、緊張の息を飲み込んだ。
「・・・。２・・・。１・・・。」
『ガタッ・・・！』
ブルーフォールはその名のままに、急激な落下をスタートさせた。
「ぎゃぁぁぁぁぁ・・・！！！」
時速１２０キロ、４Ｇの重力が、ゴンドラに乗る二人に襲いかかる。
香稟の長い髪の毛は、降下する引力によって振り乱される。かつらが飛ばされまいと、彼女は必死になって頭を押さえていた。
潤太の引きつった顔は、さらなる悪化の一途を辿る。目を閉じき

って、歯を食いしばり、ひたすら悲鳴のような声を発していた。
落下時間の９０秒、その１分３０秒は、潤太にとってあまりにも果てしなく、そして長かった。
１０７メートル上空から地上へ到着した時には、潤太は口の中から魂が抜けて、すっかり放心状態であった。
「だ、大丈夫！？ねぇ、潤太クン、しっかりしてぇ！」
さすがにブルーフォールの驚異は、スリルに免疫のない彼にはキツかったようだ。
彼を支えながら、香稟は近くのベンチまでやって来た。
「ごめんね。あたしも、あんなにすごいなんて思わなかったから・・・。」
「はは・・・。き、気にしなくていいよ・・・。ボ、ボク、だ、大丈夫だから・・・。」
上擦った声で受け答えする潤太。彼の青ざめた顔には、まだ恐怖感が残っている。
「ここで少し休みましょうか。あ、そうだ。あたし、そこで飲み物でも買ってくるね。」
香稟はそう言うと、オープンカフェのある方向へ駆けていった。
ブルーフォールの側には、軽く休憩できるオープンカフェが備えてあった。
彼女は、店員の女性にアイスコーヒーとオレンジジュースを注文した。
「はい、お待ちどうさまでーす。」
「あ、すいませーん。」
店員の女性は不思議そうな顔で、香稟のことを何度もチラ見している。もしかすると、目の前の女性が「夢百合香稟」に似ているなと、そう思っていたのかも知れない。
香稟は二つのカップを持って、潤太の待つベンチへと歩いていく。
「あ。」
彼女はふと立ち止まる。

彼女の視界には、広げたスケッチブックに集中する潤太の姿があった。
そっと潤太の側に近づく香稟。
彼のスケッチブックには、すでにサラサラと鉛筆の線が描かれていた。
「はーい、お待たせ。」
彼女は、作画に没頭している潤太の目の前に、アイスコーヒーのカップを差し出した。
「あ、ありがとう。」
「絵、描いてたんだね。」
「うん。ちょうど、ここからの角度が、何となくいいイメージに見えたから。」
スケッチブックには、園内に佇んでいる風景が、線の太さで上手に表現されている。
香稟はまたしても、才能ある目の前の少年に感動していた。
「香稟ちゃんは描かないの？」
「え？あ、ああ、そうだね。でも、あたしも自分で描きたいもの見つけたいから・・・。」
「ふ～ん。」
彼女は結局、潤太の描く風景画を横で見つめるだけだった。
真剣な眼差しで、モチーフとスケッチブックを交互ににらみつけ、何度も鉛筆で線を立てていく潤太。ただ無造作に描かれている線が、徐々に風景へと変化していくから不思議なものだ。
これこそが、彼自身の才能なのか、熟練された技術なのか、その真意は本人すらわからないのかも知れない。
「わぁ、きれいに出来たね。」
「ありがとう。急いで描いたから、ちょっと荒くなっちゃったけどね。」
「そうかなぁ。すごく丁寧に描かれてると思うけど。」
「香稟ちゃんは誉めるのうまいね。お世辞でもうれしいよ。」

「やだ、お世辞なんかじゃないわ。あたしの素直な感想よ。」
二人はのんびり休憩したあと、再び園内散策へと赴くことになった。
香稟は、スリルなものは極力避けようと、ゆったり型のアトラクションへ潤太を誘っていた。
二人が乗車したのは、高さ９０メートルもある展望塔、その名は「シーパラダイスタワー」である。
「これなら大丈夫でしょ？」
「う、うん。ごめんね、気遣わせちゃって・・・。」
「ううん、気にしないで。せっかくここまで来て、お互いが楽しめなきゃ意味ないもんね。」
二人を乗せたドーナツ型の円盤は、ゆっくりと上昇し始める。
ガラス越しから見える景色は、それはもう言葉では言い表せないほどの絶景であった。
香稟はガラスにへばりついて、はるかかなたの遠景に心を奪われていた。
「あ、あそこに島が見えない？あそこ、どこかしら？」
「多分、房総半島じゃないかな。」
「ボウソウ？ボウソウって暴走族の島かなにか？」
「おいおい。わざとらしいボケだよ、それ。」
「あはは。これは失敬失敬。房総半島って、千葉県でしょ？」
「なーんだ、ちゃんと知ってるんじゃないかぁ。」
「えへへ、偉いでしょ？こう見えても、勉強はちゃんとしてた方なんだからね！」
「勉強かぁ・・・。」
潤太は、目の前に映る大パノラマを眺めながら、横に座る香稟にそっと話しかける。
「友達から聞いたんだけど、香稟ちゃん、高校やめちゃったんだってね？」
香稟は、少し寂しそうな表情で答える。

「うん。だって、とても学校に通える余裕はなかったから・・・。芸能活動と学業を両立させるのは、正直自信がなかったの。今になってね、結構後悔してるんだぁ。学校辞めちゃったこと。」

潤太は無意識の内に、うつむき加減の彼女を見つめていた。

「学校にいた時は友達もいたし、いろいろなところへ寄り道したりとか、楽しいことといっぱいしてたけど。でも、いざ自分がアイドルになってしまうと、そんなヒマなんかなくって、昔の友達にも声を掛けにくくなっちゃうし、最初はすごく孤立しちゃったんだなと思ったわ。」

やるせない胸の内を口にする彼女に、潤太は同情の眼差しを向けていた。

「やっぱり芸能人っていうのは、ボク達のように自由が利かないんだね。」

「まぁね・・・。あたしね、小さい頃、当時のアイドル歌手に憧れて、テレビを見ながら一緒になって歌ったりしてた。あたしは、人前で歌を歌ったり、演技したり、みんなに見られることが大好きなんだって・・・。あたしは今でもそう思ってる。だから、この世界に入ったこと後悔はしてない。だけど・・・。」

「だけど？」

そう聞き返す潤太。

「いざ芸能界に入ってみると、決して華やかなスター街道ばかりじゃなくって、楽しいことよりも、辛いことの方が多かった気がするな・・・。」

芸能活動を振り返り、悲哀感を漂わしている香稟。彼女はこれ以上、多くを語ることはなかった。

潤太は、そんな彼女に気遣って、声を掛けることが出来なかった。

彼女の瞳は、満たされない虚空を見つめている。その先には、果たして何が見えていたのだろうか？

それは、一般人の潤太の知る由もない、芸能界で生きる者の孤独感だったのかも知れない。

二人はその後、広い園内をぶらぶらと散歩してから、素晴らしい休日を過ごさせてくれた八景島に別れを告げた。

◇

二人は電車を乗り継いで、夕暮れ染まる代々木公園へと足を運んでいた。

香稟のスケッチブックは、この時間まで真っ白なままであった。

潤太が、そのことについて彼女に触れてみると、いい風景が見つからないと、彼女は微笑みながらごまかしていた。

そして二人は、お互いにとって思い出の風景に辿り着く。

「ここね。あたしにくれたあの風景画。」

「え？よくわかったね。」

「当然でしょ。だってあの絵の風景、あたしも一緒に見てたんだもん。」

「ははは、そりゃそうか。」

二人は、その風景画を一望できるベンチへと腰掛けた。

「あれから数週間が経ったんだね。まるで昨日のことみたい・・・。」

「今思うと不思議だよ。どうしてボクと君があんな形で出会ったんだろうってね。」

「それって、運命だとか言いたいの？」

「運命かぁ・・・。そうだとしたら、おもしろい運命だね。」

香稟は、手提げカバンからスケッチブックを取り出す。

「あ、ここの風景描くの？」

「うん。練習兼ねがね。あたしの方から誘っておいて、何も描かないんじゃ、裏切り行為だし。」

「それは言えてる。」

彼女は鉛筆を手に持ち、潤太の指導を受けながら、一筆一筆白いキャンパスに線を入れていく。

さすがに素人のキャンパスには、思い通りの風景はなかなか写っ

てはくれないようである。
「う～。どうもイメージ通りにならないなぁ・・・。」
「最初はみんなそうだよ。最初から上手に描ける人なんていないさ。少しずつ慣れていけば、きっとうまくなると思うよ。」
「ん～、複雑ぅ～。すぐ上手になりたーいぃ！」
こういう時ばかり、子供っぽくダダッ子ぶる香稟。
そんな彼女さえも、潤太の目にはかわいらしく見えていたようだ。
微笑ましい一時を過ごしていたその刹那、二人の背後から聞き覚えのある声が聞こえた。
「あれぇ！？おい、潤太じゃないか！」
『ドキッ・・・！』
彼はビクッと、瞬時に体を震わせた。
その声の方向へ振り向くと、なんとそこには、彼の友達代表といっても過言ではない、色沼と浜柄のコンビがゆっくり近づいていた。
「や、やや、やばい・・・！」
彼は心の中でそう叫んだ。
「おいおい、潤太、何してる・・・。あら？そこの女の子は・・・！」
やはり邪魔者二人は、彼の横にいる香稟の存在に気付いたようだ。
「あ！あ、いや、この子はその・・・！」
気の焦りから、口がおぼつかない潤太。
「あれ？その子、夢百合香稟にちょっと似てないか！？」
「おお、ホントだ！髪型は違うけど、そっくりさんじゃないかっ！」
邪魔者二人は、夢百合香稟の話題で盛り上がり始めた。
その二人の言動に、潤太はこれまで以上にしどろもどろになってしまった。
「あ、あのあたしは、夢野香といいます。」
「え！？」
あたふたする潤太に見兼ねてか、香稟はその場に立ち上がって自己紹介した。

しかも、彼女の口から出てきた名前は、聞き覚えのない名前であった。彼女の名乗った“夢野香”とはいったい・・・！？
「あたしと潤太クンは、お互い絵を描くお友達なんです。あの、あなた達も潤太クンのお友達ですか？」
「はいはい、オレは色沼っていいます！あ、ちなみにコイツは浜柄っていいます！」
潤太は唖然として、その場のやり取りを眺めていた。
「おい潤太！ちょっとこっちに来い！」
「わ、わぁ！？」
潤太は、色沼にいきなり腕を掴まれて、彼女から少し離れたところへ連れ出された。
「な、何だよぉ！？」
「おい、おまえ、いつの間にあんなカワイイ子と知り合ったんだ！？しかも彼女、香稟ちゃんにそっくりじゃないかっ！」
「そうだそうだ！おまえばっかりズルイじゃねぇかっ！」
二人は理不尽な理由で、潤太を頭ごなしに怒鳴りつける。
それもそうだろう。なんたって彼女が、あのスーパーアイドルに瓜二つときたら、この二人もたまったもんじゃないといったところだ。
「ちょうどこの前の日曜日にさ、たまたまここで絵を描いてたら、彼女と偶然出会ったんだよ。そこで、いろいろ絵の話してたら、仲良くなってさ。」
ごまかそうとする潤太に、二人は冷ややかな視線を送っている。
「ほう、それはまた偶然だなぁ。ケッ、運がいいことで！」
「おまえ、何でそういうことを、このオレ達に報告しなかったんだよ？幸せ独り占めってヤツか、おい！？」
「そ、そうじゃないって！か、彼女はただの友達だしさ。それに、どうしておまえ達に報告する必要があるんだよっ！」
色沼と浜柄の二人は、潤太の困り顔までグッと接近した。
「おいおい、そういう言い方すんなよぉ。オレ達昔からの友達じゃ

ないか？」
「そうそう、そういう言い方はよくない。オレ達は友情で結ばれてんだぞ？」
潤太はしかめっ面で口を尖らせる。
「何言ってんだよ。こういう時ばっかり、そんなこと言ってさぁ。正直に話したんだからさ、もう放っておいてくれよ。」
二人はにやけた顔を見合わせる。
「まぁ、いいよ今日は。オレ達もこれから行くとこあるしさ。」
「コレに関しては、明日にでも、じーっくり伺うとするかぁ！」
「か、勘弁してよぉ・・・。」
邪魔者二人は、ベンチに一人座る彼女に愛想を振りまいて、この場を離れていった。
疲れ切った顔で、彼女の元へと戻ってきた潤太。
「何話してたの？」
「大したことじゃないよ。ただ、君が誰なんだとか、どこで知り合ったんだとか、そういったつまらない話だよ。」
「なるほどね・・・。つまり、あの人達はあたし達を見て、恋人同士かと思ったのかな？」
予想もしない香稟の言葉に、潤太は思わず顔を赤らめた。
「え！？ど、どど、どうなのかなぁ。よくわかんないなぁ。」
慌てている潤太に、香稟は真剣な眼差しを向けている。
「ねぇ、あたし達って、他の人達にどう見えるのかな？友達同士・・？それとも兄妹・・・？それとも・・・？」
目の前にいるアイドルの思わせぶりな態度に、潤太の視線は空へと逃げていく。
「そ、そうだなぁ・・・。ど、どど、どうなんだろうね！？あは、あはは・・・！」
香稟は立ち上がると、夕焼け空を見つめる潤太の側へと歩み寄る。
彼女の小さい肩が、潤太の腕にそっと触れる。
潤太は、心臓の音をバクバクさせている。その音はあまりに大き

く、彼女の肩まで伝わるほどだ。
香稟は黙ったまま、横にいる彼に熱い視線を送っている。
そのつぶらな瞳を直視できない潤太は、とてつもない緊張感に言葉を失っていた。
「潤太クン・・・。」
香稟のやさしい呼びかけに、彼の体は硬直した。
「は、はいぃ！！」
彼女の方へ、赤ら顔を向ける潤太。
「・・・・・・・。」
「・・・・・・・。」
わずかな沈黙・・・。
その時の二人の視線は、お互いの気持ちを探り合っているようだった。
次の瞬間、彼女の艶っぽい唇がかすかに動く。
「もう、帰ろっか？」
「えっ！？」
香稟はニコッと、かわいい笑顔を見せる。
「あ、ああ、そ、そそ、そうだね・・・。」
どうやら潤太の気持ちは、彼女からの熱いラブコールを期待していたらしいが、残念ながら現実はそう甘くはなかった。
「そうだよな・・・。彼女は超一流のアイドルだもんな。所詮、ボクなんか手の届く人じゃないし・・・。」
彼は自分の気持ちをそう納得させていた。と言うよりは、そう言い聞かせていたのかも知れない。
彼女はクルッと振り向き、ゆっくりと帰り道へと進んでいく。
潤太は、想う気持ちを胸に秘めて、そんな彼女の後ろ姿を追っていった。

◇

「今日は楽しかった。付き合ってくれてありがとう。」

「ボクの方こそ、誘ってくれてうれしかったよ。」
潤太と香稟の二人は、この日の別れの舞台である新宿駅にいた。
駅構内は相変わらず、押し寄せる波のごとく、人々の群れで溢れている。
「それじゃあ・・・・。」
「うん・・・・。」
二人は片言な別れのあいさつを交わした。
香稟は改札口へと足を向ける。それを無言で見つめる潤太。
その直後、慌ただしかった駅構内に、ほんの一瞬だけ静けさが訪れた。
彼女はおもむろに振り向いた。
「潤太クン！また・・・。また、あたしに絵を教えてね！」
その声は、駅構内に高々に反響する。
「うん、いいよ！またいつでも電話してよ！」
数メートル離れた二人は、反響する声でキャッチボールした。
さすがは新宿駅。この静けさは、流れゆく人々によって、あっという間に壊されていく。
「うん、また電話する！また一緒に付き合って・・・！今度は、友達としてじゃなく・・・。」
香稟の言葉は途中で途切れた。
潤太の耳には、彼女の言葉が最後まで届かなかった。
「え？な、何！？」
潤太の問いかける声は、もう彼女の元には伝わらなかったようだ。
溢れんばかりの人の群れに、彼女は巻き込まれるように姿を消していた。
辺りの人々は、立ちつくす潤太の横を通り過ぎる。
彼の頭の中を、香稟が残した最後の言葉が繰り返し巡っている。
「友達としてじゃなく・・・。」
その先に続く言葉は何だったのだろうか？彼女は、潤太に何を伝えようとしたのか？

潤太はその答えを導けないまま、スケッチブックを強く抱きかかえ、中央線乗り場へと足を運んでいった。

5．知られざる過去と秘密

芸能事務所「レンショウ・カンパニー」。歌手やタレント、それにお笑い芸人までもが所属する、一流芸能プロダクションである。

ある日、この事務所の社長室には、所属する一人の男性タレントと、事務所の社長の姿があった。

社長は、某テレビ局からある二時間番組の出演依頼を受けたようで、テレビ局側が名指しで指名した、その男性タレントと詳細内容を打ち合わせていた。

その二時間番組とは、ある有名な作家が書いた、ミステリー小説をドラマ化したものらしい。

そして、その男性タレントが演じる役は、主人公である高校生と共に活躍するちょっとキザな探偵役、ということだった。

「というわけだ、琢巳。おまえにとって悪い話ではないだろう？」

「めんどくさいな。オレにミステリー役を頼むなんて、そのテレビ局は何考えてんのかねぇ。」

その男性タレントは、少々呆れた顔で答えた。

彼は、この事務所の看板タレントである連章琢巳。将来有望の２６歳。その名の通り、彼はこの事務所社長の息子である。

「まぁ、そう言うな。おまえもバラエティーばかりじゃ、長くは続かないぞ。ここは、おまえの違ったイメージを見せつけるチャンスだと思うが？」

「確かにね。父さんの言うことも、わからなくもない。だけどさ、何かこう、オレにとってやる気のでるきっかけってヤツが欲しいんだよね。」

「きっかけ？おいおい、仕事はあくまでも仕事だぞ？そんなわがままを言うんじゃない。」

「ふぅ・・・。」

連章琢巳は溜め息一つこぼした。

「ねぇ、父さん。それより、そのドラマの相手役って誰なんだい？」
社長は、テレビ局から渡された封書から資料を取り出して、一枚一枚目を通し始めた。
「お、これだな。ああ、新羅プロの・・・。」
「え？新羅プロって言ったら、あのビンボー事務所の新羅プロダクションかい？誰だよ、いったい？」
「夢百合香稟だよ。おまえも知ってるだろ？あのスーパーアイドルの。」
「ああ、知ってるよ。彼女を知らないヤツなんて、この業界にそうそういるもんじゃないからね。」
連章琢巳はニヤっと、不敵な笑みを浮かべた。
「へぇ～、彼女が相手役ねぇ・・・。」
彼は少し間を置いて、目の前の社長に了解の意思を示す。
「父さん、オレこの話乗るよ。」
「ん？さては、おまえ、夢百合香稟が相手だからか？おいおい、あまり過激な行動はするなよ。彼女は人気絶頂の売れっ子アイドルなんだからな。」
「心配すんなよ。何も取って食おうなんて考えちゃいないんだからさ。かる～く、つば付けとくだけだって。」
「まったく・・・。おまえというヤツは、本当に凝りん男だな。」
ここにいる連章琢巳には、以前より悪い噂ばかりがこの芸能界に流れている。
女性関係のゴシップが中心で、恋人発覚のスクープが報道されたかと思えば、その数ヶ月後には、また違う女性との噂が報道されてしまう、といった具合なのだ。
確かに、二枚目タレントとして人気を博している彼だけに、女性にもてるのは間違いないが、本人もかなり女好きのようで、こういった噂が報道されるのもうなずける話なのである。
連章琢巳は、打ち合わせを終えて社長室を出ていく。
彼はドラマの資料を眺めながら、にやけた笑みをこぼした。

「夢百合香稟か・・・。へへ、これはおもしろくなってきたな。」

＊　◇　＊

ある晴れた日曜日の夕刻、ここは唐草潤太の自宅である。

今日は特別ゲストとばかりに、スーパーアイドル夢百合香稟が、彼の家へと来訪していた。

潤太と香稟の二人は時折、電話で会話したりして親睦を深めていた。

彼女のオフの日には、二人でどこかへ出掛けたり、風景画を描きに行ったりと、もうすっかり友達以上、恋人未満な付き合いをしていた。

今日はまさにその延長線であって、彼女は唐草家の夕食に招待されていたのである。

予想もしなかった潤太のガールフレンドに、彼の母親が腕によりをかけて料理をこしらえている間、香稟の強い要望により、潤太は彼女を自室へと招き入れることになった。

「き、汚い部屋だけど、どうぞ。」

「ゴメンね、無理言って。ただね、潤太クンの部屋が見てみたかっただけなの。」

香稟は、潤太の許しを得て、彼の部屋へと足を踏み入れる。

「わぁ・・・。」

彼女は部屋一面を見回した。

潤太の部屋の壁には、彼自作の風景画がいくつも飾ってある。

キチンとした額縁で保管されているもの、スケッチブックから抜き取っただけのもの、そのすべてが、彼の展覧会のごとく華やかに飾られていた。

「はは、潤太クンの部屋って感じだね。」

「ああ、この絵を見て言ってるの？」

「あれ？あの額縁の絵、何かリボンが付いてるけど・・・。」

香稟は、豪華な額縁で飾られた風景画の近くに歩み寄った。

その額縁の側にある赤と白二色のリボンには、“第37回中学生風景画コンテスト佳作”と記されていた。
彼女はびっくりした顔で、潤太の方へと向き返った。
「これ、賞取ったの！？すご～い。」
「そんなにすごいってほどのもんじゃないよ。小さい規模のコンテストだしさ。何とか佳作に食い込んだってとこかな。」
「でも、賞は賞よ！すごいことだよ。」
褒めちぎる香稟を前に、彼は照れる一方であった。
「ふーん・・・。」
彼女はもう一度、潤太の部屋を見回した。
「でも・・・。あたしが予想した、同世代の男の子の部屋と違ってるな、ここ。」
「え、予想って、どういうの予想してたのさ？」
「もっとね、何て言うのかな。男臭いというか、むさ苦しいというかぁ・・・。」
「なるほど。ボクの部屋には、確かにそういう雰囲気はないかもね。」
彼女はおもむろに、潤太のベッドの方へと歩み寄り、その場にしゃがみ込んだと思いきや、いきなりベッドの周囲を物色し始めた。
「か、香稟ちゃん！な、なな、何してんの！？」
香稟の不可解な行動に、彼はびっくりして大声で叫んだ。
彼女はニッコリ顔で振り向く。
「探してるのよ、ほら、ア・レ！」
「ア・レ・・・？」
思わせぶりな言葉に、潤太の頭に疑問符が浮かぶ。
「ほら、男の子ってみんな、枕元とかにエッチな本とか隠すじゃない？だからぁ、潤太クンもそうじゃないかなぁってね！」
「い！？な、なな、何言ってんのさ！？そ、そんなもの、そこにはないよ！」
目を細めて、クスクスと微笑む香稟。

「えぇ～？ホントかなぁ・・・。でも、探してみればわかるもんね。」
彼女はまさぐるように、ベッドの中を調査し始めた。
「わ、わ、や、やめろってぇ！」
潤太は慌てて、彼女を止めようとした。
「わわっ！？」
彼は焦っていたばかりに、床に敷いてあったカーペットの淵に足を引っかけてしまい、勢いよくベッドの上へと倒れ込んだ。
「キャッ！？」
彼の体は、ベッドにいた香稟に覆い被さってしまったのだ。
「・・・あっ！」
ベッドの上には、向き合ったままの潤太と香稟がいる。
「・・・・・・。」
「・・・・・・。」
二人は見つめ合ったまま押し黙っている。
お互いの瞳に、お互いの恥らう顔が映っている。
部屋にある壁掛け時計が、静かな音で秒針を刻み、窓の外からは、子供達の笑い声がこだまする。
そんな音や声は、今の二人には届かない。
二人だけの世界が続く中、香稟のうつろな瞳がそっと閉ざされていく・・・。
『ゴク・・・』
大きな息を飲み込む潤太。
彼は止めようのない衝動に、その身をゆだねていく・・・。
『コンコン！！』
突然、潤太の部屋のドアがノックされた。
二人はハッと我に還るように、ベッドから逃げるように離れた。
「おい、兄貴ぃ！ごはんできたってさぁ！」
ドアの先から聞こえた声は、彼の弟である拳太のものだった。どうやら彼は、夕食の支度が整ったことを知らせにきたようだ。

『カチャ！』
拳太は勢いよくドアを開けた。
「おい兄貴、ごはんだって。」
「わ、わかったよ、すぐ行くから・・・。」
拳太は、潤太のことなど目もくれず、赤ら顔の香稟に愛想のいい笑顔を振りまく。
「香稟ちゃん、早く行こ！ほらほら！」
「あ、ちょ、ちょっと待って、拳太クン・・・！」
拳太は無理やり、彼女の細い手を引っ張っていった。
潤太は苦笑しながら、急ぎ足の二人の後に付いていった。

◇

本日の唐草家の夕食は、いつも以上に豪勢なものであった。
メインディッシュの牛肉ソテー、サイドメニューのコンソメスープにフレンチサラダ、そのすべてが、この家でめったに見ることのない料理ばかりだ。
「さぁさぁ、どうぞ召し上がって。」
潤太と拳太の母親が、香稟に向かって暖かい声を掛けた。
「どうも今日はありがとうございます。」
彼女は丁寧な姿勢で、彼らの両親に一礼した。
彼らの父親は三日月のような目をして、うれしそうに大きく笑う。
「いやぁ、まさか潤太がこんなかわいいギャルを連れてくるなんてな、ホントにビックリだよ。ワッハッハッハ！」
「いやぁねぇ、お父さん！ギャグだなんて。彼女はお笑い芸人じゃないのよ。」
「おいおい、母さん、ギャグじゃなくてギャル。オレが言ってるのはギャルだよ。」
間の抜けた会話で盛り上がる夫婦。
「そ、そんなのどうでもいいよ。早くいただきますしよう。」
潤太の仕切りにより、全員が合掌し、ようやく夕食タイムとなっ

た。
「どれも、とってもおいしいです。」
「まぁ、どうもありがとう。」
どうやら母親の作った料理は、香稟の口にピッタリだったようだ。
「あ、香稟ちゃんだぁ！」
突然、テレビを見ていた拳太が叫んだ。
一同は、その声にビクッと体を震わせる。
拳太の指さすテレビの画面には、夢百合香稟が登場するＣＭが放映されていた。
「な、何だ、テレビのことか。」
潤太は、ブラウン管越しの香稟を見つめた。
「おぉ！？おいおい、このテレビの子、彼女にそっくりじゃないか？」
父親のとんでもない一言に、思わずずっこける唐草兄弟。
「と、父さ～ん、何言ってんだよぉ。ここにいる香稟ちゃんと同一人物だってぇ！」
「何！？そ、そんなバカな！だって、おまえ。彼女、テレビの中で動いてるぞ？ま、まさか二人いるわけじゃないだろうが！？」
父親は、テレビに映る香稟と目の前にいる彼女を見比べて、ただひたすら驚いている。
そんな大ボケな父親に、潤太は冷静沈着に事情を説明する。
「あのね、父さん。テレビに映ってる彼女は、ＶＴＲっていって、いわゆるビデオに映った彼女なんだよ。つまり、テレビの中の彼女は、ここにいる彼女の少し前の彼女というわけなんだ。」
「彼女彼女って・・・。おまえ、もう少しわかりやすく説明せんかっ！」
これ以上、どうわかりやすく説明できるのだろうか・・・？この時の潤太は戸惑いながらそう思った。
「まぁ、いいじゃないの。それより早くご飯食べて下さいな、お父さん。」

「いやいや、そうはいかないぞ、母さん！この謎を解き明かさん限りは、オレはぁ、メシなぞ、のどを通らんからな！」
父親は腕組みしたまま、頑固な姿勢を見せつける。
「あ、あの潤太クンのお父さん、よろしいですか？」
この一連の会話を聞いていた香稟が、自ら事情説明に乗り出した。
「さっき潤太クンが言った通りで、テレビに映っていたあたしは、ビデオテープの中に映っていたものなんです。ほら、最近のお父さんお母さんも、お子さんをビデオに収めること多いじゃないですか。原理はそれと同じなんです。つまり本人を目の前にして、ビデオからその人物を見るといった感じで・・・。」
香稟の例題を添えた説明に、父親はウンウンとわかったようにうなずいた。
「おお、なーるほど！そういうことだったのかぁ。いやぁ、さすがはゲイノージンだね、キミは。わっはっはっは！」
「いえ、別に芸能人だからという理由は、ちょっと違うと思いますけど、わかっていただけてよかったです。」
高笑いの父親に、ちょっと照れ気味の香稟だった。
「おい潤太！おまえも、彼女みたいにちゃんと、わかりやすく説明できるよう勉強せんかっ！ホントにこの息子どもは、どうも口べたでいかんなぁ。」
潤太は心の中でつぶやく。
「・・・彼女の説明って、ボクの説明と、さほど変わらない気もしたんだけどなぁ。」
ちょっとおかしな、そんな和やかな会話が飛び交う中、唐草家の夕食会は楽しく続くのだった。

◇

どっぷり暗闇に包まれた午後９時過ぎ。
楽しい夕食会も終わり、香稟が唐草家を後にする時間となっていた。

香稟は、潤太の両親に深々と頭を下げて、この上ない感謝を伝えていた。
潤太は、彼女を駅まで送るため、彼女と一緒に家を出ていく。
「あ、待ってくれぇ！オレも送るよぉ！」
「ダメだ、拳太！おまえは今日、ご飯の後片づけをする日じゃないかっ！」
「そ、そんなぁ～・・・。」
拳太は肩を落として、居間の方へと消えていった。
潤太と香稟の二人は、薄暗い電灯の下を歩き始める。
「今日はありがとう。楽しかったし、お料理もとってもおいしかったわ。」
「母さん、かなりがんばったみたいだからね。いつもだったら、あんな豪勢なおかずなんて作らないもん。よほど、香稟ちゃんの来訪がうれしかったと見えるな。」
「そう言ってもらえると、遊びに来た甲斐があったわ。フフフ。」
二人は、肩を触れ合わす程度に接近して歩いている。それは、明らかに出会った頃とは違っていた。以前と違うお互いの気持ちを、近づくことで意識し合っているようだ。
「あ、そうだ！」
「ん、どうかしたの？」
香稟はうれしそうな顔で、すぐ側にいる潤太の腕を掴んだ。
「あたしね、今度二時間ドラマの主役やるの！明日から撮影開始なんだ。」
「へぇ、そうかぁ。どんな役なんだい？」
その二時間ドラマのあらすじを熱く語る香稟。
「あたしが演じる高校生が通う学校でね、殺人事件が起こるの。そこで、この高校生がある私立探偵と一緒になって、犯人を突き止めていくっていう物語なの。」
「おお、ちょっとかっこいい役なんだね。がんばってね。」
「うん。放映はね、二週間後の金曜日、午後９時からの“金曜サス

ペンス劇場”だから。絶対に見てよね。」
「了解！」
香稟の表情からは、仕事に対する前向きさが伝わってくる。それは、これからの芸能活動に、新たな希望の光が射し込んだことによる、彼女なりの喜びでもあった。
芸能人としての生活に嫌気が差し、移動中の社用車から逃げ出したあの香稟は、少しずつだが、自分の仕事に張り合いを持ち始めていたようだ。
潤太は、まぶしいほど輝くアイドルを横に見て、心なしか自分が誇らしく思えた。

＊　◇　＊

某テレビ局Dスタジオである。
本日ここでは、“金曜サスペンス劇場”の撮影が行われる。
スタジオ内には、撮影スタッフを始め、出演者達がぞろぞろと集まってきた。夢百合香稟もその中の一人であった。
彼女が緊張気味にスタジオへ入ってくると、彼女を待っていたかのように、一人の役者が声を掛けてくる。
「やぁ、香稟ちゃん。オレは連章琢巳。今日からの撮影、よろしくたのむよ。」
クールな表情にキザな話し方、このドラマで香稟の相手役を演じる連章琢巳である。
「あ、よろしくお願いします！」
香稟は、いつも通りの元気なあいさつを交わした。

◇

「よーし、それじゃあ本番行ってみよーかぁ！」
簡単なリハーサルも終わり、撮影監督の大きな声がスタジオ中に鳴り響く。
このドラマの主演に抜擢された香稟は、緊張な面もちで、いざ“

スタート”の声を待ち望んでいる。
相手役の連章は台本片手に、自分のセリフの最終確認をしている。
「よーい、スターッ！」
撮影監督の一声で、スタジオ内はドラマの舞台へと変わった。
ここで撮影されるシーンは、主人公の高校生が、知人に紹介された私立探偵事務所を訪ねに来るといった設定である。
「あ、あの、あたし、霞丘麗子といいます・・・。あ、あなたが、探偵の雲野内さんですか？」
「・・・そうだけど？オレに何か用かい？」
「あ、あの・・・。じ、実は、あたしの通う学校で、さ、殺人事件が起こっちゃって・・・。」
香稟と連章のツーショットが続く。
二人はセリフを噛むことなく、すっかりドラマの世界へ入り込んでいるようだ。
「はいオッケー！二人ともお疲れさーん！」
このシーンでは、少しのＮＧはあったものの、わずか二時間というスピードで撮影を終えていた。
ようやく緊張の糸がほぐれた香稟は、顔をほころばせながら、撮影スタッフにあいさつする。
そんな彼女の側へやって来た、彼女のマネージャーの新羅今日子。
「ご苦労さま。いい演技だったわね。」
「ありがとうございます。」
真面目に仕事に取り組む香稟の姿は、新羅にとってこの上ない喜びだったようだ。
「いやぁ、すばらしい演技だったね。さすがはスーパーアイドル夢百合香稟。その名を汚さない迫真の演技だったよ。」
にやけた顔で現れた男、相手役の連章琢巳である。
彼はサラサラとした髪の毛をかき分けて、香稟の側へとやって来た。
「ありがとうございます。明日もよろしくお願いします。」

「もちろんだよ。キミのような魅力的な女性の相手役なんて、こんな光栄なことはないからね。オレの方こそ、よろしくお願いするよ。」
自慢の口説き文句を口にする連章。彼は得意の流し目で、香稟の横にいる新羅に目を向ける。
「これはこれは、新羅さんじゃないですか・・・。お元気そうで何よりで。ククク・・・。」
凍りつくような彼の視線に、新羅の顔色が急変した。
「・・・連章クン、あなたも元気そうじゃなくて？」
「ええ。至って元気ですよ。今回はお世話になりますよ、新羅さん。あ、そうそう、社長さんによろしく伝えて下さいよ。今後ともよろしくってね。」
新羅の目つきがいつになく鋭くなる。小刻みに震えながら、彼女は何かをこらえているようだ。
「それじゃあ、また。」
連章はウインクを一つこぼすと、スタジオから軽やかに出ていった。
「・・・どうかしたんですか？今日子さん？」
「な、何でもないわ。さぁ、わたし達も早く出ましょう。」
香稟の問いかけに答えを出さない新羅。
彼女は平静を装いつつ、香稟の背中をそっと押しながら、スタジオから姿を消していった。

＊　◇　＊

「よぉ、潤太クン！おっはよう！」
いつもと変わらない朝、ここは潤太の通う高校だ。
眠い目を擦る潤太に声を掛けたのは、いつも通りの“あの”二人だった。
「おはよう、ふあぁ・・・。」
「何だよ、おまえ。こんなすがすがしい朝なのに、そんなアホみた

いなあくびしおってからに・・・。」
色沼と浜柄の二人は、彼に呆れた表情をぶつけている。
「そんなこと言われてもさぁ。昨日、仕掛かってた絵があったもんだから。」
「相変わらずそれかい！おまえもホントに好きだなぁ。」
「まぁね。」
“絵”というキーワードで、色沼・浜柄コンビは例の話題を持ち出す。
「おうおう、そういえばさ、彼女元気か？ほら、夢野香ちゃん！」
「相変わらず、二人で楽しくお絵かきしてんのか？」
潤太は素っ気ない顔で、両手を大きく振り乱す。
「いやいや、会ってないよ全然。だってボクと彼女は、付き合っているわけじゃないしさ。ちょうどおまえ達と偶然出会った時以来、彼女とは会ってないよ。」
「ほう。そうか、そうか。それはよかったな。」
「な、何だよそれ？何でよかったのさ？」
色沼は鋭い目つきで、潤太の顔に人差し指を突きつける。
「あたりめーだろぉ？おまえみたいな根暗なヤツが、あんな香稟ちゃん似の女の子と仲良くなるなんて、たとえお天道様が許しても、このオレ達は許さねぇぜ！」
「そうだそうだ！おまえに彼女なんてもったいないからな！」
子供っぽくひがむ色沼と浜柄の二人に、溜め息を一つこぼす潤太であった。
「・・・おまえら、それでも仲間かよ・・・。ひどい言われようだね。」
二人はニカッと笑みを浮かべて、彼を押し倒さんばかりに急接近してきた。
「というわけで！おい潤太、彼女の電話番号を教えろ！」
「は！？なっ、何が、というわけなんだよ！ボ、ボク電話番号なんて知らないよ！」

「何ぃ！？じゃあ、住所ぐらいは知ってるだろ！？」
「それも知らないんだよ！」
「何ぃぃ！？じゃあ、じゃあ、よく遊んでる場所ぐらいは聞いてるだろ！？」
「知らないって。そういったプライベートな話はしてないんだよ！」
「何ぃぃぃ！？そ、そそ、それじゃあ、趣味とか特技ぐらいは・・・！」
この場が突如、シ～ンと静けさに包まれた。
「・・・おいおい、趣味と特技知ったところで、オレ達に何の得もねぇじゃねぇか・・・。」
「そうだな・・・。」
色沼と浜柄の二人、そして潤太が、空しい風に吹かれていた、そんな矢先だった。
潤太の耳に、夢百合香稟の名前が飛び込んだ。
教室内にいる彼のクラスメイト達が、何やら彼女のネタで盛り上がっている。
彼がそわそわしながら、その話題に聞き耳を立てる中、色沼はいち早く、クラスメイト達の会話を理解したようだ。
「おお、そういえば香稟ちゃん、今度二時間ドラマやるんだったな。」
それを聞いて、浜柄は相づちを打つ。
「ああ、例の金曜サスペンスだろ？確か二週間後の放送だったよな？」
その時、潤太は正直驚いていた。目の前にいる二人の、夢百合香稟に対する情報の早さに脱帽していたのだ。
「・・・でもよ、相手役がちょっと気になるよなぁ。」
「ああ～、アイツな。確かにうれしい相手役じゃないな。」
“気になる相手役”に、素朴な疑問を抱いた潤太。
「ねぇ。何が気になるの？」
色沼は芸能オタクとばかりに、彼の質問にすぐさま答える。

「いやな、相手役の連章琢巳っていうのはさ、言ってみれば、芸能界のスケコマシって感じでな。連章さ、昔はろくに売れないタレントだったんだけど、ある有名女優と不倫疑惑が持ち上がった途端、あっという間にスターの仲間入りしちゃったんだ。」
「ふ～ん。そういうことってあるのかぁ。」
「いやそれがさ、今でもヤツは性懲りもなく、そういった女絡みの噂が絶えない男なんだよ、またこれが。」
「ふ～ん・・・。で？」
色沼の言わんとする意図を、まったく理解できていない様子の潤太。
色沼と浜柄の二人は呆れ顔で、おとぼけた彼に念を押すように釘を刺す。
「おいおい、おまえ、鈍いヤツだなぁ。つまり、香稟ちゃんがヤツに目を付けられる可能性があるってことだよ！」
「つまり、ゲイノースキャンダル！夢百合香稟、連章琢巳とラブラブかぁ、とかいうニュースが飛び込んでくるかもってこと！」
「えっ！そ、それって。そんな、まさか！？」
潤太はその衝撃に愕然とした。
この事実は、一般人には味わえない優越感を味わっていた彼にとって、この上ない焦燥感の到来を告げていた。
「そ、そんな！か、彼女に限って、まさか・・・！」
「おいおい、何だよその言い方は～？まるで、香稟ちゃんを自分の彼女みたいにいいやがって。」
「え！？あ、い、いや。そ、そそ、そういうわけじゃないんだけど・・・。あは、あはは・・・。」
今の彼は、乾ききった笑みでこの場をやり過ごすしかなかった。
なぜなら彼の心境は、ただならぬ不安さに支配されていたからである。

＊　◇　＊

それから一週間が過ぎた。
次週放映される金曜サスペンスドラマの撮影は、完成度１２０％の出来で無事終了した。
今夜、このドラマ関係者が集まる打ち上げパーティーが、都内の某高級ホテルのラウンジで開催されていた。
番組スポンサーのお偉いさんの堅いあいさつが終わると、会場に集まった関係者達が、テーブルの上に飾られたオードブルに舌鼓を打つ。
「いやぁ、今回は非常にいいね。大変結構、結構！」
「ありがとうございます。今後ともよろしくお願いします。」
スポンサーのお偉いさんはすっかり大喜びで、テレビ局のプロデューサーはさらにご機嫌を取ろうと、必死に両手をすり合わせていた。
ドラマの撮影監督や番組のディレクターもが、恐縮しながら二人の会話に参加している。
一つのドラマの打ち上げとは、こういうしがないものなのである。
その頃香稟は、女性のスタッフや共演者達と、撮影時の苦労話に華を咲かせていた。
そこへ現れたのは、彼女の相手役を演じたあの連章琢巳である。
「やぁ、香稟ちゃん。今回はお疲れさま。」
「あ、連章さん。どうもお疲れさまでした。」
連章はほくそ笑みながら、ドレスアップした香稟を見つめた。
「ほう。いつも素敵だけど、今夜は一段ときれいだね。改めてキミの美しさを知ったな・・・。」
「そ、そんな・・・。」
歯の浮くような連章のセリフに、香稟は恥ずかしそうにはにかんだ。
「あれ香稟ちゃん。ジュースなんか飲んでるのかい？せっかくのパーティーなんだから、ワインでもどうかな？」
「え・・・。だ、だけど、あたしはまだ未成年ですし・・・。それ

にお酒なんて、まともに飲んだことないですから。」
「それじゃあ、なおさら飲まなきゃ。せっかくの打ち上げなんだよ。今夜ぐらいは、少し羽目をはずしてさ、みんなと一緒に楽しまなきゃ。それに大人になるためにも、少しぐらいお酒をたしなむことも大事だと思うけどな。」
ウエイターからワイングラスを受け取った連章は、琥珀色に輝くそのグラスを香稟に差し出した。
「ほら・・・。このワインはね、ボジョレー・ルマンといって、成功を祝うワインなんだ。今日という日にピッタリだと思わないかい？」
「そ、そうですけど・・・。」
彼女は未だにためらっている。今一歩、常識という壁を越えられない。
「さぁ、乾杯しようよ。オレとキミの出会いを祝してさ。」
「え、え・・・。」
不安そうな顔の彼女に、連章は無理やりワイングラスを持たせた。
「乾杯・・・。」
ニヒルを気取る連章は、手にしていたグラスをグイッと飲み干した。
「どうしたの、香稟ちゃん。さぁ、キミも飲みなよ。記念すべき二人の祝いの美酒を・・・。」
彼の巧みな語りかけに、香稟の心はいつしか、不思議なぐらい解放されていた。
彼女はついに、手にしたグラスに注がれた、成功を意味するワインに口を付けた。
「どう、おいしいでしょ？」
香稟はスッキリとした表情で、素直なままに口を開いた。
「ホントだ、すごくおいしい・・・。ワインって、こういう味なんですね。」
「ハハハ。このワインは高級なんだよ。その辺のスーパーで安売り

してるワインとは別格だからね。」
「そうかぁ・・・。それじゃあ、これはめったに飲めないワインなんですね？」
「そういうことさ。」
一口のボジョレー・ルマンによって、こわばっていた彼女の心は自然と和らぎ始めていた。
連章はニヤっと不敵な笑みをこぼす。その笑みは嫌なほど、彼の裏側にある卑しさを感じさせる。
「この女も、もうオレの手の中だな・・・。」
彼の欲望がそうささやいていた。
香稟は酔いしれて、目の前にいる色欲魔にすっかり心を許している。
ガードが甘くなった女性ほど、あっけないものはない・・・。連章は妖しげにそうつぶやく。
連章の強引とも言える酒の誘いに、香稟は徐々に理性が失われていく。そして彼女は、果てしない後悔の渦へと巻き込まれていくのだった・・・。

＊　◇　＊

「う、うう・・・。ん・・・。」
香稟はゆっくり目を開ける。
彼女の開けた瞳に映るもの。それは、豪華な装飾をあしらったシャンデリア。
彼女は、その見慣れない天井に放心状態となる。
「よう・・・。ようやく目覚めたかい？」
聞き覚えのある声。
香稟は激しい頭痛に襲われながら、ゆっくりとその身を起こした。
「・・・ここは？」
彼女は朦朧とした意識の中、辺りを見渡す。
まったく見たことのない戸棚、洋服ダンス、机、ソファーベッド、

そして・・・。
「れ、連章さん・・・！？」
「ぐっすり眠っていたようだな。まぁ、あれだけワインを飲んじゃ、無理もないがね・・・。」
連章はクスクス笑いながら、ブランデーグラスをテーブルへ乗せた。
「こ、ここはどこですか！？」
「オレの家さ。とはいえ、オレがプライベートで借りてるマンションの一室だけどな。」
「え！？そ、それじゃあ、今日子さんはどこに・・・？」
「心配することはない。彼女にはオレから言っておいたからさ。」
「え、どういうこと・・・！？」
連章は目を細めて、香稟に向かってにやけた顔を突きつけた。
「・・・今夜、オレの家でかわいがってやるから、さっさと帰りなってな。」
「！！」
香稟は恐怖のあまり青ざめた。
さすがの純情な彼女でも、このシチュエーションと連章の言葉に、今置かれている状況がどういうことなのかハッキリとわかっていた。
捕われの猫のように、体を震わせて身構える香稟。
「ハハハ、安心しなよ。別に痛い思いなんてさせないからさ。」
じわりじわりと、連章は彼女の元へ歩み寄っていく。
酒の影響からか、彼女はふらつくほどに気分が悪くなっていた。
それでも彼女は、目の前の色欲魔から、逃げるように後ずさりしていく。
「い、いや・・・！こ、こないで・・・！」
「おいおい、そんなに嫌がるなよ。おまえのマネージャーから了解もらってるんだぜ？言う通りにするのがアイドルってもんだろうが！」
「そ、そんな、まさか今日子さんが・・・！？」

連章は怒涛のごとく、ソファーにいる香稟目掛けてなだれ込んできた。
「キャアァ・・・！！」
抵抗する彼女の手をわし掴みする連章。ここにいる男は、あのニヒルでクールなタレントの連章琢巳などではなかった。
「お、おとなしくしろぉ・・・！へへへ・・・。いい思いさせてやるからよ・・・。」
「だ、誰か助けてぇー！！」
「へへ、誰もいるわけねぇだろうがぁ！！さぁ、おとなしく観念するんだ！！」
「いやぁぁ・・・！！」
彼女のピンクの唇に、鬼畜のような顔が押し付けられる瞬間だった。
『ガツン・・・！』
「ぐあぁぁぁ・・・！？」
連章はうめき声を上げると、ソファーの下へと倒れ込んだ。
香稟がそっと目を開くと、そこには、激しい息遣いをする、陶器製の花瓶を抱えた女性の姿があった。
「きょ、今日子さん・・・！？」
「さぁ、香稟！早く逃げるのよ！！」
新羅今日子は、素早く彼女の手を掴んで、全速力で玄関へと駆けていく。
「く、くっそ～・・・！」
叩き付けられた頭を抱えながら、痛さにうずくまる連章。
彼の目には、二人の女性の駆け抜ける足下だけが映っていた。
玄関のドアから急ぎ足で出ていく二人。そして二人は、マンションの前に止まっていた社用車へと乗り込んだ。
「早乙女クン、早く車出して！」
社用車はタイヤを滑らせて、ハイスピードでその場から走り出した。

香稟は、この事態が現実に感じられず、なかなか体の震えが止まらなかった。
「ゴメンなさい、香稟・・・。本当にゴメンなさい・・・。」
涙をこらえている新羅は、彼女と目を合わさないまま静かにつぶやいた。
香稟は唇を噛んで、この非常事態の真相を問いただす。
「・・・どういうことですか！？」
「・・・・・・。」
「答えて下さい！あの人、今日子さんには話を付けたと言ってました！ちゃんと、あたしにわかるように説明して下さい！」
涙を浮かべて、かすれた声で怒鳴りつける香稟。
「・・・今から6年前よ。」
新羅は両手で顔を覆い隠し、彼女自身の秘められた過去を打ち明ける。
「わたしがまだ、芸能人という肩書きだった頃、わたしはあの男と出会った。その頃の彼は、今ほど売れてはいなかったけど、レギュラー番組を数本持つぐらいの仕事はこなしていたわ。それに引き替え、その頃のわたしは年齢を増すことで、アイドルという名声をなくしかけていた時期だった。」
覆い隠した新羅の頬に、小さな涙がこぼれている。香稟の心はますます締め付けられる。
「事務所もその頃、あなたのようなスーパースターに恵まれず、資金繰りも悪化していたわ。あの男は、そんな火の車だった事務所を救ってやると、わたしに言い寄ってきたのよ・・・。」
新羅は悔しそうに、両手をひざの上に叩き落とした。
「あの男、連章琢巳はその見返りとして、わたしの体を要求してきたのよ・・・！」
「え・・・！」
ショックのあまり、香稟の表情が一瞬でこわばる。
「わたしは、社長である父を助けたくて、やむなくあの男と関係を

持ったわ。だけど、そんな気の緩みが、この先の悪夢を生み出してしまったの・・・。」
「ど、どういうことですか・・・！？」
「わたしが犯した行為がね、収賄罪といって違法行為を招いてしまったの。あの男、それをいいことに、わたしの事務所を脅し始めたのよ。もし逆らえば、この事実をすべてマスコミの前で明らかにすると・・・。」
「そ、そんな！ひ、ひどすぎますよ、それ！」
自分の犯した罪にさいなまれるかのように、新羅の表情は苦悩に満ちている。
「あの男、あなたに目を付けたのよ。わたしに向かってこう言ってきたわ。打ち上げパーティーから香稟を連れ出すから、その手伝いをしろってね。」
「・・・・・・。」
香稟はこの真相に、やるせない悲しみでいっぱいになった。
「・・・仕方がなかった。あなたをこんな目に遭わせたくはなかったけど・・・。仕方がなかったの・・・！」
「今日子さん・・・。」
新羅は悔しい涙を流し続ける。その涙は、彼女の心にある忌々しい後悔そのものだった。
「そういう理由があったのに、どうしてあたしを助けてくれたんですか・・・？もし、このことがマスコミに知れたら、事務所が大変なことになるのに・・・。」
「耐えられなかったのよ・・・。あなたは、まだこれからなのよ。そんなあなたを、こんな形で傷物にしたくなかった。たとえ、わたしの身がどうなろうとも・・・。」
「きょ、今日子さん！！」
香稟は涙をこぼして、新羅の温もりある胸に飛び込んだ。
それを受け止めた新羅は、胸の中の香稟をやさしく抱きしめていた。

首都高速を駆け抜ける社用車は、まるで何事もなかったかのように、ネオンきらめく市街地を走り去っていく。
秘められた芸能界の裏側が明かされた夜。その夜は静かに閉じていく。
しかし、この一連の出来事は、この日の夜のように静かには終わらない。
なぜならこの先、香稟にとって思いも寄らぬ展開が待っていたからだった・・・。

6．彼の揺れゆく想い

「編集長！ス、スクープですよ、スクープ！」
「何、スクープだとぉ？どんなスクープなんだよ？」
「この写真見て下さいよぉ！ほら、これ！」
「ん．．．。ここに写ってるのは、おまえ、まさか．．．！」
「ね！すごいでしょ！？これは大スクープですよ！こういう見出しはどうですか？あのトップアイドル夢百合香稟、売れっ子タレント連章琢巳との深夜の密会！」
「うんうん、これはすごいぞぉ！おい、明日の朝刊、これを載せろぉ！しかも芸能トップでだぁ！！」
あるスポーツ新聞社では、いきなり舞い込んだスクープに、激しいほど慌ただしくなっていた。
しょぼいトップニュースを予定していただけあって、降って沸いてきたようなこのニュースに、誰もが興奮の坩堝と化していた。
それは、スーパーアイドルにはあってはならない、夢百合香稟のスキャンダルだった．．．。

＊　◇　＊

翌日の朝、ここは唐草潤太の自宅である。
潤太は未だ夢の中にいた。
幸せそうな顔をして寝ている潤太。きっといい夢を見ているのであろう。
そんな彼の幸せを、大声と物音で一瞬のうちに破壊する者がいた。
『ドンドンドン！！』
「おい、兄貴！起きろよぉ！た、大変なことになってんだよぉぉ！！」
弟の拳太は叫びながら、とめどなくドアをノックしている。
突然の朝の慌ただしさに、潤太は深い眠りから目覚めてしまった。

「な、何だよぉ・・・？まだ、7時じゃないかぁ・・・。」
「と、とにかく起きろよぉ！と、とんでもない芸能ニュースやってるんだよ！！」
「・・・芸能ニュース？言っておくけど、ボクは誰かと誰かが結婚したとか、そういった話題に興味なんかないよ。」
「違うんだよ！香稟ちゃんのニュースなんだよ！」
「・・・香稟ちゃんの！？」
驚きのあまり、ガバッと起きあがった潤太。
彼はものすごい勢いで、自室のドアをこじ開ける。
「おい、香稟ちゃんのニュースって、か、彼女に何かあったのか！？」
眠気もぶっ飛んだ潤太は、ただならぬ表情の拳太に連れられて、居間にあるテレビへ向かって走り出した。
「・・・！」
潤太の目に映ったもの。それは、夢百合香稟のスキャンダルを報道する芸能ニュースの映像だった。
潤太は立ちつくしたまま、テレビに映るテロップを読み上げる。
「スーパーアイドル夢百合香稟に恋人発覚・・・。相手は売れっ子タレントの連章琢巳・・・。」
潤太は頭の中が真っ白になっていた。
予想もしなかった事実、この信じがたい事実に、彼はトンカチで頭を叩き付けられる思いだった。
「う、うそだろ・・・？ま、まさか・・・。」
「・・・やっぱりさ、香稟ちゃんも芸能人なんだよな。相手があの連章琢巳じゃあ無理ないよな・・・。」
「・・・・・。」
潤太は唖然としたまま、金魚のように口をパクパクさせている。
拳太は、このスキャンダル報道を詳しく説明する。
「昨日の夜に、連章の住んでるマンションに入っていく香稟ちゃんと、迎えに来たマネージャーと一緒に車で走り去るのを激写された

らしいよ。ドラマの打ち上げパーティーのあとの密会らしいね。」
「そうか・・・。」
潤太は崩れるように、テーブルの側にあった椅子に腰を下ろした。
彼の頭の中には、友人である色沼と浜柄の二人が話していた会話が思い浮かんでいた。
「つまり、ゲイノースキャンダル！夢百合香稟、連章琢巳とラブラブかぁ、とかいうニュースが飛び込んでくるかもってこと！」
あの二人の言葉が現実になるなんて・・・。
潤太はショックを引きずりながら、いつも通りに学校へと足を運んでいくのだった。

＊　◇　＊

その日、潤太の通う学校内では、言うまでもなく、夢百合香稟のスキャンダルの話題で持ちきりだった。
信じられずに悲観する者もいれば、予想通りだなと納得する者もいる。スーパーアイドルのニュースは、様々な反響を呼んでいたようだ。
この日の潤太は、めっきり覇気を失っていたのか、授業中はすっかり上の空であった。
彼は思い詰めた表情で、窓から見える雲をただ目で追うばかりだった。
「ふぅ・・・。」
彼の溜め息は、心の中のもやもやを表すかのように灰色がかっていた。

◇

時刻が午後3時を前にすると、潤太のクラス内がワイワイと騒ぎ始めた。
潤太は、側にいた友人の色沼に何事かと声を掛ける。
「なぁ色沼、みんな、どうしたんだ？」

「これから香稟ちゃんの記者会見があるんだ。ほら、だからテレビのところに集まってんだよ。」
色沼は教室備え付けのテレビを指さした。
そのテレビの周りには、夢百合香稟のコメントを一目見ようと、クラスメイトの半数以上が集まっていた。
「お、いよいよだぞ！」
いよいよ、3時から放映されるワイドショーが始まった。
番組の司会者が、夢百合香稟のスキャンダルを淡々とした口調で語り始める。
「おっと、オレも見なきゃな！」
この時ばかりは潤太も気が気じゃなく、急ぐ色沼の後に付いていく。
テレビのブラウン管越しに、報道陣に囲まれたスーパーアイドル、夢百合香稟の悲しげな姿が映し出された。
止まないフラッシュの嵐、四方八方から飛び出す集音マイク、そのすべてが、たった一人のアイドルへと向けられていた。
潤太は人混みの隙間から、テレビに映る香稟の映像を見つめた。
テレビからは、厳しくもしつこい報道陣の声ばかりが聞こえてくる。
「香稟ちゃん！この報道について教えて下さい！本当に連章さんと密会していたんですか！？」
「ハッキリ答えて下さいよ！連章さんとは正式なお付き合いをしてるんですか！？」
止まることなく続く報道陣の質問。
香稟は神妙な面持ちで、そのしつこい報道陣に向けて重たい口を開く。
「・・・確かに、連章さんのマンションに行ったのは事実です。」
香稟はうつむき加減で弁解を始める。
「だけど、あたしは、マネージャーと一緒に行っただけです！連章さんとマネージャーは知り合い同士だったので、それがきっかけで

お誘いされたんです・・・。」
　報道陣は、彼女に嫌なほど鋭く問い返してくる。
「しかし香稟ちゃん！確か、連章さんのマンションに入った時は、あなたと連章さんの二人だけって話だけど？マネージャーは迎えに来ただけって話だけど、それはどういうことですか！？」
「た、確かに・・・。確かに連章さんと二人きりだったけど・・・。マネージャーとはあとから合流する予定になっていたんです！」
「改めて伺いますが、香稟ちゃんは、連章さんとのお付き合いは否定する・・・。ということなんですね！？」
「・・・はい。連章さんとは、ドラマで共演しただけで、それ以上のことは何もありません・・・。」
　ざわつく記者会見の場に、マネージャーの新羅が割って入ってきた。
「あのすいません！時間に余裕がありませんので、本日はこれでご勘弁ください！」
　新羅は、香稟の手を取って会見の場から立ち去ろうとする。
　報道陣にもみくちゃにされながら、二人は逃げるようにその場を後にした。
　その一部始終を見ていた潤太のクラスメイト達。それぞれの意見は、まさに十人十色である。
「怪しいよなぁ。二人きりでマンションに行ってさ、何もないなんて有りえねぇよ。」
「そうかなぁ。あたしは何にもなかったと思うよ。だってさ、ドラマで共演してたとはいえ、たかが二時間ドラマでしょ？期間が短すぎると思うけどな。」
「いやいや、それはアマチャンの考えだぜ！相手はあのプレイボーイの連章琢巳だぞ。香稟もさ、ヤツの毒牙にかかったと考えるのが妥当だと思うぜ？」
「毒牙って、おまえ露骨な言い方するなぁ・・・。まるで、香稟がヤツに騙されたみたいじゃんか。」

「ん～。確かに連章の女癖悪いの有名だもんね。その線はまんざらハズレとも言い難いわね。」
クラスメイト達の、様々な意見を聞いている潤太。
今の彼は、自分の気持ちをどう整理したらいいのか、正直言ってわからなかった。
「おい、見ろよ。今度は連章のインタビューみたいだぞ！」
クラスメイト達が一斉に、テレビの画面に釘付けになった。
噂の相手である連章琢巳の澄ました顔が、テレビを通じて映し出された。
香稟の時と同じく、報道陣が津波のごとく彼を取り囲んでいる。
「連章さん、教えて下さいよ。昨日の夜は、香稟ちゃんと二人きりで過ごしたんですか！？」
こういう報道に慣れているのか、まったく動じる様子もない連章。
「ハッハッハ！ホントにあんた達の行動は、まるでハイエナ並だね。ちょっと新聞でスクープが出ると、ここぞとばかりに湧いて出てくるんだものな。」
「いやぁ、連章さーん。これがわたし達の仕事ですからね。ねぇ、その辺答えて下さいよ？」
連章はいつも通りの、クールでニヒルな表情で話し始める。
「ああ、香稟ちゃんがマンションに来たのは事実さ。だけど、途中で彼女のマネージャーに連れて行かれたよ。これからって時ね！」
「これから？連章さん、これからってどういう意味ですか！？」
「ハッハッハ！深い意味じゃないって。一応、そういうことだからさ。これで勘弁してくれないかな？」
「あ、連章さん、もう少しでいいからお願いします！」
連章は含み笑いを浮かべながら、さっそうとその場から去っていった。
連章のインタビュー映像が終わると、教室内は再びクラスメイト達の評論タイムとなった。
「やっぱりさ、間違いないんじゃない！？絶対二人できてるよ！」

「そうかも知れねぇな。アイツのあの言い方さ、ほら、前のスキャンダルの時と同じだったぜ？」
「それにさ、香稟の言い分と、連章の言い分とが食い違ってる部分もあるしな。果たして、それが何を意味するのか！？」
さっきまでは、恋人否定説と肯定説はちょうど半分ぐらいだったが、連章琢巳のインタビューを見終えた後、それぞれの意見は、ほぼ９０％近くが恋人肯定説に傾いているようだった。
潤太は信じたくない気持ちを抱きながらも、クラスメイト達の意見に流されそうになっていた。
「・・・アイドルは、やっぱりボクの住む世界の人じゃないんだ・・・。所詮、ボクと香稟ちゃんは、単なる知り合い同士に過ぎなかったんだ・・・。」
彼の心情は、そんなせつない思いで覆い尽くされていた。

＊　◇　＊

次の日、土曜日の夜だった。
潤太は心が激しく揺さぶられながらも、自分の趣味である風景画に没頭していた。
しかし・・・。
「くそっ！どうしても、いい色がでないなっ！」
彼は、今まで経験したことがないほど困惑していた。
見た目で普段通りを装っていても、頭の中は夢百合香稟のことでいっぱいだったのだ。
潤太は、彼女に連絡を取りたかったが、臆病風に吹かれていたようで、前日のニュースのあと、二人は音信不通のままであった。
「よし、こうしてみるか・・・。」
そんな取り留めない思いを紛らわそうと、彼はひたすら机の上のスケッチブックに集中していた。
その刹那、一階から彼の母親の声がこだまする。
「潤太～、電話よぉ！」

その母親の声に、彼はすぐさま反応すると、ドタドタと駆け足で階段を駆け降りた。
「まさか、香稟ちゃん・・・！？」
彼の心はうるさいぐらい激しく騒いでいた。
そんな彼の取り乱した姿に、母親は思わず呆気にとられた。
「あ、あんた、家が壊れちゃうわよぉ。」
母親の文句など聞く耳持たず、彼は奪い取るように受話器を手にした。
「も、もしもし！？」
「おう、オレだ、浜柄だよ。」
「・・・何だ、おまえかよぉ・・・。」
ガックリと肩を落とす潤太。
「何だよ、オレじゃなきゃ、誰だと思ったのさ？」
「いや、おまえには関係ないよ・・・。で、何か用かい？」
「ああ、さっき色沼から電話があってさ。明日の日曜日にどこか街へ出掛けようって話になったんだけどさ、おまえも付き合えよ。」
ありがたい誘いと思いつつも、潤太は素直に喜ぶことができなかった。
「・・・遠慮するよ、ボクは。何だか、そんな気分じゃないんだ。」
「おいおい、オレ達はおまえのために言ってんだぞ。最近のおまえ、やけに元気ないからな。オレ達がおもしろいところに連れていってやるからさ、付き合えって！」
潤太はしばらく考えた後、少しでも気を紛らわすことができればと、そう気持ちを方向転換していた。
「わかった、付き合うよ。で、どうすればいいの？」
「明日、おまえのところへ迎えに行くよ。だから、家で待機していてくれ。」
「わかった、それじゃあね。」
潤太は大きく溜め息をついて受話器を置く。
「・・・たまにはこういうのも悪くないかもな。そうと決まれば、

あの絵一気に仕上げなきゃ。」
『プルルル・・・、プルルル・・・』
『ドキッ！！』
彼が部屋へ戻りかけた途端、電話のベルが静かな廊下に鳴り響いた。
ゆっくりと電話機へ近づく潤太。
「・・・まさか、今度こそ。」
彼はやはり、香稟からの連絡を期待しているようだった。
彼は深呼吸ひとつして、そっと受話器を上げる。
「もしもし・・・？」
「おー、オレだ、色沼だぁ。ハッハッハ！」
繰り返し肩を落とす潤太。
「・・・何か用？」
「何だよ、おまえ、やけに愛想悪いじゃんかぁ！友達相手に、そういう態度はないだろ？」
潤太の声は苛立ちすら感じさせる。
「今、忙しいんだよ。用があるなら早めに言ってくれない？」
「わかったよ！あのさ、さっき浜柄にも言ったけどさ・・・。」
「ああ、日曜日出掛けようって話かい？もう聞いてるよ。」
「あら、そうなの？んじゃ、話は早いな。で、おまえどうするんだ？」
「ＯＫしたよ。特に用事があるわけじゃないしね・・・。」
「そうか！よし、それじゃあ、明日よろしくな！じゃあな。」
潤太は再び、大きな溜め息をついて受話器を置いた。
『プルルル・・・』
「わっ！？ま、またかよ。」
何ともしつこい電話である。これほど立て続けに電話が来る家も珍しいだろう。
潤太は恐る恐る受話器を上げた。
「・・・もしもし？」

「あ、わりぃ、わりぃ、浜柄だよ。すまねぇな。」
肩を落とすというより、もう怒り寸前だった潤太。
「もう、何なんだよ！？まだ何か用かい？」
「そう怒るなよ。あのさ、明日は、午前１０時過ぎにおまえのところにいくからさ。寝坊しないようよろしくな！」
「はいよ。で、もう終わりかい！？」
「ああ、それだけだ。じゃあな！」
潤太は叩き付けるように受話器を置いた。
もう、かけてくるな！彼の表情は、そう叫んだように見えた。
「ふぅ、やっと部屋へ戻れる・・・。」
彼は疲れ切った顔で、二階につながる階段へと足をかけた、その瞬間だった。
『プルルル・・・、プルルル・・・』
しつこさを通り越した電話のベルの音。
「あぁぁ、もう！あいつら、何回電話すれば気が済むんだぁ！！」
潤太は怒鳴りながら舞い戻り、鳴り止まない電話の受話器を掴んだ。
「もしもし！おい、しつこいぞ！言いたいことはまとめて言ってくれよっ！！」
「・・・あ、あの、もしもし？」
「えっ！？」
受話器から聞こえてきた声は、彼の友人たちの声ではなかった。
しかもその声は、彼にとって聞き慣れた、しかも懐かしい女の子の声だった。
「ま、まさか、か、香稟ちゃん？」
「・・・うん。久しぶりだね。」
「あ、ああ、ひ、久しぶり・・・。げ、げげ、元気だった？」
「・・・うん、なんとか。」
明らかにいつもと違う、陽気さが感じられないアイドルの声。
諦めていたはずだった彼女の声に、潤太は動揺を隠せずにいた。

「・・・もう、あたしのニュース見たよね。驚いたでしょ？」
「・・・うん、驚いてないといったら嘘になるかな・・・。」
彼女のか細い声は、あのテレビから流れた記者会見の時と同じように、悲しくてせつない音色のようだった。
「た、大変だよね、アイドルって。あ、あんなに報道陣に囲まれちゃってさ、大変だったでしょ？」
「うん・・・。」
「え、えーっと・・・。」
潤太は何を話したらいいのかわからず、言葉に詰まってしまった。
「ねぇ、潤太クン。あなたは、あたしの言ったこと信じてくれる？」
「え！？し、信じてるって・・・。」
「あたしが、記者会見で言ったこと・・・。」
「あ、ああ、そのことか。う、うん、ボクは信じてるよ・・・。」
潤太は揺れ動く心のままに、当たり障りないセリフをつぶやく。
しかし彼の心中は、香稟を信じてよいのかわからなかったのだ。
「ホントに？よかった・・・。あたし、潤太クンに信じてもらえなかったらどうしようかと思っちゃった。」
「香稟ちゃん・・・。」
ホッとしたのか、香稟の声の悲しさが少しずつ消えていった。
彼女のそんな気持ちを感じた潤太は、頭の中を覆っていたもやもやが、ゆっくりながらも薄らいでいく感じがしていた。
「あのね、潤太クン。明日の日曜日、ヒマかな？」
「え・・・。」
ついさっき入った予定を思い出し、潤太は言葉に詰まってしまう。
「あ。もしかして、もう予定がある？」
「ゴ、ゴメン・・・。実はついさっき、仲間と遊びに行く予定を入れちゃって。」
「そうか、残念。また今度だね。」
「ゴメンね。また、次の機会に声掛けてよ。」
「そうする。今日はもう遅いから、そろそろ切るね。それじゃあ、

おやすみなさい。」
「う、うん。おやすみ。」
潤太は静かに受話器を置いた。
彼はこの瞬間、正直ホッと胸をなで下ろしていた。
それは、彼女に対する不信感が消えていくような、そんなスッキリとした心情であった。
「あーあ。こんなことなら、無理やりアイツらの誘いに乗るんじゃなかったなぁ。」
先に入れてしまった日曜日の予定を、彼はひらすら後悔するのだった。

＊　◇　＊

翌日の日曜日。
この日は、今にも雨が降りそうな鉛色の空だった。
「ごめんくださ～い！」
唐草潤太家への来訪者は、前日約束をしていた色沼と浜柄のドタバタコンビだった。
「あら、いらっしゃい。ちょっと待っててね、今呼んでくるから。」
そんな二人に愛想よくする潤太の母親。
彼女は大声を上げて、二階で待機していた潤太を呼んだ。
しばらくして、二階から駆け降りてくる潤太。
「おはよう。」
「オッス、早く行こうぜ！」
潤太は、二人と一緒に曇り空の外へと出掛けていく。
「なぁ。今日さ、雨降りそうじゃないか？やっぱり、傘いるんじゃないかな？」
上空を見上げながら、不安そうな顔をする潤太。
「大丈夫だって！さっき天気予報チェックしたらさ、降水確率６０％って言ってたし。」
「おいおい、それ、やばくないかっ！？」

「バッカヤロウ！１００％じゃないんだから、心配ないって。ハハハハ！」
「そうそう。降ったら降ったでなんとかなるって！」
色沼と浜柄は、彼の背中を叩きながら高笑いした。この二人はどうやら、とんでもなく能天気な性格のようだ。
「それはいいとしてさ、今日はどこに連れていくつもりなんだ？」
「まぁ黙って付いてこいよ。こんな嫌な天気をスカッと晴らすような思いをさせてやるからよ。」
「？」
潤太はわけがわからないまま、のんきな二人に付いていくのだった。

◇

色沼と浜柄、そして潤太の三人は、中央線に乗って新宿駅に辿り着くと、すぐさま山手線へ乗り換えて、若者の街原宿へとやって来た。
「原宿はいいけど、ここで何すんの？」
「いいから付いてこいって。あ、あそこにいた。」
色沼は進行方向に向かって、大きく手を振っていた。
三人の視線の向こうで、カジュアルな服装の女の子三人組が手を振っている。
「もう来てたのか、待ったかい？」
「まぁね、５分ちょっとってとこかな。」
浜柄は、おどおどしている潤太に、その女の子三人組を紹介する。
「潤太。彼女たちね、オレのダチの通ってる学校の生徒でさ、今日はデートをお願いしてたんだ。」
「そ、そうなんだ・・・。」
「よろしくねぇー！」
潤太相手に、明るく振る舞う女の子達。
「あ、よ、よろしく・・・。」

潤太は人見知りな性格のため、その女の子達に恥じらいながらあいさつした。
「それじゃあ、出掛けるか。まずはどこ行く？」
「表参道の方ブラブラしない？ちょっと行きたいところあるから。」
「よし、行こうか。」
男女六人は、原宿駅から表参道に向かって歩き始めた。
最後列を無口で歩く潤太に、浜柄がにやけた顔で声を掛ける。
「どうだ潤太。なかなか、かわいい女の子ばかりだろ？今日は、積極的に行けよ。こんなチャンスめったにないんだからな！」
「せ、積極的って言われても．．．。どうすればいいのさ？」
「アホか、おのれは！そんな無粋な質問するんじゃない！気に入った子見つけたら、どんどん声を掛けろよ。おまえこのままだと、いつまで経っても彼女ができねぇぞ。」
「．．．そういうおまえらだって、いつまで経っても彼女できないじゃないか？」
「う．．．。」
思わず口ごもってしまい、当たってるだけに言い返せない浜柄だった。
「あ、ここ！ここ行きたかったんだぁ！」
「入ろ入ろ！」
女性陣は周りのことなどお構いなしに、お気に入りのお店へと突き進んでいった。
「オレ達、置いてけぼりじゃん．．．。」
男性陣は唖然としながら、彼女達のあとを追いかけていった。

◇

男女六人は、原宿界隈や渋谷へと繰り出し、ワイワイとにぎやかに楽しんでいた。
六人は休憩とばかりに、渋谷のとあるオープンカフェまでやって来た。

潤太は未だにこの雰囲気に馴染めず、女の子の誰一人とも、まともな会話をしていなかった。
それを見ていた色沼と浜柄は、何やらコソコソ話を始める。
「よし、そろそろ別行動といくか。」
「そうだな。時間も時間だし。」
浜柄はいきなり立ち上がり、まるで選手宣誓のように手を掲げた。
「みんな聞いてくれ。これからさ、一対一のペアになって別行動に入ろうと思う。」
「！？」
そのいきなりの発案に、飲みかけたアイスコーヒーを吐き出しそうになった潤太。
この時の女の子達の反応は、意外なほど前向きで率先的だった。
「いいよ。それじゃあ、どう分かれようか？」
発案者である浜柄がテキパキと話を進める。
「勝手で申し訳ないけど、男性陣が指名するってのはどう？」
「わかった。みんな、それでいい？」
女の子達は戸惑いもなく、あっさり賛成した。
この土壇場で、一人だけあっさりな思いでなかったのは、言うまでもなく潤太である。
色沼は、潤太の手を取って近くに引き寄せた。
「おい、おまえ、誰にするんだ？ハッキリさせろ！」
「ちょ、ちょっと待ってくれよ！ボ、ボボ、ボクそんなの決められないよ！」
「バカヤロウ！せっかく二人きりにさせてやろうとしてんだぞ？しかも、おまえを優先させてやるんだから感謝しろよな。」
「ボ、ボク、いきなり二人きりなんて、そんな急に困るよぉ・・・。」
「ここで勇気出さなきゃ、おまえいつまで経ってもこのまんまだぞ？」
「・・・・・・。」

潤太はいじけるように黙り込んでしまった。
色沼と浜柄は、ふぅーと溜め息をついて、ダメだこりゃのポーズをしている。
「仕方がねぇな。浜柄、オレ達で先に決めちまおうぜ。」
「そうだな。」
「・・・え？」
そんな潤太を置き去りにして、二人は女の子にあっさりと声を掛けるなり、お店を出ていこうとした。
「お、おい！ちょ、ちょっと待ってくれよ、二人ともぉ～！」
潤太の泣き叫ぶような声は、もう二人の耳には届かなかった。
テーブルに残っているのは、ただ汗をかく潤太と、指名されなかった一人の女の子がいる。
「ねぇ、あたし達もここ出ない？」
「あ・・・。う、うん。そ、そそ、そうだね・・・。」
とてつもない緊張感に包まれた潤太。
彼女のリードで、潤太は二人きりのデートへと連れ出された。

◇

「・・・・・・。」
「・・・・・・。」
渋谷の街を歩く潤太と女の子の二人。この二人に弾んだ会話はまったくない。
「ねぇ？」
「・・・え、何？」
「あんたさ、何もしゃべんないんだね。お腹でも痛いわけ？」
「い、いや、そういうわけじゃないけど。ハハハ・・・。」
乾いた笑いでごまかす潤太。
「あんた、名前は？あたしはね、ルミっていうの。」
「あ、ボ、ボクは唐草潤太・・・。」
「ふ～ん、よろしくね。」

「よ、よよ、よろしく・・・。」
「ねぇ、カラクサクンさ、何でそんなにビクビクしてんの？」
「え！？べ、別に何でもないよ・・・。」
潤太は何となく不思議に感じていた。
どうして、この女の子が近くにいるとこんなに緊張するんだろう。
香稟ちゃんが一緒にいる時は、こんな風になることないのに・・・。
「ねぇ！聞いてる！？」
「ハッ！？」
ボーっとしていた潤太は、彼女のつんけんした声で我に還った。
「ゴ、ゴメン・・・。何か言ったかい？」
「新宿に行こうって言ったの！どう？」
「ボクは構わないよ。どっちみち帰り道だから・・・。」
潤太とルミは、渋谷駅から山手線を経由して新宿へと向かう。
慌ただしい日曜日の電車内。潤太は手すりに捕まって、車窓から街並みを眺めていた。
「弱ったなぁ・・・。この子とどんな会話をしたらいいのか全然わかんないよ。いかにも今風で、ちょっと苦手な感じの子だし。あ～あ、こんなことなら、香稟ちゃんと会う方が断然よかったなぁ・・・。」
彼は愚痴をこぼすように、心の中でそうつぶやいていた。

◇

二人は新宿駅へと辿り着いた。
「こっちよ。ほら、早くしなよ。」
「う、うん・・・。」
もうすっかり彼女のペースである。というよりは、彼女が無理やり潤太を連れ回しているように見えなくもない。
二人は、新宿でおなじみのアルタの前までやって来た。
潤太は沈みがちに、彼女の後ろを重たい足取りで付いていく。
今日という一日を後悔して、潤太は呆けたまま歩いていたせいか、

前を歩いていたルミとぶつかってしまった。
『ドン・・・！』
「わっ！？ゴ、ゴメン。」
「ねぇ、それより、アレ見なよ。」
「え？」
ルミの示した方向にあったのは、アルタビルに装備されている大型テレビスクリーンだった。
そのスクリーンを目にした潤太の口は、けいれんを起こしたように震えだした。
「・・・ま、まさか。」
それは、彼が目を覆い隠したくなるようなニュースだった。
“スーパーアイドル夢百合香稟　連章琢巳との交際を認める！やはり二人はナイスカップルか！今日、その真相が明らかに・・・！”
「う、うそだろ？だ、だってあの時、彼女はちゃんと・・・！」
潤太は立ちつくしたまま、テレビスクリーンを見上げている。
「何だかんだ言っても、夢百合香稟も人の子だよねぇ。清純派アイドルなんて、この世にはいないのよ、きっと。ほら、早く行くわよ。」
「・・・・・・。」
「ちょっと、ねぇ、何ボーっとしてんのよ！早く行こうってば！」
「・・・悪いけど、もうボクのこと、放っておいてくれないか・・・。」
「は？」
潤太は呆然としながら、テレビスクリーンに映る、香稟のスクープ報道に釘付けになっている。
辺りを行き交う人の声や足音、走る電車の音、そして隣にいるルミの声すらも、今の彼にはまったく聞こえてはいなかった。
「何よ、コイツ、バッカみたい！！」
ルミは白けた顔で、潤太の側から消えていった。
「・・・・・・。」

スクリーンを見つめ続ける潤太の顔に、一滴の水滴が落ちてきた。
『ポツポツ・・・』
天から冷たい水が降ってくる。それは非情なまでに冷たい水色の雨だった。
辺りを歩いていた人々は、いきなりの雨をしのごうと、駅やビル内へと走り込んでいく。
「・・・・・・。」
潤太は、そんな慌ただしさの中でも、ただひたすらテレビスクリーンを見つめ続けた。
雨足はますます強くなって、小雨から夕立のような大粒の雨へと変わっていた。
彼はゆっくりと天を、鉛色した淀んだ空を仰いだ。
落ちてくる冷たい雨は、彼の心の悲しさと混じり合い、足下へと滴り落ちていく。
「ボ、ボクは・・・。ボクはどこまで信じたらいいの・・・？教えてくれよ、香稟ちゃん・・・！」
降り続いた雨は、潤太の全身を激しく濡らした。そして彼の淡い想いまでも、冷たい雨に浸透されていった・・・。

7．限りない愛の決意

「どういうつもりだ？あのＦＡＸ、マスコミに流したのおまえだろ？」
「・・・そうよ。どうしてわかったの？」
「そりゃわかるさ。あんなことができるのは、あの事務所じゃおまえ以外にはいないだろうからな。」
「フフフ・・・。もしかして、迷惑だったかしら？」
「ああ、ハッキリ言って迷惑だ。何たって、あのスーパーアイドルを振り回しちまったんだ。これじゃあ、オレはとんだ悪者にされちまうしな・・・。」
ここは、都内の某ラブホテルである。
薄明るいピンク色した室内には、一人の男と一人の女がいた。
二人は丸い形のベッドの上で、寄り添い合って密談している。
「おまえ、このことが社内にバレたら、それこそクビになり兼ねないぜ。」
「そうね・・・。まぁ、バレたらバレたで構わないけど。どうせ居心地が悪かったし、クビになったら、あなたの事務所に移れば済むことだし・・・。」
その女は色香を漂わし、横にいる男の耳元でささやく。
「ねぇ、本気であたしと結婚してくれるんでしょう？」
「・・・・・・。」
男はベッドから起きあがり、一人シャワールームへと向かう。
「ちょっと、琢巳！どうなのよ！？」
「それはおまえ次第だな。オレの本当の女になりたいなら、もっと名を売ることだ。どんな卑劣なやり方をしてもな。」
「・・・！」
その男は口元を緩めてニヤリと笑った。
女は悔しそうな顔をして、色っぽい口を閉ざしてしまった。

『シャアアアァァァ・・・』
その男、連章琢巳はシャワーで汗を洗い落としている。
ワイドショーを騒がせたあのニュース、夢百合香稟との交際を認める報道に、彼は少しばかり気が滅入っていた。しかし彼は、このスキャンダルを逆に利用できるとも考えていた。
「・・・まりみのヤツ、余計なことをしやがって。だがオレは、これでさらに芸能界において箔が付いたってもんさ。ここは下手に動かず、向こうさんの出方を見た方がよさそうだな・・・。」
彼は目をギラギラさせて、不敵な笑みを浮かべていた。

＊　◇　＊

同日の別の場所では、押し寄せてきたマスコミの対応に追われていた。そう、ここは「新羅プロダクション」。
事務所の社長室には、頭を抱える社長と、猛烈に激怒する新羅今日子の姿があった。
「お父さん、どういうことなんですか！？香稟はあの男とはまったく交際の事実はないわ！どうしてあんなＦＡＸがマスコミに流れたんですか！？」
「お、落ち着け、今日子！わしにとっても、あのＦＡＸの件は寝耳に水だったんだ！気付いた時には、例のニュースがテレビで取り上げられていてな・・・。だ、誰かが勝手にしでかしたことなんだ！」
「い、いったい誰がこんなことを・・・！？」
今日子は狼狽しながら困惑する。
同じ事務所内に、香稟を陥れようとする人物がいるのかと、彼女の脳裏に、そんな認めたくない思いがよぎっていた。
「この事務所のＦＡＸから送られたのは間違いない・・・。送信時刻から推測すると、あの日の朝９時頃、その時間じゃ、わしもおまえも、それに香稟もここにはいなかったはずだ。あの日の朝、この事務所にいた者が行ったと考えて間違いないだろう。」
「その日、誰がここに？」

「スケジュール表を見る限りは、受付の女性社員が一人、それに経理係で二人。あとは、九埼まりみのマネージャー担当の薙沢の計四人だ。」
「・・・・・・。」
今日子は、今後の対応について社長と話し合い、静けさが戻った社長室を後にした。
彼女はその足で控え室へと向かった。なぜなら、控え室で休んでいる香稟を自宅まで送るためであった。
「・・・香稟。」
「あ、今日子さん・・・。」
「行きましょ。」
「・・・はい。」
香稟と新羅を乗せた社用車は、香稟の住むマンション目指して突き進む。
重苦しい空気が車内を埋め尽くし、二人の胸を気が狂いそうなほど締め付けてくる。
香稟も新羅も、まったく顔を合わせることなく、ただ押し黙ったままだった。
社用車は、香稟の自宅へと辿り着いた。
『カチャ・・・』
ドアを開けて、ゆっくりと車外へ出た香稟。
「香稟、おやすみなさい・・・。」
「おやすみなさい、今日子さん・・・。」
「香稟。この件に関しては、そんなに気に病まないで。わたしが何とか解決するから。」
香稟は振り向かない。
「・・・はい。すいません・・・。」
彼女は暗闇の中に佇むマンションへと消えていった。

＊　◇　＊

次の日の夜のこと。
唐草潤太は夕食を済ませたあと、自宅の自室にこもりっきりだった。
彼は激しいほど苦悩していた。
夢百合香稟の交際事実肯定・・・。彼の頭の中は、その卑劣なほど悲しい現実にさいなまれていた。
「ふぅ・・・。」
机の上にあるスケッチブック。そこには、下書きだけが終わった風景画が描かれていた。
「あああ～、くそっ！！」
潤太は絵筆を床に投げつけた。
白いプラスチック製のパレットには、スケッチブックに描かれた風景を彩るための、数種類の絵の具が塗られていた。しかし、そのパレットに絵筆が付けられた痕跡はない。
心理的にも精神的にも悩んでいた彼は、色づけをすることができなくなっていたようだ。
「・・・・・・。」
彼はベッドの上へとなだれ込んでいた。
「まいったなぁ・・・。これじゃあ、絵に集中できやしないよ・・・。」
彼は目を閉じたまま考えた。どうして集中できないのか？どうしてやる気が湧かないのかを・・・。
「もう、ボクには関係ないんだ・・・。彼女には、彼女にふさわしい相手がいるんだもんな。ボクにとっては、少しでも楽しい思い出ができただけでも・・・。」
楽しい時間を一緒に過ごしたあの彼女の姿を、潤太は心の中から消し去ろうとする。もう彼は、香稟のことを忘れるしかなかったのだ。
「潤太～、電話よぉ～！」
自宅の一階から、甲高い母親の声が鳴り響いた。

「あ、はーい。」
潤太は重たい足取りで、一階にある電話機の元へと向かった。
「ほら、あの女の子みたいよ。よかったわね～。」
「・・・・・・・。」
冷やかす母親など見向きもしない潤太は、そっと受話器を耳にあてがった。
「もしもし・・・？」
「・・・潤太クン。ゴ、ゴメンね、こんな遅くに。」
「・・・いいよ、それより何か用かな？」
「あ、うん・・・。あ、あのね、その・・・。」
言いたいことが言えない香稟のもどかしさが、受話器を通じて、潤太に苛立たしく伝わる。
「ボクさ、今ちょっと取り込んでるんだ。もしだったら、またにしてくれないかな？」
潤太は冷めた口調で言い放つ。それは、彼女にとって凍える吹雪のように痛々しい。
「あ、もう少しだけ待って。あのね、今週のどこかで会ってくれないかな？」
「・・・会ってどうするの？」
「え？」
彼女は唖然として言葉を失った。
「ボクに、この前の報道のことを弁解する気なのかな？あのさ、もういいよ。」
「待って！あ、あれは、あたしのしたことじゃないの！事務所の誰かがあたしを陥れようとして・・・。」
「もういいよ！」
潤太は怒鳴り口調で叫んだ。彼はその時、自分とは思えないほど感情が高ぶっていた。
「もう、キミのことで振り回されたくないんだ！これ以上、辛い思いはしたくないんだ！だから、だからもう・・・。もう何も言わな

くてもいいよ・・・。」
「潤太クン・・・。」
「ボクのこと、しばらく放っておいてくれないかな？自分のこと、もっと冷静になって考えたいんだ。ゴメン・・・。」
『カチャン・・・！』
一方的に電話を切った潤太。
彼は置いた受話器を握りながら、悔しい涙をにじませていた。
そして・・・。事の真相すら信じてもらえなかった香稟は、切られた電話の受話器を持ったまま立ちつくしていた。
「・・・あたし、どうしたらいいの？どうしたら、信じてもらえるの・・・？」
彼女は、その場にひざまづいて泣き出した。その涙は、せつない色の川となって、彼女の部屋を濡らしていった・・・。

＊　◇　＊

翌日、夢百合香稟は、前日の潤太とのことでショックを抱えながらも、その日の仕事を予定通りにこなしていた。
香稟とマネージャーの新羅今日子は、ラジオ番組の収録を終えて、社用車で事務所へ戻る最中だった。
社用車の運転手は困った顔でつぶやく。
「まいりましたね。あのマスコミのしつこさは。」
「仕方がないわ。あれが、あの人達の仕事だもの。ほとぼりが冷めるまでは、わたし達から動かない方が無難よ。」
新羅は溜め息交じりでつぶやいた。
「・・・でも、誰なんですかね。例のＦＡＸをマスコミに流したの。だって、事務所の人間なのは間違いないんでしょ？」
「ええ・・・。」
香稟はうつむいたまま黙っている。
彼女にしてみれば、同じ事務所の関係者がＦＡＸを流したと思いたくはなかった。仲間と慕っている誰かに嫌がらせをされたことに、

彼女は深いショックを受けていたのだ。
「・・・でも、見当は付いてるわ。」
「え！？」
新羅の一言に、香稟と運転手はドキっとした。
「マ、マジすか、それぇ？」
「ええ。今日、その真相を問いただすつもりよ。」
「・・・！」
香稟の心は激しく動揺している。
その人物が誰なのか・・・！？彼女は知りたくない気持ちを抑えつつ、真実が明らかになるべく事務所へと向かっていった。

◇

『コンコン・・・』
「はい、どうぞ・・・。」
ここは「新羅プロダクション」のミーティングルームである。
「あ、新羅さん・・・。」
「ちょっといいかしら？圭子。」
ミーティングルームには、女優の九埼まりみのマネージャーを務める薙沢圭子がいた。
彼女は、九埼まりみのシステム手帳に、何やら書き込みをしている最中だった。
そんな彼女の元へ、新羅と香稟の二人は歩み寄った。
「どうしたんですか？新羅さんに香稟ちゃん。」
「あなたにね、ちょっと聞きたいことがあるの。」
「はい？な、何ですか・・・？」
新羅は単刀直入に、その質問をスパッと口にする。
「正直に答えて。香稟の交際肯定のＦＡＸ、マスコミ各社に流したの。あれ、あなたでしょ？」
「は！？」
鳩が豆鉄砲を喰らったような顔の薙沢。

「とぼけても無駄よ。あなた以外に、あのＦＡＸを送付できた人はいないのよ。」
確信を持ったような口調の新羅。
しかし薙沢は、まるで何のことと言わんばかりに反論する。
「ちょっと待って下さいよ。どうして、わたしがそんなことを？第一、わたしにそんなことをして、何のメリットがあるって言うんです？」
「確かにあなたにはメリットはないでしょうね・・・。だけど、まりみにはあったんじゃなくて？」
「・・・！」
突如、薙沢は顔色を曇らせる。
彼女の態度を伺いながら、新羅はさらに追求していく。
「まりみにとって、香稟の存在は邪魔に他ならなかった。以前から彼女、香稟に対して辛く当たってたしね。自分の方が先輩なのに、年下の香稟の方が人気があることに嫉妬していた。わたしがそのことに気付いていなかったとでも？」
「・・・・・・。」
険しい表情で口ごもる薙沢。
新羅は探偵気取りで、この事件の真相を打ち明ける。
「まりみは、香稟のスキャンダルをきっかけに、香稟を徹底的に陥れる作戦を思いついた。彼女は、ワープロで作成した文章をあなたに手渡し、その紙をマスコミ各社へ送付しろと命令した。あなたは逆らうことができず、引き受けるしかなかった・・・。どう？ここまでの推理間違ってる？」
「・・・新羅さん、勝手に推理するのは構いませんけど。それって、あくまでも憶測ですよね。わたしが送付したという物的証拠はあるんですか？」
容疑を否認する薙沢に、新羅はハンドバッグから取り出した紙切れを差し出した。
「何ですか、これ？」

「よく見てみて。これ、システム手帳の切れ端よね？この紙の柄って、今あなたが握ってるシステム手帳と同じ柄じゃない？」
「・・・！」
薙沢は動揺のあまり顔面蒼白と化した。
「そう。これはまりみのシステム手帳の切れ端よ。彼女、あなたにＦＡＸを送る命令を、システム手帳を利用して行ったようね。電話や、口答でのやり取りだと、誰かに気付かれる可能性があったはず。だから彼女は、いつものあなた達の連絡のやり取りを利用したのよ。」
「・・・・・・。」
新羅はさらに謎解きを続ける。
「あなた達は常に、そのシステム手帳でお互いのスケジュールの確認をしていたのよね。ＦＡＸを送る内容を確認したあなたは、証拠を隠滅しようと、システム手帳のその部分だけを破り捨てた。だけど、細かくちぎったせいか、この紙切れだけがゴミ箱に入らなかったみたい。」
システム手帳を隠すように手で覆う薙沢。彼女は視点が定まらず、新羅と目を合わせることができない。
「運が悪かったわね、圭子。その紙切れにはね、はっきりと書いてあったの。あなたが送ったという証拠がね。」
「え・・・！？」
その紙切れには、黒い文字が記されていた。
“ＦＡＸ↓××出版社　↓　○○テレビ”
「あっ！」
「ね？慌ててちぎったみたいだから、あなたはどこまで細かく破いたか確かめなかったようね。だから、そんな証拠を残しちゃったのよ。」
「・・・・・・。」
「あとね、この事務所のＦＡＸの送信履歴を辿ったわ。その紙切れに書いてある通りの順番でＦＡＸが送られていた。つまり、例のＦ

ＡＸを送付できたのは、そのシステム手帳を管理できるまりみ本人か、マネージャーであるあなた以外には考えられない、というわけよ。」

「・・・・・・。」

薙沢はもう逃れられずただ押し黙っていた。

目を閉じたまま、否定も肯定もしないといった感じで、彼女は黙秘権を貫き通していた。

「その様子だと、どうやらわたしの推理は間違ってないみたいね。やっぱり犯人はまりみなのね。」

「そ、そんな、まりみさんが・・・。」

香稟はショックのあまり、青ざめた顔でささやいた。

「ねぇ、圭子。黙っていたって何にもならないわ。お願い、正直に答えて。あなたが、まりみに命令されてやったことなんでしょう？」

『カチャ！』

突然、ミーティングルームのドアが開かれた。

そのドアの側に立っていたのは、渦中の九埼まりみ本人だった。

「ま、まりみ・・・！」

「新羅さん、あなたのご推測通りよ。あのＦＡＸを圭子に流すよう指示したのは、紛れもなくこのあたしよ。」

「そ、そんな・・・！」

香稟はその真実に愕然とした。

九埼はクスッと笑みを浮かべて、怯えている香稟を見据えた。

「あら、意外そうな顔してるわね。あなたには、すぐ悟られると思ってたのに・・・。」

九埼は開き直ったように、事の真相をすべて明らかにする。

「単純なことよ。あたしにとって、香稟は邪魔者なだけ。この子がいなきゃ、このあたしが事務所で一番のスーパースターになるはずだったんだからね。だけど、ドイツもコイツも、香稟、香稟って騒いじゃってさ。ハッキリ言ってしゃくに触ったわよ！」

香稟の怯えはさらに激しくなった。

「まりみ！たとえ、理由がどうであろうと、あなたのしでかしたことは許されないわ！」
声を荒げる新羅を、九埼はギロッとにらみつけた。
「フン、調子のいいこと言わないでよ！あんたにそんなこと言われる筋合いはないわ。あんたが昔、アイドルだった頃のスキャンダル、みんな知ってんのよ、あたし。」
「そ、それ、どういう意味よ！？」
「フフフ、あたしね、連章琢巳と付き合ってるのよ。１年ぐらい前からね。」
「何ですって！？」
新羅の表情が一瞬でこわばる。
新羅と連章の忌まわしい過去を知っていた香稟も、九埼の邪悪な笑みに背筋が凍りついた。
「ＦＡＸのことだけど、真相を公表しても構わないわよ。だけど、その真実をどれだけの人が信用するかしらね？フフフ・・・。」
「・・・まりみ。あなた、ここまでやったのなら、それなりの覚悟はあるんでしょうね？」
「ええ。この話、あんたの父上にでも報告したら？あたしの処分はどうぞお好きなように・・・。」
九埼はほくそ笑みながら、ミーティングルームを出ていった。
それを見ていた新羅は、彼女の計算尽くめの策略にショックを隠しきれない。
香稟も、九埼まりみの仕業と知ったことに、肩を落として立ちつくしている。
マネージャーの薙沢は、この事件の罪の大きさに反省してか、テーブルの上で大泣きしている。
芸能界で生き残るためにはどうすべきか？いかなる手段を使おうとも、一番を極めなければ意味がない。たとえそれが、いかに卑劣な行為であっても・・・。
香稟の頭の中に、信じたくない辛い現実が傷跡のように焼き付い

ていた。

＊　◇　＊

数日後、夢百合香稟と連章琢巳の新たなる報道が巷を賑わした。

“夢百合香稟　連章琢巳との交際は誤報！”

“事務所内のいざこざが原因か！？”

そんな報道が流れたにも関わらず、潤太の気持ちは相変わらずのままであった。

彼は今、のどかな昼下がりの学校の教室にいた。

クラス内は、やはりこの一連の報道に、やんややんやの大騒ぎであった。

「よ、相変わらず黄昏てんなぁ。」

潤太に声を掛けたのは、彼の友人の色沼であった。

「おまえさ。いい加減その暗い雰囲気やめにしないか？見てるとこっちまで気が滅入るよ。」

「放っておいてくれ・・・。」

「まったく！彼女、めちゃめちゃ怒ってたぞ。ほら、この前の日曜日の。たしかルミちゃんだったかな？」

「あ、そう・・・。」

抜け殻のような潤太からは、やる気といったものがまったく感じられない。まるで、無気力を絵に描いたような姿だった。

「そういえば、もう知ってるよな。香稟ちゃんの交際の誤報のこと。」

もちろん、その辺の情報は、すでに潤太の耳には届いていた。

「ああ、知ってるよ。朝のワイドショーでやってたから・・・。」

「何でも、同じ事務所にいた九埼まりみが勝手にやったらしいな。オレの見た雑誌によると、九埼ってのはどうも、事務所と確執があったみたいなんだ。まぁ、今回の事件はさ、彼女にとっては、事務所を出ていくいいきっかけだったんじゃないかな？」

「ふ～ん。難しいんだな、芸能界ってのは・・・。」

「まぁな。この報道と一緒にさ、九埼まりみの事務所移転報道も一緒にやってたよ。でも香稟ちゃん不幸だよな。九埼の裏切り行為の標的にされちゃったんだから・・・。」
「・・・・・・。」
潤太は、これからどうすればいいのか、その答えは未だに見つかってはいない。
たとえ、香稟の交際報道が誤報だったとしても、今更彼女にどう接したらいいのかわからず、彼の心情は行き場のないせつなさに満たされていた。

＊　◇　＊
その日の夜である。
「さてと・・・。それじゃあ行ってくるか。」
潤太は夜にも関わらず、スケッチブックを抱えて静まり返った屋外へと出掛けていった。
彼は、描きかけの風景画の色づけに手間取っていたため、自分の目で新しい色を見つけようと考えていた。
夜7時過ぎ、一人の少年が夜の闇へと消えていった。

＊　◇　＊
『キンコーン・・・』
潤太が出掛けて数十分、唐草家に来訪者が現れた。
居間でくつろいでいた潤太の母親は、予想もしない呼び出し音に戸惑いながら、玄関先の電灯を灯す。
シルエットに映るその来訪者は、髪の長い体の小さな女の子であった。
カギを開けて玄関の扉を開けた母親。
「どうも、こんばんは・・・。」
「あらぁ！あなたは確か、えっと、そうそう、アイドルの！」
「ご無沙汰してます。夢百合香稟です。こんな時間にすみません。」

母親は、いきなり来訪した香稟に暖かく接していた。
「何言ってるの。そんなこと気にしなくていいわよぉ。」
「あの・・・。潤太クンは？」
「あの子ね。さっき出掛けちゃったのよぉ。何でも、描きかけの絵の色がどうのこうのって言ってたわね。」
香稟は残念な思いに肩を落とした。
「・・・そうですか。この時間ならいると思ったんですけど。」
「ゴメンなさいねぇ。でも、そんな遠くには行ってないはずよ。確かねぇ・・・。」
母親は腕組みしながら、潤太の行き先を思い起こそうとした。
数秒後、その答えは香稟の耳へと伝わった。
「そうそう！駅前のタカラビルの屋上って言ってたわ！」

＊　◇　＊

「わぁ。今日は一段と夜景がきれいだ・・・。これなら、いい色を見つけることができそうだ。」
潤太は駅前のタカラビルの屋上へと来ていた。
このタカラビルは、地上１５階建てのオフィスビルである。
このビルはオフィスビルだが、毎晩１１時までは、夜景を楽しむ一般人向けに、屋上だけを開放する気の利いたサービスを行っているのだ。
というわけで、潤太の周りには、夜景を楽しむ人達が少なからず見受けられる。
彼はそんな人の目も気に留めず、明かりが照らす手すりの上にスケッチブックを広げた。
「そうか、ここはこういう色がいいかも。」
彼は描きかけの絵に、下書き用の色鉛筆を当て始めた。
何色もの色鉛筆を取り出し、彼はネオンサインの夜景から新しい色を探し出している。
「・・・・・・。」

彼はふと、走らせていた手を止めた。
「・・・どうしてだろう？なぜ、いい色にならない？どうしてなんだ！」
彼は頭を垂らして心の中で嘆き苦しんだ。
このスランプから脱出するきっかけはどこにもないのか！？そんな苦悩に、全身を覆い尽くされそうなった瞬間だった。
「・・・？」
彼は、背後からやって来るやわらかい風を感じた。
その風はほのかに暖かく、彼の体を温めながら、闇の中へと吹き抜けていく。
そして、その風に乗って届いた声は、懐かしいほどやさしい彼女の声だった。
「きれいだね、ここの夜景。」
「！！」
潤太は勢いよく振り向く。
彼の後ろに立っていたのは、彼が思っても見なかった人物だった。
「か、香稟ちゃん・・・！」
彼はつい大声を上げそうになったが、周りにいる人々に気付かれたらマズイと思って、声のトーンをグッと抑えた。
「お家を訪ねたらね、おばさまがここにいるって教えてくれたの。」
「そ、そう・・・。」
香稟は、潤太のすぐ隣の手すりまで歩み寄り、遠くまで見える夜景へと視線を送った。
「こんなところに、こんな素敵な場所があったなんてびっくり。よく来るの？ここ。」
「う、うん。気が向いたらね・・・。」
潤太はおもむろに、すぐ側にいる香稟を見つめる。
彼女の容姿は、遠くのネオンに反射するかのように、透き通るぐらいに輝いていた。
忘れることが出来なかった潤太のはかない想いが、彼女をそんな

風に見せていたのかも知れない。
「もう、会えないと思ってた。この先、ずっと、あなたに会えないと思ってた。」
「・・・ゴメンね。ボクの勝手ばかりで。」
「ううん。あなたは何も悪くないわ。悪いのは、全部あたしの方だから・・・。」
「悪いのはキミじゃないよ！同じ事務所にいた、えっと、あれ、誰だったかな・・・？」
戸惑うばかりの潤太に、悲しげな顔をそっと向ける香稟。
「元をただせば、あたしがいけないの。あたしに、アイドルなんて肩書きさえなければ・・・。」
彼女の表情は、やりきれない想いをそのまま映していた。
「放っておいてくれと言われたのに、勝手に会いに来ちゃってゴメンなさい。正直言って迷惑だったでしょ？」
「いや、そんな、迷惑なんかじゃないよ。」
香稟はもう一度、美しく輝く夜景へと目を向けた。
「あたしね。もう、あなたに会えないなら、最後に言っておきたいことがあったんだ。」
「え・・・？」
香稟は口元を緩めて、かわいらしい笑みをこぼした。
「あなたと初めて会った日・・・。ホントに、偶然としか思えない出会いだったよね？」
「うん。今思えば、あんなこと現実にあるのが不思議だったよ・・・。」
「あたしのわがまま無理やり聞いてもらっちゃって。あの時、すごく楽しかった・・・。」
「ボクもすごく楽しかった・・・。あんな風に女の子と遊んだこと、今までなかったからなおさらだったよ。」
「一緒に横浜の八景島にも行ったよね？あの時の潤太クン、おもしろかったわ。フフフ。」

「や、やだな・・・。その笑い、さてはあの落下するヤツのことだろ？やなこと思い出さないでくれよ～。」
「フフフ、ゴメンね。でもみんな、あたしにとって絶対に忘れることのできない、最高の思い出・・・。」
「それは、ボクもだよ・・・。」
二人はいくつもの思い出を振り返る。お互いが、その思い出の一つ一つを忘れたくなかったかのように・・・。
「・・・いつからかわからないけどね、あたし、大切なことに気付いたの。」
「何を？」
「一緒にいる楽しさを・・・。」
「え？」
香稟は、潤太と目を合わせる。
彼女の瞳には、ドキッとした顔の潤太が映っていた。
「あなたと一緒にいることの楽しさを・・・。これからもずっと感じていたかった・・・。」
「か、香稟ちゃん・・・！？」
香稟の垂らした頭は、横にいる彼の胸の中にあった。
夜風になびいた彼女の長い髪が、潤太の照れた頬をやさしく撫でている。
「・・・。」
思いも寄らぬ展開に、潤太の体はカチンコチンに硬直した。
自分の胸の中には、あのスーパーアイドルの顔がある。
ドックン、ドックンと、彼の鼓動はますます激しくなる。
「あたしね・・・。あなたの絵を初めて見た時、今までに感じたことのない衝撃を受けたの。それは、絵の上手さにびっくりしたんじゃなく、何て言っていいのかわからないけど、胸がね、すごく熱くなった気がしたの・・・。」
「香稟ちゃん・・・。」
潤太にもたれかかったまま、胸の内を語り続ける香稟。

「あなたの描く風景には、人は描かれていないけど、その風景を見ている人がいるわ。あなたが、あたしにくれた代々木公園の絵画、今でも大事にしてるよ・・・。あたしだけじゃなくて、あなたも一緒に見ている、あの絵の中にある思い出の景色を・・・。」
彼女はゆっくりと、潤太の胸から離れた。
「・・・潤太クン。今まで、ホントにありがとう。素敵な思い出をくれて・・・。」
彼女の瞳から、宝石のようなまばゆい涙がこぼれていた。
「さようなら・・・。」
彼女は、立ちつくす潤太の側から一歩、そして一歩と離れていく。
潤太は無意識の内に、彼女に向かって叫んでいた。
「香稟ちゃん！ま、待ってよ・・・！」
彼女の足がピタリと止まった。
「ずるいよ香稟ちゃん！自分のことばかり告げて行っちゃうなんてさ！ボクの気持ちはどうなるんだよ！？」
「潤太クン・・・。」
香稟は泣き顔のまま振り返った。
「この絵を見てよ・・・。」
「え・・・？」
潤太は、書きかけの風景画を彼女に見せる。
「もしかして、その絵って、ここ？」
「ああ。今日、どうしてここに来たのか・・・。それは、この絵を仕上げるために、新しい色を見つけるためだったんだ。」
「でも、潤太クンは、色を考えたり、色づけするのは、いつも自宅でするはずでしょ？どうして今日に限って・・・？」
スケッチブックを掲げる潤太の両手が、知らず知らずの内に震えだした。
「できなかったんだ。色が、いい色が見つからないんだよ・・・。こんなこと、絵を描き始めてから初めてだった。どうしていいのか、どうしてこんなことになったのか。自分でも、その答えがわからな

かった・・・。」
「・・・・・・。」
香稟は口をつぐんだまま、潤太のせつない声に耳を傾ける。
「でも、やっとわかったんだ・・・。ボクは、絵を手で描いていたんじゃなく、心で描いていたってことに・・・。」
「心で・・・？」
「ボクの心が絵を描こうとしなければ、ボクの絵は完成しない。絵を描きたい、描かなきゃいけないと、ボクの心がそう感じれば、ボクの絵は完成するんだ。」
「それじゃあ、潤太クンの今の心は、絵を描こうとしていないっていうの？」
香稟の問いかけに、小さくうなずく潤太。
「ボクの心は今、キミを見ているんだ・・・。ボクがどんなにきれいな景色を見つけても、ボクの心はキミを追っている・・・。ボクが美しい絵を描いても、ボクの心はキミの姿を描いている・・・。」
「潤太クン・・・。」
「香稟ちゃん、素直な気持ちで伝えるよ。ボクはキミのことが好きだ・・・。」
香稟と潤太の二人は、互いに見つめ合い、互いの気持ちが一緒だったことを確信した。
「だけど、ボクにはそれを言える勇気がなかった・・・。言ってしまったら、ボクはきっと、辛い想いをすることになる。そう思ったんだ。」
「どうして・・・？」
「キミがアイドルだから、芸能人だからだよ。所詮、ボクとキミは住む世界が違う。ボクはただの普通の高校生。でもキミは、日本中から騒がれるスーパーアイドル。どう見ても、好きになっちゃいけない人だ。そう思ったら、ボク何も言えなくなっちゃってさ・・・。」
「そんなの違う！」

「え？」
香稟は髪の毛を振り乱し、頭を大きく左右に振った。
大粒の涙を流し、彼女は大声で叫んだ。
「あたしは！あたしは何も違わない！あなたと何も変わらないわ！あなたと同じように遊んで、楽しんで、そして泣いて・・・。あたしは、あなたと同じ１７歳の女の子よ！！」
香稟は泣きながら駆け出して、潤太の胸の中へ思い切り飛び込んだ。
「香稟ちゃん・・・。」
「香稟じゃない。あたしは由里・・・。今のあたしは、信楽由里よ。お願い、アイドルじゃないあたしを見て・・・。香稟じゃなく、由里のあたしを・・・。」
二人はしばらくの間、そのまま抱き合っていた。
周りにいたギャラリーも、横目でチラチラ二人のことを見ていたが、薄暗かったせいか、まさか女性の方があのスーパーアイドルだとは、誰も気付くことはなかった。
「もう帰ろうか・・・。」
「うん・・・。」
気持ちを通わせた二人は、輝かしい夜景に別れを告げた。

◇

二人は腕を組みながら、夜の街を歩いていた。
時々、お互い顔を見合わせて、喜びを噛みしめるような笑みを見せ合っていた。
二人は新宿駅へとやって来た。ここは、二人にとって一時の別れの場所でもあった。
「ありがとう。ここまで送ってくれて。」
「ううん。できる限り一緒にいたかったんだ。」
「うれしい。」
もう二人の会話は、恋人同士そのものだった。

つながれた二人の手は、離れたくない気持ちを伝わせている。
「じゃあ、行くね。」
「ああ。ボクからも電話するよ。」
「うん。待ってる・・・。」
彼女は大きく手を振って、駅構内の人混み中へと消えていった。
潤太は、そんな彼女を見送りながら、心の中で決意をあらわにした。
「ボクはもう迷わないよ。どんなことがあっても、ボクは好きな人を信じ続ける。今も、そして、これからも・・・。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3928x/

彼女はボクのアイドル

2011年10月20日08時19分発行